

令和 7 年版  
森林総合研究所東北支所  
年 報  
NO. 66

国立研究開発法人森林研究・整備機構  
森林総合研究所東北支所  
盛岡市下厨川字鍋屋敷92-25  
TEL 019-641-2150  
FAX 019-641-6747



## まえがき

令和6年度（2024～25年）は森林研究・整備機構の第5期中長期計画の4年目にあたり、中長期期間を通してこれまで得られた研究成果や橋渡し活動を整理して、中長期目標を見据えた点検作業を行う時期となっています。東北支所では、分野横断的な重点課題として、1）先端地域の病虫害対策、2）広葉樹資源の有効活用を設定し、引き続き研究を進めています。

重点課題のうち先端地域の病虫害対策に関しては、現在、北東北へ分布を拡大しつつあるニホンジカについて、捕獲効率の向上を目的にした餌資源の特性に関する調査を各県や国有林と連携しながら進めています。また、東北全県で発生して30年近く経過したナラ枯れ被害林の回復過程に関する実態調査を行いました。さらに、岩手県内陸部におけるマツ枯れ被害の自然終息過程における媒介昆虫の行動に関する研究を進めています。

広葉樹資源の有効活用に関する研究では、山形県を対象にして収益向上のための用材率向上と、持続的な広葉樹資源の確保に向けた施業方法の検討を進め、針葉樹人工林を広葉樹林化させるに適した立地条件の解明に向けての研究を実施しています。また岩手県久慈市にある日本有数の白樺林の再生に向け、皆伐や地掻き起しが及ぼす影響を評価しました。

重点課題以外の研究でも多くの課題に進展がみられました。近年、生活圏への出没が相次いでいるツキノワグマの適正管理に向けて、地域間の遺伝的分化に関する研究に取り組んでいます。また、溪畔林や湿地帯における温室効果ガスであるメタン収支に関する研究を進めています。さらに、山村域における山菜や木の実の食利用の変遷を文献調査や聞き取り調査により明らかにしました。このほか、多雪地のスギ林における長期水文観測、ブナ林のCO<sub>2</sub>フラックス測定など東北地方ならではの研究成果を上げつつあります。

令和6年度は、岩手県林業技術センターや東北育種場との共同成果報告会は、鳥インフルエンザによる県内の養鶏場被害のため中止となりました。ラジオ放送「東北のもり」において、研究者自身が出演して紹介する活動も引き続き実施しました。一方、季刊冊子「フォレストウインズ」は、研究成果を分かりやすくお伝えする手段として継続して発行しました。令和7年度以降も、私たちは地道に調査や研究に取り組み、成果の普及や発信を色々と工夫しながら行っていきたいと思っております。東北地域の皆様には、東北支所の活動に対し、引き続き、より一層のご理解、ご支援をよろしくお願いいたします。

国立研究開発法人森林研究・整備機構  
森林総合研究所東北支所長 山中高史



# 令和7年版森林総合研究所東北支所年報

## 目 次

### I 研究の概要

1	令和6年度に東北支所で分担した研究課題	1
1-1	実行課題一覧	1
1-2	令和6年度研究概要	4
(1)	チーム長（動物生態遺伝担当）	4
(2)	チーム長（立地評価研究担当）	4
(4)	森林生態研究グループ	5
(5)	育林技術研究グループ	6
(6)	森林環境研究グループ	7
(7)	生物多様性研究グループ	9
(8)	生物被害研究グループ	10
(9)	森林資源管理研究グループ	12
1-3	研究発表業績一覧	14
1-4	研究資料	51
2	令和6年度の広報活動の記録	59
2-1	ラジオ番組「東北のもり」の放送	59
2-2	令和6年度岩手県林業技術センター・森林総合研究所東北支所・東北育種場合同 成果報告会（令和6年度中止）	59
3	令和6年度の会議等の記録	60
3-1	業務報告会	60
3-2	東北地域評議会	60

### II 業務運営資料

1	組織	62
2	施設・試験地等	63
2-1	土地・施設	63
2-2	共同研究に利用できる機器	63
2-3	固定試験地	65
3	研究の連携・協力	67
	科学研究費助成事業研究課題	67
4	地域連携のための会議等記録	68
4-1	令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会総会	68
4-2	令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会専門部会	68

4－3)	令和6年度林業研究・技術開発推進東北ブロック会議全体会議及び研究分科会	70
4－4)	産学官民連携の取り組み	71
4－5)	東北国有林森林・林業技術協議会	73
5	海外派遣	75
	技術協力・調査・研究	75
6	研修・講習	77
6－1)	派遣	77
6－2)	受け入れ	77
7	講師・委員等の派遣	78
7－1)	講師派遣	78
7－2)	専門委員派遣	79
8	視察・見学	83
9	刊行物	83
10	図書	83
11	諸会議	84
12	諸行事	84

# I 研究の概要





# 1 令和6年度に東北支所で分担した研究課題

## 1-1)実行課題一覧

課題番号・区分		課 題 名	責任者／担当者	予算区分	研究期間
1	重点課題	環境変動下での森林の多面的機能の発揮に向けた研究開発			3 ～ 7
1ア	戦略課題	気候変動影響の緩和及び適応に向けた研究開発			3 ～ 7
1アa	基幹課題	温室効果ガスの吸収・排出量の算定方法改善と気候変動影響評価手法の精緻化			3 ～ 7
1アa1	実施課題	物質・エネルギーの動態モニタリングによる気候変動影響の評価と予測技術の開発	小野賢二、森下智陽、木田仁廣	交付金	3 ～ 7
1アPF31	外部プロ課題	森林土壌の炭素蓄積量報告のための情報整備	小野賢二、木田仁廣	政府等受託【公募】	3 ～ 7
1アPF35	外部プロ課題	近接・衛星センシングと深層学習を駆使した土壌特性マップ群の創出	木田仁廣	科研費【競】	4 ～ 6
1アPF36	外部プロ課題	山火事耐性に注目した熱帯季節林のタケ類4種の共存機構	齋藤智之	科研費【競】	4 ～ 8
1アPF39	外部プロ課題	海面上昇下における群落レベルでのマングロープ立地変動とその規定要因の定量分析	小野賢二	科研費【競】	4 ～ 7
1アPF41	外部プロ課題	気候変動がもたらす生態系攪乱が森林の炭素吸収量に与える影響の長期広域観測とリスクマップの構築	森下智陽	政府等受託【公募】	4 ～ 8
1アPF51	外部プロ課題	森林土壌中で生成するモノテルペンが炭素・窒素循環プロセスにおよぼす影響	森下智陽	科研費【競】	6 ～ 7
1アPF59	外部プロ課題	地上観測およびデータ駆動型モデルを用いた森林土壌GHG交換量の評価に関する研究	森下智陽	政府等外受託【競】	6 ～ 10
1アPF64	外部プロ課題	永久凍土の融解が樹幹メタン放出におよぼす影響の評価	森下智陽	科研費【競】	6 ～ 9
1アPS1	交プロ課題	ネットゼロエミッションの達成に必要な森林吸収源の評価	久保山裕史	交付金プロ	3 ～ 6
1アb	基幹課題	気候変動緩和・適応のための多様な森林機能の活用			3 ～ 7
1アbPF11	外部プロ課題	アンデス・アマゾンにおける山地森林生態系保全のための統合型森林管理システムの構築	延廣竜彦	政府等外受託【競】	2 ～ 8
1アbPF12	外部プロ課題	森林技術国際展開支援事業	岡本隆、小野賢二	政府等受託【公募】	2 ～ 6
1アbPF16	外部プロ課題	岩石と場の特性を活用した風化促進技術“A-ERW”の開発	木田仁廣	政府等外受託【競】	4 ～ 9
1イ	戦略課題	森林生物の多様性と機能解明に基づく持続可能性に資する研究開発			3 ～ 7
1イa	基幹課題	生態系からみた森林の生物多様性に関する研究開発			3 ～ 7
1イa1	実施課題	生態系からみた森林の生物多様性に関する研究の高度化	大西尚樹、直江将司、野口麻穂子	交付金	3 ～ 7
1イaPF37	外部プロ課題	森林皆伐地はニホンジカにどれだけ餌資源を提供しているか？	酒井敦、高橋裕史	科研費【競】	4 ～ 6
1イaPF39	外部プロ課題	衛星ライダーデータを活用した、樹木種多様性と森林炭素量の同時推定手法の開発	野口麻穂子	科研費【競】	4 ～ 6
1イaPF52	外部プロ課題	気候変動下における落葉広葉樹の開花結実の変動パターン変化と生態系波及の基盤的反応	野口麻穂子	科研費【競】	5 ～ 9
1イaPF55	外部プロ課題	標高方向の種子散布が植生の分布変化に与える影響	直江将司、野口麻穂子	科研費【競】	6 ～ 10
1イaPF57	外部プロ課題	スギ・カラマツ人工林における広葉樹実生の更新と土壌菌類との関係解明	澤田佳美	科研費【競】	6 ～ 8
1イaPF61	外部プロ課題	高精細な地表面・植生情報を用いた山地植生の境界移動プロセスの解明	澤田佳美	科研費【競】	6 ～ 9
1イc	基幹課題	森林の生物多様性の保全と持続可能な利用に関する研究開発			3 ～ 7
1イc1	実施課題	森林の生物多様性の保全と持続可能な利用に関する研究の高度化	大西尚樹、工藤琢磨	交付金	3 ～ 7
1ウ	戦略課題	森林保全と防災・減災に向けた研究開発			3 ～ 7
1ウa	基幹課題	森林における水・物質循環の機構解明と環境保全機能の評価技術の開発			3 ～ 7
1ウa1	実施課題	水循環・物質循環が関与する森林の機能の評価技術の開発	延廣竜彦、綾部 慈子	交付金	3 ～ 7

# 1 令和6年度に東北支所で分担した研究課題

## 1-1) 実行課題一覧

課題番号・区分		課 題 名	責任者／担当者	予算区分	研究期間
1ウb	基幹課題	極端な気象現象に対応した山地・気象災害の軽減技術の開発			3 ～ 7
1ウb1	実施課題	森林の山地・気象災害軽減技術の高度化	岡本隆、小野賢二、萩野裕章	交付金	3 ～ 7
1ウbPF15	外部プロ課題	根系構造と根張り耐性特性に基づく海岸林の防災効果向上のための管理手法の提案	小野賢二	科研費【競】	3 ～ 6
1ウbPF26	外部プロ課題	地震動の時空間的ばらつきを考慮した高精度な地震時の斜面安定性評価手法の開発	岡本隆	科研費【競】	4 ～ 8
1ウbPS6	交プロ課題	迅速な災害復旧等に向けた時系列・三次元モデルを用いた国土履歴のAI判別技術の開発・普及	松浦俊也	交付金プロ	6 ～ 8
1ウbTF2	事業・助成課題	埋立造成地における50年間の森林と土壌の変遷：土壌生産力の獲得過程の中長期的評価	小野賢二、木田仁廣	寄付・助成金・共同研究	3 ～ 6
2	重点課題	森林資源の活用による循環型社会の実現と山村振興に資する研究開発			3 ～ 7
2ア	戦略課題	林産物の安定供給と多様な森林空間利用の促進に資する研究開発			3 ～ 7
2アa	基幹課題	維持管理コストの低い森林造成に向けた造林・育林技術の開発			3 ～ 7
2アa1	実施課題	造林・育林技術の実証とシーズ創出に向けた研究開発	齋藤智之、酒井敦、野口麻穂子、澤田佳美、田端雅進	交付金	3 ～ 7
2アaPF14	外部プロ課題	日本全国の林地の林業採算性マトリクス評価技術の開発	齋藤智之、直江将司、酒井敦、野口麻穂子、澤田佳美、木田仁廣	政府等受託【競】	5 ～ 9
2アaPF19	外部プロ課題	森の価値変換を通じた、自立した豊かさの実現拠点	酒井敦	政府等外受託【競】	6 ～ 15
2アaPF21	外部プロ課題	スギの種子生産における窒素資源の影響・窒素の動態と生産される種子の質・	小野賢二	科研費【競】	6 ～ 8
2アc	基幹課題	森林資源・空間の持続的な利用のための評価・計画・管理技術の開発			3 ～ 7
2アc1	実施課題	持続的な林業経営および森林空間利用のための評価・計画・管理技術の開発	松浦俊也	交付金	3 ～ 7
2アcPF2	外部プロ課題	多目的トレイルマッピング：多様な野外活動の適地推定による共存可能性の探索	松浦俊也	科研費【競】	2 ～ 6
2アcPF4	外部プロ課題	森林・入会の過少利用とアンチ・commons論：所有権論の地理空間学的転回	松浦俊也	科研費【競】	2 ～ 6
2アcPF20	外部プロ課題	令和5年度森林情報の高度化推進に向けた手法検討に関する調査委託事業	松浦俊也	政府等受託【公募】	5 ～ 6
2アcPF22	外部プロ課題	Cost-plus-loss分析による適切な森林調査手法の選択	久保山裕史	科研費【競】	6 ～ 8
2アcPS2	交プロ課題	無関心層を取り込んだ森林空間利用促進のためのアウトリーチ手法の提案	松浦俊也	交付金プロ	5 ～ 7
2アd	基幹課題	健全な林業経営確立、山村地域振興、持続的木材利用、新たな木材需要創出に資する方策の提示			3 ～ 7
2アd1	実施課題	多様化する森林との関わりを支える社会経済的・政策的方策の提示	久保山裕史、大塚生美	交付金	3 ～ 7
2アdPF8	外部プロ課題	森林を対象とした環境サービスへの支払い制度導入に向けた検討	大塚生美	科研費【競】	3 ～ 6
2アdPF14	外部プロ課題	私有林経営における森林資産評価の基準・プロセスの実態解明と統合可能性に関する研究	大塚生美	科研費【競】	4 ～ 7
2アdPS3	交プロ課題	EBPM実現のための森林路網B/C評価ツールの開発と社会実装	久保山裕史	交付金プロ	3 ～ 6
2イ	戦略課題	生物特性を活用した防除技術ときのこ等微生物利用技術の開発			3 ～ 7
2イa	基幹課題	森林・林業・林産物に対する病虫獣害軽減技術体系の開発			3 ～ 7
2イa1	実施課題	樹木・林業病害の実効的制御技術の開発	中村克典、鳥居正人、小澤壮太、田端雅進	交付金	3 ～ 7
2イa2	実施課題	森林林業害虫の実効的防除技術の開発	高梨琢磨、綾部慈子、磯野昌弘	交付金	3 ～ 7
2イa3	実施課題	森林林業害獣の実効的防除技術の開発	大西尚樹、高橋裕史	交付金	3 ～ 7
2イaPF29	外部プロ課題	カイコの聴覚：機械感覚毛による音受容機構の解明	高梨琢磨	科研費【競】	3 ～ 6

# 1 令和6年度に東北支所で分担した研究課題

## 1-1) 実行課題一覧

課題番号・区分		課 題 名	責任者／担当者	予算区分	研究期間
2イaPF33	外部プロ課題	ツキノワグマの駆除地域での管理ユニット策定と絶滅危機個体群での有害遺伝子の評価	大西尚樹	科研費【競】	4～6
2イaPF35	外部プロ課題	森林害虫ハバチ類の防除技術開発のための基盤研究：細胞内共生細菌への着目	綾部慈子	科研費【競】	4～7
2イaPF36	外部プロ課題	マツ材線虫病の局地的自然終息はどのようにして生じるのか	中村克典、小澤壮太	科研費【競】	4～6
2イaPF39	外部プロ課題	腐朽初期段階の樹幹傷における菌類相と腐朽進展との関連	鳥居正人	科研費【競】	4～6
2イaPF40	外部プロ課題	振動防除システムの構築：振動による樹木害虫の検知と行動制御	高梨琢磨	科研費【競】	4～6
2イaPF42	外部プロ課題	With / Postナラ枯れ時代の広葉樹林管理戦略の構築	酒井敦、大塚生美	政府等外受託【競】	4～6
2イaPF46	外部プロ課題	相次いで侵入した外来カミキリムシから日本の果樹と樹木を守る総合対策手法の確立	高梨琢磨	政府等外受託【競】	4～7
2イaPF47	外部プロ課題	雷の音によるシイタケ子実体形成促進のメカニズム解明	高梨琢磨	科研費【競】	4～6
2イaPF49	外部プロ課題	マツ枯れから侵入種・樹木病害・農業線虫まで：昆虫病原性線虫の共生細菌による防除	中村克典、小澤壮太	科研費【競】	5～7
2イaPF55	外部プロ課題	害虫防除および安定栽培のための振動農業技術の開発と実用化	高梨琢磨	政府等外受託【競】	5～9
2イaPF57	外部プロ課題	マツ樹木を利用するカミキリムシの寄生性線虫はマツノマダラカミキリに寄生できるか？	小澤壮太	科研費【競】	6～8
2イaPF61	外部プロ課題	日本と木材輸出相手国の樹木を外来病害虫から護る複合リスク緩和手法の開発	高梨琢磨、中村克典、綾部慈子、鳥居正人	政府等受託【公募】	6～10
2イaPS7	交プロ課題	低密度・高密度地域それぞれに対応したニホンジカの誘引・捕獲支援技術の開発	山中高史、酒井敦、高橋裕史、松浦俊也	交付金プロ	4～6
2イaPS13	交プロ課題	ツキノワグマの包括的な管理手法の開発	大西尚樹	交付金プロ	6～6
2イaTF6	事業・助成課題	屋久島における樹木寄生菌の多様性評価	鳥居正人	寄付・助成金・共同研究	6～7
2イb	基幹課題	きのこ等微生物の特性解明と生産利用技術の開発			3～7
2イb1	実施課題	きのこ等微生物の特性解明と生産性及び有益性向上技術の開発	山中高史	交付金	3～7
2イbPF13	外部プロ課題	国産トリュフの林地栽培に向けての技術体系の構築	山中高史	政府等外受託【競】	4～9
2イbPF14	外部プロ課題	着実な林地栽培に向けた菌根菌バカマツタケの有機物分解能と厚壁胞子形成能の有効性	山中高史	科研費【競】	5～7
2イbPF20	外部プロ課題	パルスパワー過渡現象刺激による担子菌のレスポンスと生長生理に関する科学深化	高梨琢磨	科研費【競】	6～9
2イb	基幹課題	木質バイオマスエネルギーの供給とエネルギー利用拡大に向けた技術の開発			3～7
2イb1	実施課題	木質バイオマスエネルギーの利用拡大を促進する技術の開発	久保山裕史	交付金	3～7
2イbPF7	外部プロ課題	農林水産業の生産管理とエネルギー需給が連携するL-EMS開発	久保山裕史	政府等外受託【競】	6～8

## 1-2) 令和 6 年度研究概要

### (1) チーム長 (動物生態遺伝担当)

大西 尚樹

#### ツキノワグマの遺伝解析

国内のツキノワグマの遺伝構造を明らかにするため、本州全域のツキノワグマの遺伝構造を縮約ゲノム (RADseq) 法にて解析した。その結果、本州中部が最も遺伝的多様性が高く、東北や中国地方など分布域の端では多様性が低くなることが明らかになった。地域間の遺伝的分化が進んでいたが、北陸地方は南アルプス、北近畿、紀伊半島といった周辺地域からの遺伝子流動を受け入れていることが明らかになった。

四国のツキノワグマの多様性を明らかにするために、四国由来のサンプルと、本州各地のサンプルを用いて全ゲノム解析を行い、データベース上のアジア大陸の個体由来のゲノムと比較した。その結果、四国個体群は本州個体群よりもホモ接合の連続性が高いことが明らかになった。しかし、本州および四国を含めた日本の各地の個体群の遺伝的多様性は、大陸よりも低いことが明らかになった。

Y 染色体上のマイクロサテライトマーカーから、ヒグマやアメリカクロクマなどの複数種での解析に有効なマーカーを選抜した。

### (2) チーム長 (立地評価研究担当)

小野賢二

#### 造成後 50 年経過した人工緑地における土壌有機炭素蓄積過程

東日本大震災をはじめ、近年相次ぐ自然災害からの復興では、盛土・切土を生育基盤とした森林整備が増えている。特に東日本大震災の津波被災海岸林再生では、津波被害の軽減に強い期待がある。造成土に成立させた海岸保安林において、波力減殺をはじめとする森林の多面的機能を発揮させるには、植物の生育の場である土壌の各機能 (生産、養分保持、保水・通気等) の持続性確保は不可欠である。重機使用が一般的な土木工事で整備される造成土は、植栽木の活着・生育不良を誘引するほどの強い圧密を受けており、自然土壌とは著しく異なる劣悪な土壌環境を呈する場合が多い。

そこで、本研究では、埋立造成地人工緑地を対象として、そこでの森林発達と土壌炭素 (SOC) 蓄積過程の変遷の解明を目的に、現地調査結果から地上部バイオマス (AGB) と SOC 量を試算し、造成後 50 年間の SOC 蓄積過程を明らかにした。毎木調査、土壌調査結果から、黒土を材料とした埋立造成地人工緑地の AGB と SOC は、それぞれ 233、486 MgC/ha と算出された。当該地は、造成後 50 年が経過していることから、AGB を 50 年で除して平均林分成長量  $\Delta y = 5 \text{ MgC/ha/年}$  を得た。リター発生量  $\Delta L$  は、既往文献より  $\Delta y$  と同程度とみなし、初期 SOC 量を 500 MgC/ha と仮定し、50 年間の SOC 量変化をシミュレートした結果、初期 SOC 量は、極端に高いリター残存率 ( $0.9 \text{ yr}^{-1}$ ) でのみ辛うじて維持し得ることが明らかとなった。既往研究における一般的な森林土壌のリター残存率 ( $0.4 \sim 0.7 \text{ yr}^{-1}$ ) は、時間と共に SOC 量が大きく減少していることから、人為影響の強い造成土の SOC 動態は、一般的な森林土壌と比べて大きく異なり、SOC 蓄積過程には、この特異な有機物分解環境が影響していることが示唆された。以上は造成土の SOC 動態を解明す

る上での重要な科学的知見である。

### （３）森林生態研究グループ

齋藤智之（グループ長）、直江将司

本研究グループは、森林の保全と利用の調和をめざして、様々な樹木の生態的特性や森林の成り立ちに関する研究を担当している。令和６年度に実施した研究や活動の主な内容は以下の通りである。

#### 米沢市の共有林による持続的な広葉樹林業を目指した施業方法

置賜地方は、山形県内でも木材生産量が最も少ない地方であるが、森林面積に占める広葉樹林率は最も高い。かつてこの広葉樹資源は薪炭材として短伐期で利用されていたが、今日では時代の変化とともに同用途では利用されなくなり、天然生の二次林が広がっている。本事例研究では、森林所有者の意向によりこうした広葉樹林を持続的に維持しつつ、管理費確保のために用材率を向上させ、持続的な広葉樹資源の利用を目指した施業方法を検討した。研究対象となる調査地は、米沢市の共有林で、所有する森林面積は約2,500haであるが、そのうち広葉樹林で施業を計画できる面積は約250haである。この中で近々に伐採を予定している林分に、資源量調査のため0.1ha前後の調査区を４箇所設定し、胸高直径5cm以上の高木種の胸高周囲長を測定した。現時点での資源量は、胸高直径が平均22.5～28.1cmで、立木密度が400～700本/ha、そのうち200～600本/haのブナが優占する林分である。この資源量の中で、用材丸太を生産することが可能な胸高直径30cm以上のブナは74～200本/ha、その他の広葉樹は46～170本/haであり、ウダイカンバ、ミズメ、ホオノキ、サワグルミなどが含まれた。間伐の選木方法は全層間伐を基本としているため、用材丸太の生産が可能な径級の全ての樹木を伐採するのではなく、胸高直径30cm以下の樹木も一定割合で伐採する予定である。今後は、一定期間後に繰り返し間伐を実施し、間伐材を利用しながら大径木が林立する森を後世に残せるような施業方法を模索していきたいと考えている。

#### 標高方向の種子散布が植生の分布変化に与える影響

温暖化が進むなか、標高方向の種子散布（以下、垂直散布）が、樹木および植生の分布変化にどのように影響するか明らかにする必要がある。そこで本研究では、さまざまな植生帯を持つ岩手山を主なフィールドとして、様々な散布タイプの樹木の垂直散布を実測することを目的としている。今年度は、垂直散布距離を推定する際に必要な検量線を得るために、種子サンプリングおよび酸素同位体分析を行い、標高と種子の酸素同位体比との相関を検討した。2024年に阿武隈高原でサンプリングしたコナラでは、標高と種子の酸素同位体比に相関が見られず、垂直散布の実測は不可能であった。一方で、2015年に全国でサンプリングしたブナでは、標高と種子の酸素同位体比に負の相関が見られ、これを検量線として用いることで垂直散布の実測が可能であると判断された。今後は、コナラの検量線の作成に再度挑戦するとともに、過去にサンプリングした散布種子の酸素同位体分析を行うことで、垂直散布の実測を進めていく必要がある。

#### （４）育林技術研究グループ

酒井敦（グループ長）、野口麻穂子、澤田佳美

本研究グループは、森林施業や自然撓乱に対する樹木をはじめとした植物の反応を、樹木生理学や生態学の観点から明らかにし、森林の育成に応用するための研究を行っている。本年度の主な研究成果は次の通りである

##### 針葉樹人工林の広葉樹林化ポテンシャルの評価

将来の持続的な林業・林産業に向け、地位・地利の良い場所を木材生産林とし、それ以外の場所では、生物多様性保全等の公益的機能を高めるため、広葉樹林へ転換することが検討されている。そこで、スギ人工林内の広葉樹稚樹の分布状況を明らかにするとともに、稚樹分布に与える地形の影響を評価した。調査は山形県金山町のスギ人工林で行った。林内にベルトトランセクト（幅 4 m、総延長 1,050 m）を設置し、出現した高木種の稚樹（樹高 30cm 以上）の樹種と樹高を記録した。地形傾度は、数値標高モデルから標高、傾斜、地形位置指数等を算出し、稚樹数との関係を解析した。対象林分での稚樹密度は約 4 千本/ha であり、コシアブラとウワミズザクラ（いずれも周食散布樹木）が半数を占めた。稚樹密度と地形との関係では、傾斜と有意な負の関係がみられた。金山町のスギ人工林内では、比較的多くの高木種の稚樹が生育しており、こうした前生樹の存在が伐採後の更新の確実性を高めると考えられる。一方、谷部などの急傾斜地では高木種の稚樹が少なく、伐採後の更新は難しいと予想される。

##### With/Post ナラ枯れ時代の広葉樹管理戦略の構築

東北地方に顕著なナラ枯れ被害が発生してから 30 年近くが経過し、現在日本海側では津軽半島、太平洋側では岩手県北部まで被害が広がっている。山形県では比較的早い時期にナラ枯れ被害が発生しており、被害発生直後の林分構造や更新稚等が報告されてきた。そこで、山形県小国町のナラ枯れ被害地において、2012 年から 2013 年にかけて調査された林分のうち 8 林分を特定して、2024 年 6 月に 10m×10m の方形区を設定し、胸高直径 4cm 以上の高木種の胸高周囲と樹高を計測した。また、各階層の植被率、種組成を調査した。ナラ枯れ被害発生当時の高木層の植被率は平均 45%（15～80%）だったが、2024 年には 60%（10～80%）まで増加した。また、亜高木層の植被率は被害当時平均 9%（5～20%）だったが、2024 年には平均 18%（0～50%）に倍増した。ブナ科樹木の立木密度（胸高直径 10cm 以上）は平均 375 本/ha（100～900 本/ha）と少なく、中小径木（胸高直径 10cm 未満）はほとんどなかった。また、低木層、草本層にもブナ科樹木はほとんど見られなかった。このように、ナラ枯れ被害地では林冠層の回復が進んでいる一方で、激害地では約 12 年経過しても高木層が回復していない場所もあることがわかった。また、林冠層が回復したように見えても、ブナ科樹木の本数が増加したわけではなく、次世代の中小径木、稚樹も少ないため、被害前の種組成の林分に戻るには長い時間がかかると考えられた。

##### 森林皆伐地はニホンジカにどれだけ餌資源を提供しているか？

東北地方はニホンジカの生息地域が拡大しており、林業被害が無視できない状況になりつつあ

る。近年人工林皆伐が進められる中、皆伐地における大型草食獣（シカ・カモシカ）の餌資源量を推定した。岩手県内のシカ生息密度が多い場所から少ない場所にかけて、4 か所の人工林皆伐地（釜石、川井、虫壁、矢櫃）に試験地を設け、それぞれ2 か所に4m×4mの防護柵を設置した。防護柵外の食痕を観察して、柵内の植生を刈り取る作業を2022年から2024年まで、5月から11月にかけて約2週間に1回行った。これらの皆伐地で葉がある時期に食べられた植物の乾重は、釜石で15～194 kg/ha、川井で32～197 kg/ha、虫壁で15～135 kg/ha、矢櫃4で42 kg/haと推定された。ワラビ等の忌避植物が繁茂したり、灌木が大きくなったところでは採食量が少なかった。また、2024年に釜石と虫壁で、下刈りを実施した場所としていない場所で採食量を推定したところ、下刈りした場所はしない場所より1.8～3.8倍に採食量が増えた。下刈り地では動物が採餌行動しやすい上、新しい茎葉が利用可能なため採食量が増えたと考えられた。

#### （5）森林環境研究グループ

萩野裕章（グループ長）、森下智陽、延廣竜彦、木田仁廣

本研究グループは、森林流域の水源かん養機能や森林生態系の炭素・養分動態、海岸林の再生などに関する研究を担当している。令和6年度に実施した研究や活動の主な内容は以下の通りである。

#### 湘南海岸砂防林の飛砂防備機能の評価

海岸クロマツ林は、全国的にマツ材線虫病による枯損や、本数調整の遅れによる過密化などにより、飛砂防備機能をはじめとする各種防災機能の低下が懸念されている。令和6年度末に、神奈川県湘南海岸の砂防林において、林内に到達した飛砂量分布の調査を実施し、現地砂防林の飛砂防備機能の評価した。調査地は、藤沢市から茅ヶ崎市に至る沿岸約5kmの範囲を選び、海岸!?に直交する方向で林帯幅が異なる場所に4測線を設けた。林帯幅は80～180mで、各測線には汀線側から内陸にかけて直線状に7～10個の飛砂受け箱を設置した。1カ月間に捕捉した飛砂量を解析した。飛砂量分布の実態として、いずれの測線においても林帯汀線側で飛砂量が多く、内陸に向かうにつれて急減した。汀線側に最も近い林帯前縁から5m地点の飛砂量を基準にすると、いずれの測線も前縁から60mで5%程度以下に、80mで2%、100mで1%程度まで減少した。4つの測線を比較すると、前縁から5m地点で最大4,000g/m<sup>2</sup>に達した測線があった一方、最少は217g/m<sup>2</sup>で、約20倍の差があった。この差は、砂防林より汀線側の飛砂の発生源となる海浜、砂草地、さらにサイクリングロードに堆積した砂の状態が大きく影響したものと考えられる。

以上の結果から、湘南海岸の砂防林は林帯幅に応じて飛砂量を低減させ飛砂防備機能を発揮できているといえる。しかし、内陸側の保全対象地へ到達する飛砂量は、砂防林の状況だけでなく、汀線側の状況も強く関与していることが示唆された。

#### 森吉高原の溪畔林生態系におけるメタン放出（吸収）量の推定

温室効果ガスであるメタンは、二酸化炭素よりも地球温暖化への影響が大きいことが知られている。一般に、森林生態系は土壌でメタンを吸収しているため、温暖化緩和効果を持つ。しかし、溪畔林のような森林生態系の場合、系内を流れる溪流や溪流沿いに広がる湿地は、メタンを

吸収せず、メタンを放出している可能性がある。さらにそのような環境にある樹木の幹もメタン放出源の可能性がある。そこで、溪流および湿地を含む試験区を2つ設け、試験区におけるメタン放出量を測定し、その放出量を試算した。

秋田県北秋田市森吉山麓高原に位置する溪畔林長期大規模モニタリングサイトにおいて、集水域内の溪流沿いに2つの試験区を設置して、土壌および主要樹種樹幹からのメタン放出量、溪流水中のメタン濃度を測定した。試験区1では、土壌でメタンを吸収する傾向が見られたが、樹幹からは土壌のメタン吸収量と同じような大きさのメタン放出量が測定された。溪流水中のメタン濃度は極めて低く大気レベルに近かった。一方、試験区2では、土壌からメタンが放出される傾向が見られ、樹幹からも同程度、あるいは土壌よりも大きなメタン放出量が測定された。試験区の面積（10×30 m<sup>2</sup>）、試験区内の溪流面積および樹幹面積を考慮して、それぞれの試験区からの総メタン放出量を計算したところ、試験区1では、土壌によるメタン吸収量が圧倒的に大きく、樹幹からのメタン放出量は土壌によるメタン吸収量を3%減らす程度であったが、試験区2では、総メタン放出量のうち樹幹および溪流水からのメタン放出量は合わせて10%に相当する見積もりとなり、土壌による総メタン放出（あるいは吸収）量への寄与が圧倒的に大きいことが示唆された。今後は、メタンフラックスの季節変動や空間変動を詳細に観測することで、本推定の精緻化を進めたい。

### シラカンバ林皆伐跡地における土砂移動量

岩手県内のシラカンバ林（平庭試験地）において、天然更新を目的として2022年冬に皆伐、2023年夏に下刈り、掻き起こしが行われた。これら施業が土砂移動に与える影響を明らかにするため、2022年から土砂受け箱を用いた土砂移動量観測を開始した。試験地内に①皆伐、下刈りのみ行ったプロット（①区：n=3）、ならびに②皆伐、下刈り、掻き起こしを行ったプロット（②区：n=12）、③対照区（n=6）の3パターンを設定し、皆伐、下刈り、掻き起こしが土砂移動に与える影響を評価した。

皆伐による土砂移動量（単位：mg m<sup>-1</sup> mm<sup>-1</sup>、以下略）は、対照区の4～5程度に対して、①、②区ともに7～11へと若干増加した。これは、皆伐に伴って樹冠が喪失したことによる、直達降水量の増加が原因と考えられた。次に、下刈りの影響を評価するため、施業前後の①区の土砂移動量を比較したところ、おおむね同程度の10前後の値を示した。これは、土砂移動量に下刈りが大きな影響を与えなかったことを意味する。掻き起こしの影響を検討するため、②区における施業前後の土砂移動量の変化に着目すると、10程度であったものが掻き起こし後には156～173へと顕著に増加した。また、2024年には12地点の平均で1000以上にまで増加し、一部では10000を越える観測地点も認められた。これは、掻き起こしにより土壌中の根系や土壌表面の落葉等が除去され、土壌が受ける雨滴の衝撃が顕著に増加した結果であると考えられた。

### 平庭高原シラカバ林の更新試験地掻き起こしによる土壌環境への影響

日本有数のシラカバ林である岩手県久慈市のシラカバ林では、シラカバの寿命が近づいており、更新技術の開発が求められている。シラカバは先駆的樹木の一つであるが、当該シラカバ林の多くは保健休養保安林に指定されており、北海道の先行事例のような大規模な伐採を伴う更新



を行うことができないため、伐採と土壌の掻き起しによる更新が可能となる最小面積の把握が求められている。

当該シラカバ林の一部を形成する民有林において、掻き起し更新試験地近くの未攪乱地 2 箇所における土壌断面調査を行った。また、掻き起し試験地内において、表層土壌の物理性を試験するための 100ml 円筒による未攪乱試料の採取と、化学性を試験するための攪乱試料の採取を行った。その結果、掻き起し更新試験地の周辺一帯は、林野の土壌分類において、東側が適潤性淡黒色土、西側が適潤性黒色土と分類された。また、70m 四方の試験地内で行った土壌の三相分布と定水位透水性の試験結果から、掻き起し区において固相率の増加(非掻き起し区≒13.4%、掻き起し区≒19.2%)と透水性の低下(5 分間通水量：非掻き起し区 6.5～17.5ml、1.3～6.4ml)が確認された。これは、掻き起し時の重機走行の踏圧による影響と考えられる。また、化学性については現在解析を進めているところである。

#### (6) 生物多様性研究グループ

高橋裕史（グループ長）、工藤琢磨

当研究グループでは、森林に生息する野生動物（哺乳類と鳥類）に関する研究を行っている。令和 6 年度に実施した研究の主な内容は以下のとおりである。長期的な研究については前年度以前の結果も含んでいる。

#### 積雪期のシカによるスギの利用

北東北においてニホンジカ（以下シカ）が分布を回復しており、農林業被害の激害化を防止するために生息密度の抑制が必要となっている。捕獲のための給餌にシカが執着しないことから、捕獲の効率化のために、シカによる餌利用の解明が求められている。シカによる冬期の餌利用として、これまで主にササの食痕に着目してきたが、より包括的に把握するため、ムラノほか(2024)にならい、シカの糞中に含まれる植物片の DNA メタバーコーディング解析を用いて採食された植物種の推定を試みた。これまでに秋田県田沢湖周辺で確認されているシカの越冬地 3 地点において、2025 年 1 月に同一個体由来ではないと判断される複数の新しい糞塊それぞれから 10 粒程度を採取した。各試料 2 粒ずつについて、ニホンジカ・カモシカ識別キットを用いてシカの糞であることを確かめたうえで、3-4 粒を DNA メタバーコーディング分析に供した。分析は生物技研(株)に委託した。その結果、糞塊 8 例中 8 例からスギが検出された。植物種を判定できた配列（リード）総数のうち、スギが占める割合は糞塊あたり 15%～60%に達した。これらのことから、採取地付近において、シカがスギを普遍的に利用している可能性と、スギ採食量は他の植物種に比べて相対的に多い可能性のあることがわかった。また自動撮影画像や食痕からは、シカがスギ壮齢木の下枝の生葉を採食したことが確認された。積雪による制約を受けにくいスギ壮齢木の葉は、北東北において積雪期のシカにとって重要な餌となりうることが考えられた。

### マツ材線虫病が猛禽類に及ぼす影響の長期モニタリング

猛禽類はマツで営巣することを好むため、マツ材線虫病で繁殖数が低下することが危惧される。マツ材線虫病感染区において、2016年から2018年と2023年から2025年の間に繁殖した猛禽類数を記録した。調査地は花巻市と紫波町を統合したものである。その結果、2016年は21つがい、2017年は24つがい、2018年は19つがい確認された。一方2023年には5つがい、2024年には4つがい、2025年には3つがい確認された。2016年から2018年にかけてのマツ材線虫病が原因となった営巣木の放棄は、25例であった。同様に2023年から2025年にかけての営巣木の放棄は、14例であった。これらのことから、マツ材線虫病により営巣木が枯損すると、巣を放棄するため猛禽類の繁殖数は劇的に減少することがわかった。

#### (7) 生物被害研究グループ

高梨琢磨（グループ長）、中村克典、綾部慈子、鳥居正人、  
小澤壮太、田端雅進、磯野昌弘

本研究グループは、森林に生息する昆虫や微生物、菌類などがもたらす生物被害の発生メカニズムの解明や、その管理技術に関する研究を担当している。中でも、東北地方で被害拡大が著しい松くい虫（マツ材線虫病）被害への研究対応には重点を置いており、鑑定依頼や行政による防除事業への助言、評価等の活動にも積極的に対応している。令和6年度に実施した研究や活動の主な内容は以下の通りである。

#### 振動によるクビアカツヤカミキリの行動阻害の検証

昆虫は基質を伝わる振動を感知して様々な行動反応をおこすことから、振動を用いた行動制御による害虫防除が可能となる。サクラ等の害虫であるクビアカツヤカミキリにおいて、これまで実験室内や野外において、振動による行動制御の効果が示されてきた。本年度、足利市の民有地に1列に植栽されたサクラ（ソメイヨシノ）を対象として野外試験を行った。磁歪式振動発生装置（東北特殊鋼株式会社製）を2台装着したサクラに100Hzの断続的な振動を常時与えた振動木（5本）を試験木、無処理のサクラを対照木（5本）とした。これらの試験木上のクビアカツヤカミキリ成虫の有無等を、発生初期の6月から末期の7月までのほぼ毎週、日中に毎時、目視による観察を行ない、加えてカメラ撮影（毎分）による行動解析も行った。その結果、目視による観察頭数は対照木より振動木が少なく、成虫の最盛期において半数以下となり、またカメラによる観察頭数も同様であった。さらにUVライトを用いて樹皮下に産卵された卵数を計測し、産卵密度を比較したところ、振動木では約3分の1以下となった。以上の結果は、振動が本種の定着及び産卵を阻害したことを示すものである。

#### マツ材線虫病の局地的自然終息過程の追跡と要因解明

マツ材線虫病の被害が終息に至りつつある岩手県北上市のアカマツ1林分において、流行の自然終息がどのような条件下で生じるのかを明らかにすることを目的に、調査区マツ林での罹病木発生モニタリングと媒介昆虫マツノマダラカミキリの発生数調査、ならびに近傍の苗畑に毎年植栽するアカマツ苗木への病原線虫人工接種による宿主感受性の年次変動の測定を経年実施した。

前継課題から継続調査してきた調査区マツ林での罹病枯死木の発生は、2015年以降基本的に低

調で推移した後、2021 年夏以降は 0 本で維持された。このことは、調査区マツ林における材線虫病の流行が終息したことを意味する。ただし、2023 年夏からは再度少数の罹病枯死木の発生が見られるようになり、外部から飛来する媒介昆虫による新規感染が生じたと考えられた。調査区マツ林におけるカミキリ成虫発生数は、2017 年以降 1～8 頭と低い水準を維持し、2022～23 年は 0 頭であった。苗畑でセンチウを接種したマツ苗木の枯死率（＝宿主感受性の指標）と、気温や降水量の年次変動との間に明確な対応は見られなかった。以上のことから、調査区マツ林で見られた材線虫病罹病木数の低減は、媒介昆虫の林内での増殖や林外からの飛来がない中で、過去の流行時にマツに感染した病原線虫による時間遅れ発症が時間の経過とともに減少、終息したことによるものと推察した。このような現象をもたらした媒介昆虫密度の低下は、東北地方のような冷涼な環境下では、材線虫病の病徴進展が遅れることによって媒介昆虫の成虫の活動期間を外れて発症・枯死するマツが増えた場合に起こりうるものと考えられる。

### 食葉性害虫モミハモグリゾウムシが利用可能な植物の調査

2021 年に岩手県のモミ・ウラジロモミ人工林において集団枯損が発生した原因は、甲虫目ゾウムシ科のモミハモグリゾウムシによる加害であった。モミハモグリゾウムシの大発生に伴う枯損被害は、これまでに 1998 年の雲仙岳のモミ天然林で知られているのみであり、岩手県での発生は 2 例目である。このゾウムシの利用植物として、これまでにモミ属のモミとウラジロモミの 2 種が記録されているが、日本に自生するモミ属の樹種は他にも存在し、モミハモグリゾウムシが利用する可能性は十分に考えられる。特に、岩手県での大発生が寄主植物 2 種の天然分布より北方で生じたことから、日本の北方地域や亜高山帯に自生するモミ属のシラビソやトドマツにおいても、将来的にこのゾウムシの被害を受ける危険性が懸念される。そこで、モミハモグリゾウムシがシラビソとトドマツを利用できるのかを明らかにするため、両樹種の葉を用いてゾウムシ成虫の簡易飼育を行い調査した。成虫をシラビソで飼育すると、成虫は葉を摂食し、長生きした個体で約 1 ヶ月生存した。これはウラジロモミで飼育した場合と同様の結果であった。一方、トドマツで飼育すると、成虫は葉を摂食せず、飼育に用いた全ての個体が 3 日以内に死亡した。モミハモグリゾウムシは、これまで記録されているモミ、ウラジロモミに加えて、シラビソも利用可能であることが明らかになった。一方、トドマツでは、モミハモグリゾウムシによる被害リスクがないことが明らかになった。

### クマ剥ぎ被害木における菌類の検出位置とそれらの病原力、腐朽力との関連

腐朽病害は特定の本材腐朽菌によって引き起こされるが、腐朽部とその周辺からは様々な菌類が検出され、材内では腐朽進展に伴って菌類相の遷移が生じていると考えられている。しかし、その菌類相の遷移が腐朽病害の発生において一般的な現象であるのか、また遷移が腐朽進展に影響を及ぼす可能性も考えられるが、どのような過程でその遷移が生じているかは明らかでない。本研究では、ツキノワグマによるスギ剥皮木に生じる腐朽を対象に、分離培養を用いて材内での菌類相の遷移を検証した。さらに遷移過程を推察するため、検出された菌類の病原力と腐朽力を、生立木、材片への接種試験によりそれぞれ評価した。分離の結果、各被害木で優占して分離された分類群のなかには、被害木の上部から下部、あるいは横断面上での剥皮された材外側から内部の腐朽先端部にかけて連続して分離頻度が異なるものがみられた。そのため、ツキノワグマによる剥皮害のような大きな樹幹傷に由来する腐朽においても菌類相の遷移が生じていると考えられた。また、菌類の検出位置と病原力あるいは腐朽力との間に明瞭な関係は認められなかつ

た。このことから、腐朽に伴う菌類相の遷移には、病原力だけでなく、菌類の材内からの栄養獲得能力や菌類間の競合関係も関与していると推察された。

#### 岩手県で捕獲したオオマルクビヒラタカミキリから分離された寄生性線虫について

マツ属樹木の枯死木や切株等を利用する穿孔性昆虫オオマルクビヒラタカミキリ (*Asemum striatum*、以下オオマルクビ) の寄生性線虫について、マツ材線虫病の媒介昆虫であるマツノマダラカミキリ (*Monochamus alternatus*) の生物的防除素材として利用可能であるかどうかを検討している。寄生性線虫のマツノマダラカミキリへの寄生能力の評価や実際の利用のためには、寄生性線虫の寄生強度や影響など基本的な生態を理解する必要がある、今年度はオオマルクビにおける寄生性線虫の生態及び影響を把握した。岩手県内の3ヶ所で捕獲したオオマルクビ雌雄成虫31頭を解剖したところ、11頭の血体腔に1～6頭の巨大な線虫雌成虫が寄生し(寄生率:35.5%)、生殖器官内部には多数の次世代の線虫幼虫が観察された。そこで、線虫が寄生していたオオマルクビ成虫8頭(雄2頭、雌6頭)について、線虫幼虫が生殖器官のどこに侵入しているのかを詳しく調べたところ、生殖器官の奥部(卵巣や受精嚢・交尾嚢)に0～約20,000頭の線虫幼虫が侵入していた。生殖器官内部に侵入した次世代の線虫は、寄主昆虫の産卵行動を利用して産卵対象であるマツ枯死木に伝播される可能性がある。また、約20,000頭以上の線虫幼虫がオオマルクビ雌1頭の卵巣内に侵入していたが、全ての卵巣小管に寄生していたわけではなく、寄生をまぬがれた卵巣小管で卵が形成、生産されていた。そのため、寄主昆虫を完全に不妊化させるような線虫の寄生による影響は見られなかった。

#### (8) 森林資源管理研究グループ

松浦俊也(グループ長)、大塚生美

本研究グループでは、木材生産から森林空間利用まで、多様な森林資源の持続的管理に向けて、経営・経済的な側面や地理的側面から研究している。令和4年度の主要な成果は以下の通りである。

#### 山村における戦後から現在の山菜や木の実の利用変遷の解明

山村における天然の山菜や木の実の食利用が、戦後、生育地の縮小や農作物の流通拡大に伴って段階的に縮小してきたことを、福島県南会津郡只見町における文献調査と町内3地区(旧村)の採取経験が豊富な高齢者計11名への聞き取り調査から明らかにした。同町では、計69種の食利用が確認され、(A)戦中戦後の食糧難期のみ利用(オオバコやクズなど11種)、(B)高度成長期に利用衰退(グミやキイチゴなど23種)、(C)減少しつつも利用継続(ワラビやゼンマイやクルミ類など33種)、(D)近年に利用開始(コシアブラなど3種)の4つのパターンに分けられた。これらの変化の要因として、(A)～(C)は、野菜や果物などを買う暮らしへの変化、河川・道路・圃場の整備や農薬利用、二次林や草地の管理不足による生育地の縮小、山菜や木の実の商品価値の低下、採取地へのアクセス性の低下が挙げられた。一方、(D)は他地域から利用法が伝わったことによるものだった。山菜や木の実の利用が少ない若齢世代に対して、地域間交流を進めるなどして地域の食文化に触れる機会を作ることが、地域の自然と文化の多様なつながりによって形成された食文化等の「生物文化多様性」を次世代に継承していくために重要と推察さ

れた。

### 東北地方の民有林における主伐と所有形態の関わり

戦後に拡大造林された人工林が 2000 年代後半頃から成熟し、東北や九州では素材生産量が増加している。こうしたなか、民有林では、所有規模の零細さや、共有、不在村所有といった所有形態が施業の阻害要因となっている可能性がある。そこで、東北地方における主伐地の分布の移り変わり、地形、気候、道からの距離、所有形態など多様な地理条件との関係について分析を行った。主伐地の分布は、30m 解像度の時系列ランドサット衛星画像分類で捉えられた 1985 年以降のデータ (Shimizu and Saito 2021) を用い、地理条件との関わりを重回帰分析した。その結果、東北の民有林のうち、豪雪地や小規模所有世帯率が高い地域は主伐が少ない傾向が一貫し、2010 年代以降、急峻地では主伐が少なく、針葉樹林では主伐が増加したなどの傾向が捉えられた。森林 GIS データを用いて詳細に分析した米代川上流域では、不在村者が所有する山林の伐採が少ない傾向や、近年、単位面積あたりの小班数や所有者が多い場所で主伐が増える傾向が認められた。主伐期を迎えて伐採傾向が変化し、所有形態が複雑な地域でも主伐が進みつつあると推察された。

### 森林再生と労働力問題

近年、地球規模の環境問題に対する消費者層の意識の変化や、コロナ禍など不安定な世界情勢の中で、国産材を見直す機運が高まり、伐採―再造林を基本とする森林再生にも関心が寄せられている。実際、林野庁のデータでも皆伐に対する再造林面積割合が増加傾向にある。だが、2005 年からの 15 年間で伐木・造材・集材従事者は増加したが、育林従事者は、40 代以下の若年労働者が微増したものの 50 代以上層が大きく減少しており、不足は深刻である。そこで、造林マイスター制度等の森林再生施策を打ち出している秋田県を対象として、森林再生と林業労働の現状を明らかにすることとした。秋田県林業統計における林業就労者数の推移によると、39 歳以下の割合は 2003 年には 1 割程度であったが、近年は 3 割水準に上昇し、若年化が進んでいた。さらに、39 歳以下と 40 歳以上の割合が概ね同じになり、年代間のバランスも良くなっていた。次に、2015 年以降の林業就労者数の推移を、組織形態区分（会社、森林組合、個人事業主、その他）に注目して分析すると、会社のみが増加傾向を示す一方で、会社以外の労働力は、森林組合の就労者数が 3 割減となるなど減少に転じていた。作業種別林業就労者数の推移では、全林業就労者数は横ばいではあったが、造林部門が 9 % 増加し、素材生産部門は 4 % 減少したことが注目された。組織形態別にみていくと、会社は、造林部門の林業就労者が 22 % 増加した一方で、素材生産部門が 2 % 減少した。森林組合は、会社とは逆に造林部門は 27 % 減少し、素材生産部門が 7 % 増加した。個人事業体は、造林部門、素材生産部門とも 1 割前後の減少であった。以上から、森林再生に向けた育林の労働力確保は、会社よりも森林組合において深刻な状況にあると考えられた。訪問調査において、森林組合の育林労働力減少の大きな要因として、植林・保育事業の減少があげられた。一方で、一人親方的な人材が植林・保育を担うケースも増えつつあった。すなわち、人口減少が著しい地域においては、森林再生施策等が充実してもなお、林業労働力確保に対する決め手がないことが指摘できる。

1-3) 研究発表業績一覧(支所職員は太字)

No.	著者名(全員)	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
1	北出雄生(森林総研PD)、木下晃彦、中村慎崇、山口宗義、 <b>山中高史</b>	国産白トリュフ、ホンセイヨウショウロ発生地における土壌細菌叢の通年モニタリング	日本菌学会大会講演要旨集、68:74	2024.05.
2	<b>山中高史</b>	「きのこ食文化ーきのこに魅せられ集う」をはじめるにあたり	森林科学、101:1-2	2024.06.
3	<b>山中高史</b> 、小長谷啓介、古澤仁美、野口亨太郎、山口宗義、小河澄香、木下晃彦、中村慎崇、北出雄生(森林総研PD)	日本に自生する白トリュフを継続的に発生させることに成功	森林総合研究所研究成果選集2024(令和6年版)、28-29	2024.06.
4	<b>山中高史</b>	食用菌根性きのこの栽培化に向けた研究の現在位置	山林、1682:2-8	2024.07.
5	MISAWA Hiroki(三澤碩希・信州大学)、TATEISHI Yu(立石悠・信州大学)、HORIMAI Yuka(堀米由夏・信州大学)、MIZUNO Aira(水野藍・信州大学)、HIDA Fuuma(飛田楓眞・信州大学)、FURUKAWA Hitoshi(古川仁・長野県)、KOBAYASHI Hisayasu(小林久泰・茨城県)、KAWAI Masataka(河合昌孝・奈良県)、 <b>YAMANAKA Takashi(山中高史)</b> 、FUKUDA Masaki(福田正樹・信州大学)、YAMADA Akiyoshi(山田明義・信州大学)	A useful PCR primer set for the ectomycorrhizal fungus Tricholoma matsutake in wild pine rhizosphere based on the nuclear ribosomal DNA IGS2 sequence(リボソームDNA IGS2配列に基づくマツ根圏におけるマツタケの有用なPCRプライマーセット)	Mycoscience、65(4):191-198	2024.07.
6	<b>山中高史</b>	我が国におけるきのこ栽培の推移と今後の展望	森林と林業、2024年9月号:14-15	2024.09.
7	<b>山中高史</b>	根と微生物／きのこ：マツタケ	図解でよくわかる根のきほん(誠文堂新光社、176頁)、:32-33／:118-119	2024.10.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
8	古澤仁美、仲野翔太、中村慎崇、野口享太郎、 <b>山中高史</b>	トリュフ菌定着苗木の植栽において苗木の定着に必要な土壌環境条件の検討	関東森林学会大会講演要旨集、14:29-30(特用4)	2024.10.
9	中村慎崇、木下晃彦、小長谷啓介、山口宗義、古澤仁美、北出雄生(森林総研PD)、 <b>山中高史</b>	国内二か所の苗木植栽地に発生したホンセイヨウシロウロの交配様式	菌根研究会大会講演要旨集(2024)、O12	2024.11.
10	NAKAMURA Noritaka(中村慎崇)、KINOSHITA Akihiko(木下晃彦)、NAKANO Shota(仲野翔太・森林総研PD)、FURUSAWA Hitomi(古澤仁美)、OBASE Keisuke(小長谷啓介)、YAMAGUCHI Muneyoshi(山口宗義)、NOGUCHI Kyotaro(野口享太郎)、KITADE Yuki(北出雄生・森林総研PD)、 <b>YAMANAKA Takashi(山中高史)</b>	Cultivation and mating of the truffle Tuber japonicum in plantations of ectomycorrhizal Quercus serrata seedlings(コナラ苗木植栽地におけるホンセイヨウシロウロの栽培と交配)	Applied and Environmental Microbiology、91(2):17	2025.01.
11	小清水利行(静岡大院総科技)、高津幸史(奈良森技セ)、 <b>山中高史</b> 、米田夕子(静岡大農)、河合真吾(静岡大農)	菌株の異なるバカマツタケが分泌する木材成分分解酵素の比較	日本木材学会大会研究発表要旨集、75:O19-P-03	2025.03.
12	古澤仁美、仲野翔太、中村慎崇、野口享太郎、 <b>山中高史</b>	トリュフ菌共生苗木の植栽において苗木の定着に必要な管理条件の検討	関東森林研究、76:165-168	2025.03.
13	山口宗義、中村慎崇、北出雄生(森林総研PD)、木下晃彦、 <b>山中高史</b>	土壌DNAを指標にした日本産黒トリュフTuber himalayense定量方法の確立	日本森林学会大会講演要旨集、136:165(M-8)	2025.03.
14	古俣寛隆(北海道立総合研究機構林産試験場)、前川洋平(北海道立総合研究機構林産試験場)、石川佳生(北海道立総合研究機構林産試験場)、柳田高志、高田依里、 <b>久保山裕史</b>	乾燥チップ生産・供給拠点の機能を担う木質ガス化CHP事業の検討	日本エネルギー学会誌、103(5):34-43	2024.05.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
15	有賀一広(宇都宮大学)、吉岡拓如(東京大学)、鈴木保志(高知大学)、金鉉倍(東京大学)、吉田智佳史、高橋正義、 <b>久保山裕史</b> 、斎藤仁志(岩手大学)	2024年度第1回木質バイオマス利用研究会報告	森林利用学会誌、39(3):109-112	2024.07.
16	<b>KUBOYAMA Hirofumi(久保山裕史)</b> 、TSUZUKI Nobuyuki(都築伸行・林野庁)、EDA Seira(江田星来・三菱UFJリサーチ & コンサルティング)	Factors Affecting Activeness and Sustainability on Forestry in the Family Forests in Japan – From the Comparison between Aso in Japan and Styria in Austria(林家の林業経営の活力や持続性に影響する要因ー日本の阿蘇とオーストリアのシュタイヤーマルク州との比較から)	Forests、15(9):1509	2024.08.
17	<b>久保山裕史</b>	林家の林業動向に関する日奥比較結果について	山林、1685:26-33	2024.10.
18	古俣寛隆(札幌市立大学)、柳田高志、高田依里、 <b>久保山裕史</b>	地域の森林バイオマス収獲可能性に関する一考察	林業経済学会秋季大会プログラム・要旨集(2024)、A12	2024.11.
19	古俣寛隆(札幌市立大学)、吉田貴紘、柳田高志、 <b>久保山裕史</b>	小規模店舗・事業所における木質バイオマスボイラーの経済性	日本太陽エネルギー学会講演論文集(2024)、:113-116	2024.11.
20	西園朋広、北原文章、細田和男、鹿又秀聡、山田祐亮、志水克人、福本桂子、 <b>久保山裕史</b> 、岡裕泰	日本のスギ林における最適伐期の地理的分布	日本森林学会大会講演要旨集、136:191(PD-2)	2025.03.
21	<b>久保山裕史</b>	第2章 木質バイオマス資源 第1節 森林資源	木材科学講座10 バイオマス(海青社、224頁)、:29-33	2025.03.
22	<b>久保山裕史</b>	木質バイオマス供給の現状と課題	日本森林学会大会講演要旨集、136:79(S2-1)	2025.03.



No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
23	江原誠、古川拓哉、藤間剛、平田晶子、酒井寿夫、北原文章、森井拓哉、石塚成宏、柳田高志、橋本昌司、津山幾太郎、 <b>久保山裕史</b> 、松井哲哉、小南裕志	日本の森林吸収源対策のロジックの整理	日本森林学会大会講演要旨集、136:104(T6-9)	2025.03.
24	小南裕志、平田晶子、酒井寿夫、江原誠、北原文章、森井拓哉、津山幾太郎、松井哲哉、石塚成宏、橋本昌司、西園朋広、山田祐亮、柳田高志、 <b>久保山裕史</b> 、早船真智、加用千裕(東京農工大)、小井土賢二、高田依里、外崎真理雄(森林総研非常勤職員)、古川拓哉、藤間剛	高分解能炭素シミュレータを用いた森林伐採シナリオによる森林の変化推定	日本森林学会大会講演要旨集、136:102(T6-1)	2025.03.
25	田村浩喜(秋田県林業研究研修センター)、野口正二(国際農林水産業研究センター)、 <b>阿部俊夫</b> 、飯田真一	希有な温暖少雪年を含む3寒候期のスギ人工林小流域からの流出特性	日本水文科学会誌、54:13-23	2024.03.
26	野口正二(国際農林水産業研究センター)、 <b>阿部俊夫</b>	「雪の研究」シリーズ 気候変動と積雪期の樹冠通過降水量	水利科学、396:102-119	2024.04.
27	<b>阿部俊夫</b>	雪融け水の流出と森林との関わり	秋田の森林づくり、800:6-7	2024.06.
28	飯田真一、荒木誠、 <b>阿部俊夫</b> 、野口正二(国際農林水産業研究センター)、レヴィアデルフィス(アメリカデラウェア大学)、新田響平(秋田県林業研究研修センター)、和田覚(秋田県林業研究研修センター)、田村浩喜(秋田県林業研究研修センター)、成田義人(秋田県林業研究研修センター)、金子智紀(秋田県林業労働対策基金)	間伐がスギ林の樹液流動および蒸散量に及ぼす影響	水文・水資源学会研究発表会要旨集(2024)、OS-04-03	2024.09.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
29	小川泰浩、 <b>阿部俊夫</b> 、久保田 多余子、 <b>延廣竜彦</b> 、村上亘	UAV写真測量による森林小流域の積 雪深推定に必要な評定点設置に関す る検討	日本緑化工学会大会 研究交流発表会要旨 集、55:32	2024.09.
30	久保田多余子、 <b>阿部俊夫</b> 、小 田智基	対照流域法で必要な基準期間の年数 について－釜淵森林理水試験地を事 例として－	関東森林学会大会講 演要旨集、14:21(防 災9)	2024.10.
31	田村浩喜、加茂谷雄樹(秋田 県林業研究研修センター)、 野口正二(国際農林水産業研 究センター)、 <b>阿部俊夫</b> 、飯 田真一	2024温暖少雪年のスギ人工林小流域 からの流出特性	東北森林科学会大会 講演要旨集、29:ポス ターセッション34	2024.11.
32	飯田真一、野口正二(国際農 林水産業研究センター)、 Delphis F. Levia(アメリカデ ラウェア大学)、荒木誠、新 田響平(秋田県林業研究研修 センター)、和田覚(秋田県林 業研究研修センター)、成田 義人(秋田県林業研究研修セ ンター)、田村浩喜(秋田県林 業研究研修センター)、 <b>阿部 俊夫</b> 、金子智紀(秋田県林業 労働対策基金)	森林の間伐が水循環に与える影響の 評価に向けて：スギ林の樹液流速測 定から分かったこと	日本水文科学会誌、 54:79-83	2024.11.
33	<b>阿部俊夫</b> 、久保田多余子、野 口正二(国際農林水産業研究 センター)、細田育広	山地森林流域からの融雪流出と伐採 の影響－釜淵森林理水試験地の長期 観測から明らかとなったこと－	水利科学、401:93- 114	2025.02.
34	<b>阿部俊夫</b> 、久保田多余子、野 口正二(国際農林水産業研究 センター)、細田育広	融雪期の水流出に対する伐採影響の 長期的変化－釜淵森林理水試験地の 事例－	日本森林学会大会講 演要旨集、 136:81(S3-4)	2025.03.
35	<b>阿部俊夫</b>	森林研究者から見た現在の砂防的課 題	砂防学会誌、 77(6):1-2	2025.03.
36	久保田多余子、 <b>阿部俊夫</b> 、小 田智基	対照流域法で必要な基準期間の年数 について－釜淵森林理水試験地を事 例として－	関東森林研究、 76:121-124	2025.03.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
37	土佐信一(国土防災技術(株))、柴崎達也(国土防災技術(株))、村井勇介(国土防災技術(株))、萩原伸也(関東森林管理局)、 <b>岡本隆</b> 、大澤光	新潟県伏野地すべり地における軽量ボーリングマシン掘削と水圧計埋設－静的および動的間隙水圧の観測事例－	日本地すべり学会誌、61(2):54-59	2024.04.
38	大澤光、土佐信一(国土防災技術(株))、松浦純生(京都大学防災研究所)、柴崎達也(国土防災技術(株))、土井一生(京都大学防災研究所)、 <b>岡本隆</b>	大変位高速地すべりのための高分解観測システムの開発とその観測事例	日本地すべり学会誌、61(3):15-21	2024.05.
39	DOI Issei(土井一生、京大防災研)、MATSUURA Sumio(松浦純生、京大防災研)、OSAWA Hikaru(大澤光)、 <b>OKAMOTO Takashi(岡本隆)</b> 、TOSA Shinichi(土佐信一、国土防災技術)、SHIBASAKI Tatsuya(柴崎達也、国土防災技術)、SAWADA Masayo(澤田麻沙代、京大防災研)	Ultra-dense seismic observation in and around a seashore landslide(海岸地すべり内および周辺における超稠密地震観測)	Japan Geoscience Union Meeting 2024(日本地球惑星科学連合2024年大会)、HDS08-P19	2024.05.
40	FURUICHI Takahisa(古市剛久)、WATAKABE Takuma(渡壁卓磨)、OSAWA Hikaru(大澤光)、 <b>OKAMOTO Takashi(岡本隆)</b> 、Phuong Vu Tan(ベトナム森林科学アカデミー)、Linh Nguyen Thuy My(ベトナム森林科学アカデミー)、Hang Le Thi Thu(ベトナム森林科学アカデミー)、Doan Thanh Tung(ベトナム森林科学アカデミー)	Uncovering sediment sources from spatial patterns of fluvial sediment transport in a mountain catchment in northern Vietnam(ベトナム北部山地流域における河川土砂運搬の空間パターンを用いた土砂起源地の特定)	Japan Geoscience Union Meeting 2024(日本地球惑星科学連合2024年大会)、HGG02-P04	2024.05.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
41	土井一生(京大防災研)、松浦純生(京大防災研)、大澤光、 <b>岡本隆</b> 、土佐信一(国土防災技術)、柴崎達也(国土防災技術)、岡庭信幸(京都大学)、大石怜生(京都大学)、澤田麻沙代(京大防災研)	稠密地震観測による知見の斜面への応用可能性	日本地すべり学会関西支部技術研究集会、3	2024.07.
42	MICHINAKA Tetsuya(道中哲也)、Ronald Canero Estoque(エストケ・ロナルド・カネーロ)、Tan Phuong Vu(ベトナム森林科学アカデミー)、Thuy My Linh Nguyen(ベトナム森林科学アカデミー)、 <b>OKAMOTO Takashi(岡本隆)</b> 、EHARA Makoto(江原誠)、TAKAHATA Keiichi(高畑啓一、林野庁)	Analyzing Spatial and Temporal Patterns and Trends of Natural Disaster Damages in Vietnam(ベトナムにおける自然災害被害の空間的・時間的パターンと傾向の分析)	Proceedings of Joint International Symposium on Sustainable Forest Ecosystem Management (SFEM Taiwan 2024)、:4	2024.08.
43	<b>岡本隆</b> 、古市剛久(森林総研PD)、渡壁卓磨、大澤光、村上亘、黒川潮	ベトナムにおける治山施設の現状と日本の治山技術の適用可能性	日本地すべり学会研究発表会講演集、63:310-311	2024.09.
44	大澤光、 <b>岡本隆</b> 、平島寛行(防災科研)、渡部直喜(新潟大)	雪上降雨(ROS)が地すべり地の水文応答へ及ぼす影響	日本地すべり学会研究発表会講演集、63:270	2024.09.
45	大澤光、土井一生(京大防災研)、松浦純生(京大防災研)、土佐信一(国土防災技術)、柴崎達也(国土防災技術)、 <b>岡本隆</b>	急崖裸地斜面の土砂侵食量を観測する試み	日本地すべり学会研究発表会講演集、63:173	2024.09.
46	土井一生(京大防災研)、松浦純生(京大防災研)、大澤光、 <b>岡本隆</b> 、土佐信一(国土防災技術)、柴崎達也(国土防災技術)	隣接する地すべりブロックの大滑動前後における常時微動特性の変化	日本地すべり学会研究発表会講演集、63:78	2024.09.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
47	岡庭信幸(京都大)、土井一生(京大防災研)、松浦純生(京大防災研)、大澤光、 <b>岡本隆</b> 、土佐信一(国土防災技術)、柴崎達也(国土防災技術)、大石怜生(京都大)、澤田麻沙代(京大防災研)	地すべり内部構造と地震動の特徴との関係性把握に向けての試みー北海道釧路町仙鳳趾地すべりを例としてー	日本地すべり学会研究発表会講演集、63:79	2024.09.
48	松浦純生(京大防災研)、土井一生(京大防災研)、大澤光、 <b>岡本隆</b> 、柴崎達也(国土防災技術)、土佐信一(国土防災技術)	再活動型地すべりの最大速度までの変位プロセス	日本地すべり学会研究発表会講演集、63:92-93	2024.09.
49	MICHINAKA Tetsuya(道中哲也)、Ronald Canero Estoque(エストケ・ロナルド・カネーロ)、Tan Phuong Vu、Thuy My Linh Nguyen(ベトナム森林科学アカデミー)、 <b>OKAMOTO Takashi(岡本隆)</b> 、EHARA Makoto(江原誠)	Hotspot analysis of natural disaster damages in Vietnam(ベトナムにおける自然災害被害のホットスポット分析)	関東森林学会大会講演要旨集、14:18-19(防災3)	2024.10.
50	道中哲也、江原誠、Tan Phuong Vu、Thuy My Linh Nguyen(ベトナム森林科学アカデミー)、 <b>岡本隆</b> 、志水克人、藤間剛、Van Tiep Ha、Van Tuan Vu(ベトナム森林科学アカデミー)	Has economic growth been mitigating natural disaster damages in Vietnam? A hybrid approach of panel data analysis(ベトナムにおける自然災害被害は経済成長によって軽減されているか？パネルデータ分析のハイブリッドアプローチを用いて)	林業経済学会秋季大会プログラム・要旨集(2024)、B9	2024.11.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
51	FURUICHI Takahisa(古市剛久)、WATAKABE Takuma(渡壁卓磨)、OSAWA Hikaru(大澤光)、 <b>OKAMOTO Takashi(岡本隆)</b> 、MURAKAMI Wataru(村上亘)、Phuong Vu Tan、Linh Nguyen Thuy My、Hang Le Thi Thu(ベトナム森林科学アカデミー)、Tung Doan Thanh(ベトナム農業農村開発省林業局)、Truong Nguyen Van(ベトナム森林科学アカデミー)	Spatial patterns of sediment discharge in a mountain catchment in northern Vietnam: What the data tell us about the impact of land-use along historical and contemporary contexts(ベトナム北部山地流域における土砂流出の空間分布：土地利用の歴史と現状による影響)	American Geophysical Union Annual Meeting 2024、B53A-1722	2024.12.
52	<b>岡本隆</b>	積雪環境下における地すべり活動を規制する多様な要因	水利科学、400:115-133	2024.12.
53	古市剛久、 <b>岡本隆</b>	ベトナム北部における山地災害リスクと治山施設および治山技術の活用に向けた方向性	国際農林業協力、47(3):2-9	2024.12.
54	OSAWA Hikaru(大澤光)、DOI Issei(土井一生・京都大学防災研究所)、HIRASHIMA Hiroyuki(平島寛行・防災科学技術研究所)、 <b>OKAMOTO Takashi(岡本隆)</b>	Propagation characteristics of sonic waves in disturbed wet snow(乱した湿雪における音波の伝播特性)	Bulletin of Glaciological Research、42:95-102	2025.01.
55	<b>岡本隆</b>	Recipe-P05 日本の森林整備・治山技術の適用／Recipe-T07 日本の治山施設の効果的な適用／Recipe-T08 森林を活用した防災・減災のための森林計画の策定	森林を活用した防災・減災のためのCOOKBOOK、:66-68／:102-105／:108-109	2025.02.
56	<b>岡本隆</b> 、村上亘、古市剛久、道中哲也、渡壁卓磨、大澤光、鈴木秀典、山口智、宗岡寛子、黒川潮	ベトナム北部山岳地の土地利用に基づく治山計画の検討	日本森林学会大会講演要旨集、136:263(PJ-37)	2025.03.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
57	<b>大西尚樹</b>	新しいフェーズが始まっている： 2023年東北のツキノワグマの出没状況	2023年度のクマ大量 出没と人身被害～そ の実態と背景・今後 に向けた課題～報告 書、:14-22	2024.03.
58	<b>大西尚樹</b> 、山口祥太(岩手大 学ツキノワグマ研究会)、鈴 木祥悟(元森林総研職員)	ホンドギツネVulpes vulpesによる ツキノワグマUrsus thibetanusの追 尾行動	哺乳類科学、 64(2):175	2024.07.
59	齊藤隆(北海道大学)、村上翔 大(東京大学)、de GUIA Anna Pauline O.(フィリピン 大学)、 <b>大西尚樹</b> 、河合久仁 子(東海大学)	エゾヤチネズミとムクゲネズミの分 布の違いを氷河期の個体数変動で説 明する	日本哺乳類学会大会 プログラム・講演要 旨集 (2024)、:98(OD-05)	2024.09.
60	竹腰直紀(東京農業大学)、富 安洵平(帯広畜産大学)、柳川 洋二郎(北海道大学)、 <b>大西尚 樹</b> 、長沼知子(農研機構)、ペ ク スンユン(東京農工大学)、 伊藤未羽(東京農業大学)、西 脇辰仁(東京農業大学)、ラ キ ン(東京農業大学)、小坂井千 夏(農研機構)、小池伸介(東 京農工大学)、山崎晃司(東京 農業大学)	オスの野生ツキノワグマにおける行 動とテストステロンとの関係性の検 証	日本哺乳類学会大会 プログラム・講演要 旨集 (2024)、:147(P036)	2024.09.
61	山口祥太(岩手大学ツキノワ グマ研究会)、 <b>大西尚樹</b>	ホンドギツネによるツキノワグマの 追尾行動	日本哺乳類学会大会 プログラム・講演要 旨集 (2024)、:192(P125)	2024.09.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
62	<b>OHNISHI Naoki</b> (大西尚樹)、TOCHIGI Kahoko(栃木香保子・東京大学)、NAGANUMA Tomoko(長沼知子・農研機構)、KOIKE Shinsuke(小池伸介・東京農工大学)、YAMAZAKI Koji(山崎晃司・東京農業大学)、OSAWA Takeshi(大澤剛士・東京都立大学)	Males disperse, females remain: revealing the dispersal patterns of Asian black bears through genetic analysis(オスは分散し、メスは残る：遺伝子解析によるツキノワグマの分散パターンの解明)	28th Conference of International association for bear research and management、28:49(No.58)	2024.09.
63	TAKEKOSHI Naoki(竹腰直紀・東京農業大学)、TOMIYASU Jumpei(冨安洵平・帯広畜産大学)、YANAGAWA Yojiro(柳川洋二郎・北海道大学)、 <b>OHNISHI Naoki</b> (大西尚樹)、NAGANUMA Tomoko(長沼知子・農研機構)、BAEK Seungyun(ペク スンユン・東京農工大学)、ITO H Miu(伊藤未羽・東京農業大学)、NISHIWAKI Tatsuhito(西脇辰仁・東京農業大学)、KOZAKAI Chinatsu(小坂井千夏・農研機構)、KOIKE Shinsuke(小池伸介・東京農工大学)、YAMAZAKI Koji(山崎晃司・東京農業大学)	Verification of the relationship between testosterone and behavioral changes in male Asian black bear ( <i>Ursus thibetanus</i> )(オスのツキノワグマにおけるテストステロンと行動変化との関係の検証)	28th Conference of International association for bear research and management、28:99(No.228)	2024.09.



No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
64	TAKEKOSHI Naoki(竹腰直紀・東京農業大学)、FUJITANI Akina(藤谷慧称・東京農業大学)、 <b>OHNISHI Naoki(大西尚樹)</b> 、KOZAKAI Chinatsu(小坂井千夏・農業・食品産業技術総合研究機構)、KOIKE Shinsuke(小池伸介・東京農工大学)、YAMAZAKI Koji(山崎晃司・東京農業大学)	Factors affecting body weight fluctuation in free-ranging Asian black bears(野性のツキノワグマの体重変動に影響を与える要因)	Ursus、2024(35e21):1-12	2024.11.
65	<b>大西尚樹</b>	ツキノワグマの遺伝学的研究－個体数減少と大量出沒の狭間で	生物の科学 遺伝、79(1):80-87	2024.12.
66	SAITOH Takashi(齊藤隆・北海道大学)、MURAKAMI Shota(村上翔大・東京大学)、de GUIA Anna Pauline O.(フィリピン大学)、 <b>OHNISHI Naoki(大西尚樹)</b> 、KAWAI Kuniko(河合久仁子・東海大学)	Genetic signature of demographic history explains the current sympatric distribution of sibling species of Craseomys (Rodentia、Arvicolinae)(タイリクヤチネズミ属(齧歯目 Arvicolinae)の姉妹種の現在の同所的分布を説明する人口動態史の遺伝的特徴)	Biological Journal of the Linnean Society、143(4):blae106	2024.12.
67	木下豪太(富山大学)、須田杏子(北海道大学)、青木大輔、 <b>大西尚樹</b> 、城ヶ原貴通(沖縄大学)、佐藤淳(福山大学)、山田文雄(沖縄大学)、鈴木仁(北海道大学)	Island population dynamics since the Late Miocene: Comparative phylogeography of mammalian species in three genera (Pentalagus, Diplothrix, and Tokudaia) endemic to the Central Ryukyu Islands(後期中新世以降の島嶼集団ダイナミクス：中琉球に固有の哺乳類3属(Pentalagus、Diplothrix、およびTokudaia)における比較系統地理学的研究)	Mammal Study、50(2)、 <a href="https://doi.org/10.3106/ms2024-0045">https://doi.org/10.3106/ms2024-0045</a>	2025.01.
68	松木佐和子(岩手大学)、池内陽(岩手大学)、 <b>大西尚樹</b>	文献およびワード検索から見た全国のカスサン発生履歴	日本森林学会大会講演要旨集、136:276(PL-16)	2025.03.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
69	<b>大西尚樹</b> 、Guskov Valentin(ロシア科学アカデミー)、小井土凜々子(筑波大学)、津田吉晃(筑波大学)、加藤珠理、内山憲太郎	氷期以降における本州のツキノワグマの個体数変動と地域変異	日本生態学会大会講演要旨、72:P2-080	2025.03.
70	遠藤優(国立遺伝学研究所)、 <b>大西尚樹</b>	全ゲノムデータに基づく日本のツキノワグマ個体群の遺伝的多様性の評価	日本生態学会大会講演要旨、72:E02-18	2025.03.
71	松本拓馬(筑波大学)、小井土凜々子(筑波大学)、黒江美沙子(長野県環境保全研究所)、中下留美子、 <b>大西尚樹</b> 、山本俊昭(日本獣医生命科学大学)、瀧井暁子(信州大学)、泉山茂之(信州大学)、津田吉晃(筑波大学)	信州伊那谷におけるツキノワグマの集団遺伝学的構造	日本生態学会大会講演要旨、72:P2-101	2025.03.
72	<b>小野賢二</b> 、野口宏典、グエン・トゥイ・ミー・リン(ベトナム森林科学アカデミー)、ドアン・ティン・トゥン(ベトナム森林科学アカデミー)、チュアン・クアン・チー(ベトナム森林科学アカデミー)、高畑啓一、森信人(京都大学防災研究所)、馬場繁幸(国際マングローブ生態系協会)、宮城豊彦(地域情報カスタマイズユニット)、柳澤英明(東北学院大学)、ヴー・タン・フォン(ベトナム森林認証センター)、平田泰雅	Resistance to uprooting among mangrove trees at the Urauchi River Mouth, Japan, and Red River Delta, Vietnam: A mechanical analytical comparison based on an in-situ tree-pulling experiment.(西表島浦内川河口域およびベトナムナムディン省紅河デルタ沿岸域に成林したマングローブの根返り耐性：引き倒し試験による力学的評価と樹種間比較)	森林立地、66(1):17-26	2024.06.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
73	Mohammad Shamim Hasan Mandal(国際農林水産業研究センター)、Rempei Suwa(国際農林水産業研究センター)、Rene N. Rollon(Univ. Phiippines)、Giannina Marie G. Albano(Univ. Phiippines)、Green Ann A. Cruz(Univ. Phiippines)、 <b>ONO Kenji(小野賢二)</b> 、Yasmin H. Primavera-Tirol(Aklan State Univ.)、Ariel C. Blanco(Univ. Phiippines)、NADAOKA Kazuo(灘岡和夫・東京工業大学、鹿島技術研究所)	Aboveground biomass estimation of an old-growth mangrove forest using airborne LiDAR in the Philippines.(航空機LiDARを用いたフィリピン国内における老齢マングローブ林の地上部バイオマス推定)	Ecological Research、DOI:10.1111/1440-1703.12503	2024.07.
74	<b>小野賢二</b> 、平井敬三	植栽適地	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:16	2024.07.
75	平田泰雅、 <b>小野賢二</b> 、野口宏典、倉本恵生、森大喜、Thanh Tung Doan(ベトナム森林科学アカデミー)、Ngoc Thanh Pham(ベトナム森林科学アカデミー)、Thuy My Linh Nguyen(ベトナム森林科学アカデミー)、Tan Phuong Vu(ベトナム森林認証事務局)	Evaluation of Disaster Prevention and Mitigation Functions of Mangrove Forests against Storm Surge by Remote Sensing(リモートセンシングによる高潮に対するマングローブ林の防災・減災機能の評価)	ForestSAT 2024 Abstract Book、:212	2024.09.
76	<b>小野賢二</b>	海辺の森林「マングローブ」	季刊森林総研、66:18	2024.09.
77	<b>小野賢二</b>	風や波に対するマングローブの根張り耐性を評価する	Forest Winds(フォレストウィンズ)、99:1-2	2024.09.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
78	渡辺信(琉球大)、藤本潔(南山大)、加藤元康(南山大)、 <b>小野賢二</b> 、木原友美(京都大)、中村航(東京大)、小田原泰志(南山大)、福寺航大(九州大)	マングローブ林内環境のフォトグラメトリー解析	日本マングローブ学会年次大会講演要旨集、30:5	2024.12.
79	<b>小野賢二</b>	5章 自然を活用した解決策とマングローブ保全・再生の動向	マングローブ保全・再生の手引き－高潮災害軽減の観点から－、:25-28	2025.02.
80	<b>小野賢二</b> 、野口宏典	7章 マングローブ保全・再生のための留意点	マングローブ保全・再生の手引き－高潮災害軽減の観点から－、:35-40	2025.02.
81	<b>小野賢二</b> 、野口宏典(Recipe - P06、T10)／ <b>小野賢二</b> (Recipe - T12)	Recipe-P06 マングローブの防災・減災機能／Recipe-T10 波や風に対する根返り耐性の定量評価／Recipe-T12 マングローブ植林における留意点	森林を活用した防災・減災のためのCOOKBOOK、:70-71、:73／:116-119／:124-127	2025.02.
82	野口宏典、 <b>小野賢二</b> 、新田響平(秋田県林業研究研修センター)、平野恭弘(名古屋大学)、谷川東子(名古屋大学)	盛土に植栽されたクロマツの直根・水平根の量と根返り耐性の関係	日本森林学会大会講演要旨集、136:259(PJ-22)	2025.03.
83	<b>小野賢二</b> 、藤本潔(南山大学)、渡辺信(琉球大学)、羽佐田紘大(奈良大学)、古川恵太(海辺つくり研究会)、木原友美(株式会社E-konzal)	マングローブ細根の仮比重・真比重－細根生産能を体積として把握する－	日本森林学会大会講演要旨集、136:247(PI-3)	2025.03.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
84	HIRAI Keizo(平井敬三)、 Dokrak Marod(ドクラック マロード・カセサート大学)、 <b>SAITO Tomoyuki(齋藤智 之)</b> 、TAKAHASHI Masamichi(高橋正通)、 TANAKA Hiroshi(田中浩・国 際緑化推進センター)、 UMEMURA Mitsutoshi(梅村 光俊)、NAKASHIZUKA Tohru(中静透)	Acquisition and use long-term observational data on forest dynamics to assess the impact on climate change in tropical seasonal forests in Thailand(タイの熱帯季節 林での気候変動評価のための森林動 態データの蓄積と活用)	IUFRO 2024 XXVI World Congress(T3.21 Legacy tropical forest data: current status、uses、and securing them)	2024.06.
85	<b>齋藤智之</b>	木曽ヒノキの天然更新に必要な伐採 前のササ刈払い	造林時報、225:15-19	2024.10.
86	今埜実希(宮城県林業技術総 合センター)、 <b>齋藤智之</b> 、渡 邊広大(宮城県林業技術総合 センター)、目黒渚(宮城県林 業技術総合センター)、玉田 克志(宮城県林業技術総合セ ンター)	モウソウチクの放射性物質汚染状況 及び除染効果調査	東北森林科学会大会 講演要旨集、29:ポス ターセッション27	2024.11.
87	<b>齋藤智之</b> 、梅村光俊、 Dokrak Marod(カセサート大 学林学部)、Sathid Thinkampeang(カセサート 大学林学部)、平井敬三	タイ熱帯季節林に共存するタケ類2 種の形態的な山火事耐性形質	日本森林学会大会講 演要旨集、 136:145(H-1)	2025.03.
88	<b>直江将司</b>	肉食鳥類の種子散布／魚類の種子散 布／渡り鳥の種子散布／水鳥の種子 散布／ヤシの実は小さくなる／動物 散布の経済価値	タネまく動物(文一総 合出版、152頁)、:78 ／:79／:92／:93 ／:107／:132	2024.09.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
89	Valentin Journ&#233;(ポーランドアダム・ミツケヴィチ大学)、HAN Qingmin(韓慶民、100人中41番目)、KUROKAWA Hiroko(黒川紘子、100人中50番目)、 <b>NAOE Shiji(直江将司、100人中65番目)、NOGUCHI Mahoko(野口麻穂子、100人中66番目)、OGURO Michio(小黒芳生、100人中68番目)、SHIBATA Mitsue(柴田銃江、100人中83番目)</b>	The Relationship Between Maturation Size and Maximum Tree Size From Tropical to Boreal Climates(熱帯気候から寒帯気候までの樹木の成熟サイズと最大サイズの関係)	Ecology Letters、27(9):e14500	2024.09.
90	<b>直江将司</b>	森を維持する一鳥による虫取り、種まき	図説日本の森林(朝倉書店、216頁)、118-119	2024.10.
91	<b>NAOE Shoji(直江将司)、</b> UBUKATA Masatoshi(生方正俊)、TSUNAMOTO Yoshihiro(綱本良啓・元森林総研PD、北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所)、TAYASU Ichiro(陀安一郎・総合地球環境学研究所)	Assessing vertical seed dispersal through seed oxygen isotope ratios of Japanese larch ( <i>Larix kaempferi</i> )(種子の酸素同位体比による垂直種子散布の評価：針葉樹カラマツでの検証)	Plant Species Biology、 <a href="https://doi.org/10.1111/1442-1984.12499">https://doi.org/10.1111/1442-1984.12499</a>	2024.11.
92	YASUDA Kazuma(安田和真・東京農工大学)、KATO Daiki(加藤大貴・東京農工大学)、 <b>NAOE Shoji(直江将司)</b> 、AMANO Tatsuya(天野達也・クイーンズランド大学)、YOSHIKAWA Tetsuro(吉川徹朗・大阪公立大学)、TOCHIGI Kahoko(栃木香保子・東京大学)、KOIKE Shinsuke(小池伸介・東京農工大学)	Does forest loss and fragmentation reduce woodpecker-associated ecosystem functions?(森林の消失と断片化はキツツキに由来する生態系機能を劣化させるか?)	Global Ecology and Conservation、57:e03366	2024.12.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
93	高橋一秋(長野大学)、 <b>直江将司</b> 、綱本良啓(北海道立総合研究機構)、陀安一郎(総合地球環境学研究所)、原口岳(大阪府立環境農林水産総合研究所)、高橋香織(信州大学)	ツキノワグマによるガンコウランの垂直種子散布：酸素安定同位体による推定	日本森林学会大会講演要旨集、136:160(L-6)	2025.03.
94	島田将吾(新潟大学)、 <b>直江将司</b> 、柴田嶺(新潟大学)	果実形質から見たカラス属の種子散布における果実選好性	日本生態学会大会講演要旨、72:P3-160	2025.03.
95	安田和真(東京農工大学)、加藤大貴(東京農工大学)、 <b>直江将司</b> 、天野達也(クイーンズランド大学)、吉川徹朗(大阪公立大学)、栃木香保子(東京大学)、小池伸介(東京農工大学)	森林の消失と断片化はキツツキが果たす生態系機能に影響を与えるか？	日本森林学会大会講演要旨集、136:272(PL-1)	2025.03.
96	YASUDA Kazuma(安田和真・東京農工大学)、KATO Daiki(加藤大貴・東京農工大学)、 <b>NAOE Shoji(直江将司)</b> 、AMANO Tatsuya(天野達也・クイーンズランド大学)、YOSHIKAWA Tetsuro(吉川徹朗・大阪公立大学)、TOCHIGI Kahoko(栃木香保子・東京大学)、KOIKE Shinsuke(小池伸介・東京農工大学)	Do woodpeckers increase tree falls? Implications for a new ecosystem function(キツツキは倒木を増加させるか？新しい生態系機能への示唆)	日本生態学会大会講演要旨、72:I04-02	2025.03.
97	<b>直江将司</b>	種子散布方向の偏りが気候変動下の植物の分布変化に及ぼす影響	日本生態学会大会講演要旨、72:S02-1	2025.03.
98	柴田銃江、小黒芳生、 <b>直江将司</b> 、阿部真、黒川紘子(京都大学)	デモグラフィー分析でみたマスティング崩壊の実態と実生更新への影響	日本生態学会大会講演要旨、72:P2-025	2025.03.
99	<b>酒井敦</b>	衰退するシラカンバ林を再生する	Forest Winds、98:1-2	2024.06.
100	<b>酒井敦</b> 、澤田佳美、齋藤智之、斉藤正一(山形大農)	山形県小国町におけるナラ枯れ発生跡地の林分構造の変化	東北森林科学会大会講演要旨集、29:口頭発表1	2024.11.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
101	酒井敦、高橋裕史、相川拓也	岩手県の人工林皆伐跡地における大型草食動物の採食量推定	日本森林学会大会講演要旨集、136:137(E-14)	2025.03.
102	YOSHIKAWA Tetsuro(吉川徹朗・大阪公立大学)、 NAKASHIZUKA Tohru(中静透、37人中19番目)、 <b>NOGUCHI Mahoko(野口麻穂子、37人中21番目)</b>	Forest monitoring data of 45 plots across the Japanese archipelago during 1980-2021(日本列島の45プロットの1980-2021年の森林観測データ)	Ecological Research、39(3):391-406	2024.05.
103	<b>野口麻穂子、齋藤智之、酒井敦</b>	低密度植栽と筋刈りがスギの成長と競合状態に与える影響	第5期中長期計画成果24(森林産業-10)植物の成長力を活かす！エリートツリーで下刈り省略ーエリートツリーを使った下刈り省略のための試験研究事例集ー、:33	2024.09.
104	<b>野口麻穂子</b> 、星崎和彦(秋田県立大学)、松下通也、杉浦大樹(秋田県立大学)、八木橋勉、 <b>齋藤智之</b> 、板橋朋洋(秋田県立大学)、太田和秀(秋田県立大学)、柴田銃江、星野大介、正木隆、大住克博(元森林総合研究所)、高橋和規、鈴木和次郎(元森林総合研究所)	奥羽山系のブナ帯落葉広葉樹老齢林における地上部現存量の26年間の変化	東北森林科学会大会講演要旨集、29:テーマ別セッションNo.2	2024.11.
105	Nela Altmanov(チェコ植物園)、KAGAWA Akira(香川聡・34人中12番目)、 <b>NOGUCHI Mahoko(野口麻穂子・34人中21番目)</b> 、SAKAI Takeshi(酒井武・34人中24番目)	Spatial heterogeneity of tree-growth responses to climate across temperate forests in Northeast Asia.(アジア北部の温帯林での、樹木の気候に対する成長応答の地域的不均一性)	Agricultural and Forest Meteorology、362:110355	2024.12.



No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
106	野口麻穂子、杉田久志(元森林総合研究所)、酒井敦、齋藤智之、直江将司、澤田佳美、八木橋勉、太田敬之、櫃間岳、高橋利彦(木工舎「ゆい」)	広葉樹が混交した多雪地スギ人工林の20年間の動態	日本森林学会大会講演要旨集、136:138(E-20)	2025.03.
107	澤田佳美	マレーシア・サバ州の熱帯二次林におけるShorea属樹木の更新可能性	海外の森林と林業、119:8-12	2024.03.
108	山田俊弘・広島大学、相場慎一郎・北海道大学、大窪久美子・信州大学、鈴木英治・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、前中久行・緑の地球ネットワーク、永野正弘・無所属、中島佳徳・中島樹木クリニック、永野徹・神村学園、石原正恵・京都大学フィールド科学教育研究センター、安松弘毅・京都大学、澤田佳美、川島和義・緑の地球ネットワーク、高見邦雄・緑の地球ネットワーク	Grow or die: A 49-year growth history of a Japanese warm-temperate tree species.(成長か枯死か：日本の温帯性樹木の49年間の成長履歴)	Ecosphere、15(5):e4839	2024.05.
109	IIDA Yoshiko(飯田佳子)、SATO Tamotsu(佐藤保)、SAWADA Yoshimi(澤田佳美)、YAGIHASHI Tsutomu(八木橋勉)、KUROKAWA Hiroko(黒川紘子、京都大学)、Nur Hajar Zamah SHARI(FRIM)、Azizi RIPIN(GFR)、NIIYAMA Kaoru(新山馨、元FFPRI)	Changes in forest structure and function in a lowland rainforest in Peninsular Malaysia(半島マレーシアの低地熱帯雨林における森林の構造と機能の変化)	日本熱帯生態学会年次大会要旨集、34:30(A19)	2024.06.
110	澤田佳美	函南原生林－常緑広葉樹林から落葉広葉樹林への変化を追える森	図説日本の森林(朝倉書店、216頁)、:64	2024.10.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
111	澤田佳美、野口麻穂子、齋藤智之、直江将司、酒井敦	山形県金山町のスギ人工林における広葉樹稚樹の分布と地形との関係	日本森林学会大会講演要旨集、136:139(E-21)	2025.03.
112	IIDA Yoshiko(飯田佳子)、SATO Tamotsu(佐藤保)、 <b>SAWADA Yoshimi(澤田佳美)</b> 、YAGIHASHI Tsutomu(八木橋勉)、Nur Hajar Zamah SHARI(FRIM)、Azizi RIPIN(GFR)、NIIYAMA Kaoru(新山馨、元FFPRI)	Changes in demographic performance over 50 years in a lowland rainforest, peninsular Malaysia(半島マレーシアの低地熱帯雨林における50年間の動態の変化)	日本生態学会大会講演要旨、72:101-11	2025.03.
113	植野晴子(北海道大学)、松島肇(北海道大学)、大越陽(北海道大学)、中田康隆(京都府立大学)、有働恵子(東北大学)、 <b>萩野裕章</b> 、佐藤慎也(石狩市)、佐藤優吾(石狩市)、若松栞(石狩市)、小貫陽子(石狩市)、中村洸太(石狩市)、佐々木大樹(石狩市)	海水浴場における草方格と堆砂垣設置後の地表面変化	日本景観生態学会仙台大会発表要旨集、34:35(P18)	2024.06.
114	<b>萩野裕章</b>	海岸クロマツ林 湘南海岸砂防林－広葉樹の混交をすすめた海岸林－	図説日本の森林(朝倉書店、216頁)、:70	2024.10.
115	<b>萩野裕章</b> 、猿田けい(静岡県経済産業部中部農林事務所)	海浜砂の夏季土壌水分動態の特性について－自作ライシメーターの結果考察－	日本海岸林学会米子大会講演要旨集(令和6年度)、:28-29(P14)	2024.10.
116	太田敬之、 <b>萩野裕章</b> 、 <b>延廣竜彦</b>	秋田県藤里町の天然スギ林伐採後に成立した林分の構造	日本森林学会大会講演要旨集、136:220(PE-59)	2025.03.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
117	HASHIMOTO Shoji(橋本昌司)、MORI Taiki(森大喜)、SAKATA Tadashi(阪田匡司)、HASHIMOTO Toru(橋本徹)、 <b>MORISHITA Tomoaki(森下智陽)</b> 、SHIMIZU Takanori(清水貴範)、KOMINAMI Yuji(小南裕志)、MIYAMA Takafumi(深山貴文)、ISHIZUKA Shigehiro(石塚成宏)、YAMASHITA Naoyuki(山下尚之)、OKAMOTO Toru(岡本透)、TAKANASHI Satoru(高梨聡)、INAGAKI Yoshiyuki(稲垣善之)	Nationwide monitoring of forest soil methane and carbon dioxide fluxes in Japan(森林土壌メタンおよび二酸化炭素フラックスの全国モニタリング)	Japan Geoscience Union Meeting 2024(日本地球惑星科学連合2024年大会)、BCG04-04	2024.05.
118	KONYA Keiko(海洋研究開発機構)、SUEYOSHI Tetsuo(海洋研究開発機構)、IWAHANA Go(アラスカ大学)、 <b>MORISHITA Tomoaki(森下智陽)</b> 、UETAKE Jun(北海道大学)、WAKITA Masahide(海洋研究開発機構)	CH4 emissions from runoff water of Alaskan mountain glaciers(アラスカ山脈氷河における流出水からのメタン放出)	Scientific Reports、14:10558	2024.05.
119	HASHIMOTO Shoji(橋本昌司)、SAKATA Tadashi(阪田匡司)、YAMASHITA Naoyuki(山下尚之)、MORI Taiki(森大喜)、 <b>MORISHITA Tomoaki(森下智陽)</b> 、ISHIZUKA Shigehiro(石塚成宏)	Topographically high-resolution mapping of catchment-scale soil carbon dioxide and methane fluxes(土壌二酸化炭素のとメタンフラックスの流域スケールの高空間解像度マッピング)	IUFRO World Congress 2024、T5.9	2024.06.
120	<b>森下智陽</b> 、橋本昌司、平井敬三	森林分野におけるネットゼロエミッション達成に向けた取組	日本土壌肥料学会大会講演要旨集、70:シンポジウムⅠ-4	2024.09.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
121	<b>森下智陽</b> 、安田幸生、新田響平(秋田県林業研究研修センター)、阪田匡司、 <b>小野賢二</b>	東北地方ブナ林における温室効果ガス動態	東北森林科学会大会講演要旨集、29:テーマ別セッションNo.4	2024.11.
122	森大喜、橋本昌司、阪田匡司、橋本徹、 <b>森下智陽</b> 、石塚成宏、伊藤優子、山下尚之、清水貴範、小南裕志、深山貴文、岡本透、高梨聡、稲垣善之	森林土壌におけるメタンフラックスデータベース構築に向けた展望	日本森林学会大会講演要旨集、136:151(I-13)	2025.03.
123	稲垣善之、酒井寿夫、篠宮佳樹、吉永秀一郎(元森林総研職員)、鳥居厚志(元森林総研職員)、山田毅、野口享太郎、 <b>森下智陽</b> 、藤井一至	四万十川森林流域では日照時間が長い年ほど溪流水の溶存成分濃度が増加する	日本生態学会中国四国地区会大会講演要旨、67:18(EO-11)	2024.05.
124	<b>延廣竜彦</b>	平庭高原の白樺林での天然更新施業と土砂移動	岩手の林業、807:6-7	2025.02.
125	<b>延廣竜彦</b>	岩手県のシラカンバ林における皆伐前後の土砂移動レートの変化	日本森林学会大会講演要旨集、136:262(PJ-34)	2025.03.
126	眞中卓也、山田毅、 <b>木田仁廣</b> 、氏家亨(国土防災技術(株))、山村充(国土防災技術(株))、佐藤努(北海道大学)	北海道鹿部町の休廃止鉱山および森林における岩石風化の促進に関する試験的研究	Japan Geoscience Union Meeting 2024(日本地球惑星科学連合2024年大会)、MIS14-05	2024.05.
127	<b>KIDA Kimihiro(木田仁廣)</b> 、YAMASHITA Naoyuki(山下尚之)、HASHIMOTO Shoji(橋本昌司)、IMAYA Akihiro(今矢明宏)、ISHIZUKA Shigehiro(石塚成宏)	Mapping carbon stocks in forest litter considering vegetation, topography, climate, and soil parent material factors(植生・地形・気候・土壌母材の因子を考慮した森林リター炭素蓄積量の地図化)	The 26th IUFRO World Congress Book of Abstracts、:3378(T5.9)	2024.06.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
128	KAWAHIGASHI Masayuki(川東正幸・東京都立大学)、 TAKAHASHI Takuya(高橋拓也・東京都立大学)、 <b>KIDA Kimihiro(木田仁廣)</b>	Soil developmental process of human transported materials(人為移動物質における土壌生成過程)	Proceedings of the 7th International Soil Classification Congress、:15	2024.06.
129	<b>KIDA Kimihiro(木田仁廣)</b> 、 <b>ONO Kenji(小野賢二)</b> 、 IMAYA Akihiro(今矢明宏)、 KAWAHIGASHI Masayuki(川東正幸・東京都立大学)	The stage in pedogenetic process should be expressed in designation of human transported master horizons(人為移動を表す主層位記載には土壌生成過程の段階を含めるべき)	Proceedings of the 7th International Soil Classification Congress、:39	2024.06.
130	細川奈々枝、稲垣善之、伊藤江利子、釣田竜也、 <b>木田仁廣</b> 、眞中卓也、大谷達也、古澤仁美	高知県香美地域においてスギ成長に影響する立地要因	日本森林学会大会講演要旨集、136:151(I-14)	2025.03.
131	山田毅、眞中卓也、 <b>木田仁廣</b>	林地への岩石粉散布による透水性への影響はあるのか？－北海道鹿部町での事例－	日本森林学会大会講演要旨集、136:253(PI-29)	2025.03.
132	伊藤江利子、稲垣善之、 <b>木田仁廣</b> 、中尾勝洋、古澤仁美、釣田竜也、眞中卓也、細川奈々枝	西南日本におけるスギ成長低下：地質による方位依存性の違い	日本生態学会大会講演要旨、72:P0-141	2025.03.
133	IGOTA Hiromasa(伊吾田宏正・酪農学園大学)、 <b>TAKAHASHI Hiroshi(高橋裕史)</b> 、MATSUURA Yukiko(松浦友紀子)、IKEDA Takashi(池田敬・信州大学)、WATANABE Takuma(渡辺拓真・エゾシカ協会)、KAJI Koichi(梶光一・東京農工大学)	The long-term drive count and culling data of the sika deer (Cervus nippon) population introduced on Nakanoshima Island in Lake Toya, Hokkaido, Japan, during 1980-2023(洞爺湖中島におけるニホンジカ導入個体群の1980年から2023年にかけて長期にわたる追い出し法による観測値と捕殺数)	Ecological Research、39(5):775-781	2024.06.
134	<b>高橋裕史</b> 、相川拓也、菅原悠樹(秋田林研セ)、長岐昭彦(秋田林研セ)、 <b>酒井敦</b> 、 <b>松浦俊也</b>	積雪深はシカによるササの採食に反映されたりされなかったり	日本哺乳類学会大会プログラム・講演要旨集(2024)、:75(OA-03)	2024.09.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
135	IKEDA Takashi(Shinshu University)、MATSUURA Yukiko(松浦友紀子)、 <b>TAKAHASHI Hiroshi(高橋裕史)</b> 、IGOTA Hiromasa(Rakuno Gakuen University)、WATANABE Takuma(Yezo Deer Association)、SHICHIJO Tomoya(Research Center for Wildlife Management、Gifu University)	The population trend of a sika deer population around urban area.(市街地周辺におけるニホンジカの個体群動態)	個体群生態学会大会要旨集、40:46(P-23)	2024.11.
136	尾釜遼(日本工業大学)、清水博幸(日本工業大学)、平栗健史(日本工業大学)、高木浩一(岩手大学)、 <b>高梨琢磨</b> 、相場翔平((株)富士種菌)	シイタケにおける雷撃の音圧刺激とその振動周波数が子実体発生促進に及ぼす効果	日本きのこ学会誌、31(4):117-122	2024.01.
137	YANAGISAWA Ryuhei(柳澤隆平・農業・食品産業技術総合研究機構)、TATSUTA Haruki(立田晴記・九州大学)、SEKINE Takayuki(関根孝幸・宮城県農業・園芸総合研究所)、OE Takaho(大江高穂・宮城県農業・園芸総合研究所)、MUKAI Hiromi(向井裕美)、UECHI Nami(上地奈美・農業・食品産業技術総合研究機構)、KOIKE Takuji(小池卓二・電気通信大学)、ONODERA Ryuichi(小野寺隆一・東北特殊鋼(株))、SUWA Ryuichi(諏訪竜一・琉球大学)、 <b>TAKANASHI Takuma(高梨琢磨)</b>	Vibrations as a new tool for pest management - a review(害虫防除の新たなツールとしての振動：総説)	Entomologia Experimentalis et Applicata、172(12):1116-1127	2024.05.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
138	<b>TAKANASHI Takuma</b> (高梨琢磨)、KOBAYASHI Chisato(小林知里・東北大学)、MUKAI Hiromi(向井裕美)	Dual effect of vibrations for pest control of fungus gnats and for cultivation of shiitake mushroom(キノコバエ防除とシイタケ栽培における振動のダブル効果)	International Congress of Entomology、27:19-1-05	2024.08.
139	AVOSANI Sabina(フリーブル大)、 <b>TAKANASHI Takuma</b> (高梨琢磨)	Behavioral responses of a shiitake mushroom pest to vibrations: towards more sustainable control approaches of fungus gnats(シイタケ害虫の振動に対する行動反応：キノコバエの持続可能な防除に向けて)	International Congress of Entomology、27:20-3-08	2024.08.
140	YANAGISAWA Ryuhei(柳澤隆平・九州大)、UEHARA Shotaro(上原祥太朗・九州大)、TERAWAKI Yuto(寺脇悠翔・九州大)、 <b>TAKANASHI Takuma</b> (高梨琢磨)、SUWA Ryuichi(諏訪竜一・琉球大)、TATSUTA Haruki(立田晴記・九州大)	Applications of vibrations for sustainable pest management of Bemisia tabaci(振動を用いたタバココナジラミの持続可能な害虫管理への応用)	International Congress of Entomology、27:20-3-05	2024.08.
141	TSUCHIHARA Kazuko(土原和子・東北学院大)、YAMAZAKI Kazuo(山崎一夫・大阪健康安全基盤研)、SUGIURA Shinji(杉浦真治・神戸大)、INOUE Takenari(井上大成)、 <b>TAKANASHI Takuma</b> (高梨琢磨)	Morphology and sound responses of mechanosensilla in lepidopteran larvae(チョウ目幼虫における機械感覚子の形態と音への反応)	International Congress of Entomology、27:P0967	2024.08.
142	STRAUSS Johannes(ギーゼン大)、 <b>TAKANASHI Takuma</b> (高梨琢磨)、MAZZONI Valerio(エドモンドマッハ財団)	The sensory basis for vibrational behaviours: Functional morphology and diversity of vibration receptor organs in insect(振動行動の感覚基盤：昆虫の振動受容器の機能形態学と多様性)	International Congress of Entomology、27:20-2-01	2024.08.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
143	MAZZONI Valerio(エドモンドマッハ財団)、 <b>TAKANASHI Takuma(高梨琢磨)</b> 、STRAUSS Johannes(ギーセン大)	A new Lexicon for Biotremology to bridge the gap with Chemical Ecology(化学生態学とのギャップを埋める生物振動学のための新たな学術用語)	International Congress of Entomology、27:20-3-01	2024.08.
144	MAZZONI Valerio(エドモンドマッハ財団)、 <b>TAKANASHI Takuma(高梨琢磨、16人中14番目)</b>	Bridging biotremology and chemical ecology: a new terminology(生物振動学と化学生態学をつなぐ：新たな学術用語)	Trends in Plant Science、29(8):848-855	2024.08.
145	衣浦晴生、 <b>高梨琢磨</b> 、松島一司(足利市役所)	野外ソメイヨシノにおける振動によるクビアカツヤカミキリの産卵制御	関東森林学会大会講演要旨集、14:27(動物3)	2024.10.
146	立田晴記(九州大学)、柳澤隆平(農業・食品産業技術総合研究機構)、関根崇行(宮城県農業園芸総合研究所)、大江高穂(宮城県農業園芸総合研究所)、向井裕美、上地奈美(農業・食品産業技術総合研究機構)、小野寺隆一(東北特殊鋼(株))、小池卓二(電気通信大学)、諏訪竜一(琉球大学)、 <b>高梨琢磨</b>	農林業における振動を活用した害虫管理	JATAFFジャーナル、12(12):33-36	2024.12.
147	<b>高梨琢磨</b>	36 振動できのこ害虫の被害を抑え、さらにきのこの生育も促進する	森林産業実用化カタログ2025、:19	2025.03.
148	<b>高梨琢磨</b> 、衣浦晴生、小野寺隆一(東北特殊鋼)、松島一司(足利市)	振動によるクビアカツヤカミキリの成虫における行動阻害：野外における実証	日本応用動物昆虫学会大会講演要旨集、69:W17-03	2025.03.
149	向井裕美、河野雅史(みのる産業株式会社)、陶山純(みのる産業株式会社)、小野寺隆一(東北特殊鋼株式会社)、 <b>高梨琢磨</b>	振動による害虫抑制及び子実体発生促進への効果－施設栽培シイタケでの実証	日本応用動物昆虫学会大会講演要旨集、69:PG-11	2025.03.



No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
150	中村克典	岩手県のアカマツをマツ枯れから守る	地域文化を支える人・社会・自然のつながりVol.4－未来にアカマツの文化と生業をつなぐために－、:22-33	2024.03.
151	中村克典	気候変動の下で松くい虫被害にどう対処するのか？	杣径、72:22-28	2024.03.
152	中村克典	マツ材線虫病にどう対処するか－防除対策の考え方と実践－	樹木医による樹木診断・治療事例集(日本樹木医会、215頁)、:114-117	2024.03.
153	江崎功二郎(石川県農林総合研究センター林業試験場)、 中村克典、前原紀敏	伐倒くん蒸処理丸太におけるマツノマダラカミキリの生存とその要因	日本森林学会誌、106(4):101-108	2024.04.
154	NAKAJIMA Gou(中島剛・青森県産業技術センター林業研究所)、IKI Taiichi(井城泰一)、AIKAWA Takuya(相川拓也)、HARA Takumi(原拓生・東芝ITコントロールシステム)、ITO Eisuke(伊藤栄祐・サーモフィッシャーサイエンティフィック)、 NAKAMURA Katsunori(中村克典)	In situ three-dimensional visualization of Bursaphelenchus xylophilus inoculated in Pinus thunbergii using X-ray micro-computed tomography(X線マイクロCTによるクロマツに接種されたマツノザイセンチュウの三次元可視化)	Canadian Journal of Forest Research、54(5):611-618	2024.05.
155	NAKAMURA-MATORI Katsunori(中村克典)	Natural subsidence of pine wilt disease epidemic in a forest stand located at the northern-limit of the disease-affected area in Japan(日本の被害分布北限地域のアカマツ1林分におけるマツ材線虫病の自然終息)	Book of Abstracts: IUFRO 26th world conference “FORESTS & SOCIETY TOWARDS 2050”、:1509(T1.33)	2024.06.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
156	小林卓也、上田明良、尾崎研一、滝久智、加賀谷悦子、逢沢峰昭(宇都宮大学)、伊藤昌明(青森県産業技術センター)、 <b>中村克典</b> 、 <b>磯野昌弘</b> 、和田尚之(北海道立総合研究機構)、内田葉子(北海道立総合研究機構)、徳田佐和子(北海道立総合研究機構)	東日本のナラ枯れの被害域拡大を引き起こしているカシノナガキクイムシの由来を遺伝情報から明らかに	森林総合研究所研究成果選集2024(令和6年版)、26-27	2024.06.
157	<b>中村克典</b>	森を枯らす:「普通の虫」が悪者になるとき	図説日本の森林(朝倉書店、216頁)、140-141	2024.10.
158	亀山統一(琉球大学)、金元政幸(久米島町役場)、儀間典子(沖縄県庁)、 <b>中村克典</b>	沖縄県久米島に侵入したマツ材線虫病(第2報):被害拡大と展望	樹木医学研究、28(4):214-215	2024.10.
159	<b>中村克典</b>	庄内海岸における松くい虫被害の現状と今後の対策	日本海岸林学会米子大会講演要旨集(令和6年度)、:14-15(O21)	2024.10.
160	KOBAYASHI Takuya(小林卓也)、UEDA Akira(上田明良)、TAKI Hisatomo(滝久智)、AIZAWA Mineaki(逢沢峰昭・宇都宮大学)、ITO Masaaki(伊藤昌明・青森県産業技術センター)、 <b>NAKAMURA Katsunori(中村克典)</b> 、 <b>ISONO Masahiro(磯野昌弘)</b> 、WADA Hisayuki(和田尚之・北海道立総合研究機構)、UCHIDA Yoko(内田葉子・北海道立総合研究機構)、TOKUDA Sawako(徳田佐和子・北海道立総合研究機構)、SHODA-KAGAYA Etsuko(加賀谷悦子)、OZAKI Kenichi(尾崎研一)	Demographic history of <i>Platypus quercivorus</i> (Coleoptera: Curculionidae), a beetle causing mass mortality of oak trees, in eastern Japan(ナラ菌媒介甲虫カシノナガキクイムシの東日本における歴史的集団動態)	Insect Systematics and Diversity、8(5):3	2024.10.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
161	相川拓也、市原優、升屋勇人、 <b>中村克典</b>	寒冷地域のマツ枯死木からマツノザイセンチュウを効率的に検出するには？	日本森林学会大会講演要旨集、136:166(M-11)	2025.03.
162	<b>中村克典</b>	岩手県奥州市のアカマツ1林分におけるマツ材線虫病の局地的自然終息	日本森林学会大会講演要旨集、136:166(M-10)	2025.03.
163	金谷整一、手塚賢至(屋久島・ヤクタネゴヨウ調査隊)、池亀寛治(種子島・ヤクタネゴヨウ保全の会)、秋庭満輝、 <b>中村克典</b>	マツ材線虫病による絶滅危惧種ヤクタネゴヨウの衰退	日本森林学会大会講演要旨集、136:92(T1-1)	2025.03.
164	<b>綾部慈子、鳥居正人、加賀谷悦子</b>	令和6年度農林水産研究の推進(委託プロジェクト研究)の紹介	東北林業試験研究機関連絡協議会森林保全専門部会、最近の保護上の話題および研究成果の予報(令和6年度)、:23	2024.06.
165	<b>AYABE Yoshiko(綾部慈子)</b> 、MASUYA Hayato(升屋勇人)	Estimated life history of the curculionid needleminer <i>Parendaeus abietinus</i> in relation to defoliation damage in fir trees.(ゾウムシ科潜葉虫モミハモグリゾウムシの生活史とモミの落葉被害)	Journal of Forest Research、29(6):475-484、 <a href="https://doi.org/10.1080/13416979.2024.2384684">https://doi.org/10.1080/13416979.2024.2384684</a>	2024.08.
166	<b>AYABE Yoshiko(綾部慈子)</b>	Can the Curculionid leafminer <i>Parendaeus abietinus</i> attack subalpine non-host <i>Abies</i> trees?(ゾウムシ科潜葉虫モミハモグリゾウムシは非寄主植物の亜高山性モミ属を利用できるか?)	IUFRO 2024 TOKYO: Theory and Practice to address Defoliating Insects、Invasive Pests and Biological Control of Insects and Pathogens in Forests、:56	2024.08.
167	相川拓也、 <b>綾部慈子、鳥居正人、小澤壮太、田端雅道、磯野昌弘</b>	(8)生物被害研究グループ	森林総合研究所東北支所年報(令和6年版)、65:11-13	2024.12.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
168	綾部慈子、相川拓也	森林害虫のハバチ類はボルバキアに感染しているか？	日本森林学会大会講演要旨集、136:275(PL-14)	2025.03.
169	綾部慈子	リーフマイナーの行動生態学－生態学的意義から防除まで－	日本森林学会大会講演要旨集、136:56(第31回森林昆虫談話会)	2025.03.
170	HATTORI Yukako(服部友香子)、MASUYA Hayato(升屋勇人)、 <b>TORII Masato(鳥居正人)</b> 、MIYAMOTO Toshizumi(宮本敏澄・北海道大学)、KOIWA Toshiyuki(小岩俊行・岩手県)、NAKASHIMA Chiharu(中島千晴・三重大学)	Lectotypification、epitypification、and molecular phylogenetic confirmation of <i>Cytospora paulowniae</i> comb. nov. a causal pathogen of Paulownia tree canker in Japan(キリ腐らん病菌 <i>Cytospora paulowniae</i> comb. nov. のレクトタイプフィケーション、エピタイプフィケーションおよび分子系統学的位置)	Mycoscience、65(4):156-161	2024.06.
171	<b>鳥居正人</b>	カラマツに発生する病害－先枯病と腐朽病害－	岩手の林業、802:6-7	2024.09.
172	勝木俊雄、山下香菜、 <b>鳥居正人</b> 、安藤裕萌、石原誠、酒井佳美、高橋與明	簡易な写真測量を用いたメタセコイヤ切株のオルソ画像の合成	樹木医学会大会要旨集、29:59(P-23)	2024.11.
173	高橋由紀子、升屋勇人、服部友香子、山下聡、 <b>鳥居正人</b> 、安藤裕萌	杭捕捉法による自然林内におけるナラタケ属菌の分布調査	樹木医学会大会要旨集、29:44(P-8)	2024.11.
174	<b>鳥居正人</b> 、升屋勇人	クマ剥ぎ被害木における菌類の検出位置とそれらの病原力、腐朽力との関連	日本森林学会大会講演要旨集、136:168(M-18)	2025.03.
175	山下聡、服部友香子、升屋勇人、服部力、 <b>鳥居正人</b> 、 <b>綾部慈子</b> 、市原優、安藤裕萌	スギ林における森林環境と樹木病害発生状況との関係：東北地方での一事例	日本森林学会大会講演要旨集、136:167(M-16)	2025.03.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
176	小澤壮太	土壌から得られた昆虫病原性線虫のマツノマダラカミキリ殺虫活性評価	東北林業試験研究機関連絡協議会森林保全専門部会、最近の保護上の話題および研究成果の予報(令和6年度)、:4	2024.06.
177	小澤壮太、鳥居正人、綾部慈子、中村克典	岩手県で捕獲したオオマルクビヒラタカミキリから分離された寄生性線虫について	東北森林科学会大会講演要旨集、29:ポスターセッション15	2024.11.
178	小澤壮太、前原紀敏、中村克典	マツノマダラカミキリ放飼により効率よくクロマツに病徴再現するための条件	日本森林学会大会講演要旨集、136:161(L-11)	2025.03.
179	田端雅進	縄文時代から利用されてきたウルシ	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:5	2024.07.
180	田端雅進	ウルシの特性	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:6	2024.07.
181	田端雅進	漆の現状と方法	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:7	2024.07.
182	田端雅進、渡辺敦史(九州大学)	漆生産量の多いウルシの選抜	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:11	2024.07.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
183	田端雅進	分根苗の生産	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:12	2024.07.
184	田端雅進、竹本周平(東京大学)、中村仁(元農業・食品産業技術総合研究機構)、小岩俊行(岩手県林業技術センター)	病害(白紋羽病)	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:23	2024.07.
185	田端雅進、安藤裕萌、升屋勇人	病害(うどんこ病)	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:25	2024.07.
186	田端雅進	虫害(ハゼアブラムシ、キジラミ類、クスサン)	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:26	2024.07.
187	田端雅進	採取した漆の特性	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:28	2024.07.
188	升屋勇人、市原優、田端雅進	病害(疫病)	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:22	2024.07.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
189	田端雅進、安藤裕萌、升屋勇人、市原優、相川拓也、	病害(胴枯病)	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:24	2024.07.
190	田端雅進、中村雅哉	漆の硬化に関わるラッカーゼ	森林総合研究所第5期中長期計画成果23(森林産業-9)ウルシの健全な森を育て、持続的に良質な漆を生産する、:29	2024.07.
191	KURODA Katsushi(黒田克史)、YAMANE Kenichi(山根健一・森林総研非常勤)、 <b>TABATA Masanobu(田端雅進)</b>	Resin duct development process in relation to tree growth in the lacquer tree ( <i>Toxicodendron vernicifluum</i> ) bark(ウルシ樹皮の成長における樹脂道発達過程)	The 10th Pacific Regional Wood Anatomy Conference、Oral 17	2024.09.
192	KURODA Katsushi(黒田克史)、YAMANE Kenichi(山根健一・元森林総研非常勤職員)、 <b>TABATA Masanobu(田端雅進)</b>	Anatomical study of resin duct development in the bark of the lacquer tree ( <i>Toxicodendron vernicifluum</i> (Stokes) F.A. Barkley) in relation to tree growth(成長に伴うウルシ樹皮の樹脂道発達の組織学的研究)	Trees-Structure and Function、39:8	2024.12.
193	田端雅進	国産漆の新たな脅威－ウルシ林を衰退させる病原菌－	Forest Winds、100:1-2	2024.12.
194	田端雅進	21 国産ウルシを持続的に生産し、利用する技術の刷新	森林産業実用化カタログ2025、:11	2025.03.
195	小柳知代(東京学芸大学)、 <b>松浦俊也</b> 、古川拓哉、小山明日香	戦後の山村における食用野生植物資源利用の変遷－福島県只見町を事例に－	日本森林学会誌、106(4):77-87	2024.04.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
196	ODA Kimisato(小田龍聖)、YAMAKI Kazushige(八巻一成)、MIYAMOTO Asako(宮本麻子)、OTSUKA Keita(大塚啓太)、JINGU Shoma(神宮翔真)、HIRANO Yuichiro(平野悠一郎)、INOUE Mariko(井上真理子)、 <b>MATSUURA Toshiya(松浦俊也)</b> 、SAITO Kazuhiko(齋藤和彦)、TAKAYAMA Norimasa(高山範理)	A survey on interest in forests and frequency of visits among residents of the 23 wards of Tokyo (The Center of Tokyo)、Japan(東京23区民を対象とした森林への訪問・関心に関する調査)	Japan Geoscience Union Meeting 2024(日本地球惑星科学連合2024年大会)、HCG19-02	2024.05.
197	MIURA Satoru(三浦覚)、KOMATSU Masabumi(小松雅史)、HASHIMOTO Shoji(橋本昌司)、 <b>MATSUURA Toshiya(松浦俊也)</b> 、HACHINOHE Mayumi(農研機構食品研究部門)、OHASHI Shinta(大橋伸太)、IMAMURA Naohiro(今村直広)、SAKASHITA Wataru(坂下渉)、OHMAE Yoshimi(大前芳美)、MANAKA Takuya(眞中卓也)、SAKATA Tadashi(阪田匡司)、SHINOMIYA Yoshiki(篠宮佳樹)	Radioactive contamination and radiation protection in Fukushima forests(福島県の森林における放射能汚染と放射線防護)	IUFRO 2024 XXVI World Congress、Book of Abstracts、:1133(T1.14)	2024.06.
198	江原誠、 <b>松浦俊也</b> 、GONG Hao(筑波大学)、SOKH Heng(カンボジア森林局)、LENG Chivin(カンボジア環境省)、CHOEUNG Hong Narith(カンボジア森林局)、SEM Rida(カンボジア森林局)、野村久子(九州大学)、津山幾太郎、松井哲哉、百村帝彦(九州大学)	違法伐採対策を最優先する場所はどこ？－カンボジアREDD+プロジェクトへの貢献－	森林総合研究所研究成果選集2024(令和6年版)、6-7	2024.06.



No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
199	松浦俊也	暮らしを支える森の恵み－森から生まれる林産物	図説日本の森林(朝倉書店、216頁)、152-153	2024.10.
200	松浦俊也	東北地方における主伐地分布と所有形態との関わり	東北森林科学会大会講演要旨集、29:口頭発表7	2024.11.
201	宮本麻子、松浦俊也	森林生態系多様性基礎調査でみるスギ人工林の林分構造－3所有形態の比較	日本森林学会大会講演要旨集、136:186(PA-28)	2025.03.
202	松浦俊也	森林訪問を促す地理情報提供の重要性	日本森林学会大会講演要旨集、136:83(S5-2)	2025.03.
203	小柳知代(東京学芸大学)、古川拓哉、松浦俊也、小山明日香	野生植物資源利用に関する知識と経験の相互作用	日本生態学会大会講演要旨、72:P2-219	2025.03.
204	小田龍聖、八巻一成、宮本麻子、大塚啓太、神宮翔真、平野悠一郎、井上真理子、松浦俊也、斉藤和彦、高山範理	東京23区民の森林への関心、訪問に関する調査報告	日本森林学会大会講演要旨集、136:118(B-10)	2025.03.
205	TAKAHASHI Takuya(高橋卓也・滋賀県立大学)、HORI Yasuto(堀靖人・東北農林専門職大学)、OTSUKA Ikumi(大塚生美)、SHIBATA Shingo(柴田真吾・東北農林専門職大学)、TSUGE Takahiro(柘植隆宏・上智大学)	Innovativeness of Japanese forest owners and municipalities regarding the valorization of forest ecosystem services: Quantitative evaluation of mutual influences(日本の森林所有者および自治体の森林生態系サービスの価値向上に関する革新性：相互影響の定量的評価)	Forest Policy and Economics、166:103269	2024.06.
206	高橋卓也(滋賀県立大学)、堀靖人（東北農林専門職大学）、大塚生美、柴田真吾（東北農林専門職大学）、柘植隆宏（上智大学）	森林所有者と基礎自治体の森林生態系サービス価値化に対する革新性：アクター相互の影響に関する定量的評価	環境経済・政策学会大会(2024)、Room C	2024.09.

No.	著者名（全員）	成果発表のタイトル等	誌名、巻号頁	発行年月
207	<b>大塚生美</b>	会員紹介：株式会社柴田産業	伐採搬出・再造林ガイドライン全国連絡会議 NEWS LETTER、8:2-4	2024.11.
208	堀靖人(東北農林専門職大学)、 <b>大塚生美</b>	広葉樹利用の地域における意義	林業経済学会秋季大会プログラム・要旨集(2024)、A19	2024.11.
209	丸山佳久(中央大学)、 <b>大塚生美</b> 、堀靖人(東北農林専門職大学)	ESG投資に向けた森林価格の計算可能性	経理研究、63:94-106	2024.12.
210	TAKAHASHI Takuya(高橋卓也・滋賀県立大学)、HORI Yasuto(堀靖人・東北農林専門職大学)、 <b>OTSUKA Ikumi(大塚生美)</b> 、SHIBATA Shingo(柴田真吾・東北農林専門職大学)、TSUGE Takahiro(柘植隆宏・上智大学)	Innovativeness of Japanese forest owners/municipalities on nature service marketing(日本の森林所有者／基礎自治体の自然サービス・マーケティングに対する革新性について)	ISPIM2024 December 4 (Wed.)、2024 Floor 7 Room 705/8.05 Policies & Public Instruments	2024.12.
211	<b>大塚生美</b>	「緑の雇用」と森林再生：秋田県の事例	「緑の雇用」事業の評価に関する調査報告書(令和6年度)、:78-100	2025.03.
212	<b>大塚生美</b>	公有林の経営主体と総有の変化：山形県飯豊町中津川財産区の事例	日本森林学会大会講演要旨集、136:186(PA-26)	2025.03.
213	<b>大塚生美</b> 、堀靖人(東北農林専門職大学)、丸山佳久(中央大学)	脱炭素社会における日本の森林資産価値の課題－競売不動産での「山林評価」の実態から－	サステナブルマネジメント、24:54-62	2025.03.

## 1－4）研究資料

### （１）2020～2024 年度に実施したスギ人工林収穫試験地の定期調査の概要

松浦俊也（森林資源管理研究グループ）・小谷英司（森林管理研究領域）・御田成顕・道中哲也（林業経営・政策研究領域）・久保山裕史（産学官民連携推進調整監）・細田和男（研究ディレクター）・西園朋広・宮本麻子（森林管理研究領域）

#### 1. はじめに

林分の成長量、収穫量をはじめとする統計資料を収集することによって林分構造の推移を解明することを目的に、森林総合研究所東北支所では、東北森林管理局と共同で国有林内に「収穫試験地」を設け、70 年以上にわたって継続調査を実施してきている。2020 年度から本年（2024 年）度にかけて、相内沢スギ人工林択伐試験地および大沢・大明神・上大内沢・深沢のスギ人工林収穫試験地において定期調査を実施したので、これまでの成長経過と併せて調査の概要を報告する。なお、各試験地の概要・これまでの経過については過去の年報に報告済みの場合があるが、利便性を考えて同じ内容を再掲している。

米代東部森林管理署、秋田森林管理署、米代東部森林管理署上小阿仁支署、山形森林管理署最上支署の方々には調査に際して便宜を図って頂いた。とくに、最上支所鮭川担当区の野中佳祐氏には、深沢スギ人工林収穫試験地に向かう林道状況の事前視察や林道沿いの草刈りなど特段の配慮を頂いた。また、岩手大学大学院生の大久保良太氏、東北支所（調査当時）の磯野昌弘氏と金野勇氏には調査への協力を頂いた。ここに記して、厚くお礼申し上げる。

#### 2. 相内沢スギ人工林択伐試験地（秋田県小坂町）

この試験地は、人工林収穫試験地として、東北森林管理局米代東部森林管理署 3012 林班は小班のスギ人工林（海拔高約 400 m）に 1937 年に設置された。

試験地のスギは、1906 年に植栽された。植栽本数は 3,300 本/ha である（1908 年に 330 本/ha の補植がなされた）。植栽後、1913 年まで毎年下刈りが実施され、1919 年には蔓切り、1922 年と 1951 年には枝打ちが実施された。また、1924 年、1931 年および 1932 年には除伐が実施された。1937 年に林分の相対的な成績により、上、中および下の 3 つの試験区が設定された（以下、それぞれ第 1 分区、第 2 分区および第 3 分区と記す）。試験区の面積は、第 1 分区で 0.211ha、第 2 分区で 0.203ha および第 3 区で 0.20ha である。試験区はほぼ平坦地である。試験地の立木に対して、1937 年から 1957 年まで 5 年おきに毎木調査が行われた。すべての測定時点において、胸高直径 7.0cm 以上のスギ個体について胸高直径、樹高が測定された。ここまでの観測によって、この試験地の成長量が著しく不良であることがわかったこと、また、第一分区においては、伏状性のスギ稚樹の発生が多いことから、1957 年に人工林収穫

試験地を廃止して、第一分区のみをスギ人工林択伐試験地として再設定した。

その後、1969 年、1994 年、2000 年および 2010 年に択伐試験地内の上木と下木の調査がなされた。上木については、胸高直径、樹高が測定された。下木については、1969 年に樹高、1994 年、2000 年および 2010 年に直径と樹高が測定された。ただし、下木の個体識別はなされていない。また、これ以外に 1984 年と 1986 年に下木の調査が実施されたようだが、データが残っていない。なお、試験地設定後、1937 年、1942 年、1957 年、1969 年および 1987 年に間伐が実施された。

2020 年 10 月に試験地設定以来 10 回目の調査を実施した。上木について、胸高直径、樹高および枝下高を直径巻尺と超音波測高器を用いて測定した。測定作業には2人日を要した。下木(樹高 1.2m 以上のスギと胸高直径 3cm 以上の広葉樹)についても、胸高直径、樹高および枝下高を直径巻尺、超音波測高器もしくは測竿を用いて測定し、個体番号を付与した。測定作業には9人日を要した。上木の調査結果の概要をこれまでの成長経過と併せて図1に示す。なお、図上には調査時の生立木のみの集計値がプロットされている。

本試験地に関連した報告として、金・小坂(1987)、和泉ら(2007)、小谷ら(2011)、細田(2014)、西園ら(2023)などがある。

### 3. 大沢スギ人工林収穫試験地(秋田県仙北市(旧田沢湖町))

この試験地は、東北森林管理局秋田森林管理署 164 林班と、と 1-2 小班のスギ人工林(海拔高約 260 m)に 1938 年に設置された。

試験地のスギは 1908 年に植栽された。植栽本数は 3000 本/ha である(1908 年に 600 本/ha の補植がなされた)。植栽後 1914 年まで毎年下刈りが実施され、1916 年と 1919 年には蔓切りが実施された。1938 年に林分の相対的な成績により、上、中および下の3つの試験区が設定された(以下、それぞれ第1分区、第2分区および第3分区と記す)。試験区の面積は、第 1 分区で 0.20ha、第 2 分区で 0.22ha および第 3 区で 0.21ha である。試験区の傾斜は、第一分区と第三分区はほぼ平坦で、第三分区で北東に 5~20° 傾斜している。試験地の立木に対して、1938 年から 1958 年まで 5 年おきに毎木調査が行われ、さらに 1980 年、1990 年、2001 年および 2010 年に毎木調査が行われた。なお、すべての測定時点において、胸高直径 7.0cm 以上のスギ個体について胸高直径、樹高が測定された。なお、試験地設定後 1938 年、1948 年、1958 年、1980 年、1993 年および 2007 年に間伐が実施された。

2021 年 9 月に、試験地設定以来 10 回目の定期調査を実施した。胸高直径、樹高および枝下高を直径巻尺と超音波測高器を用いて測定した。また、ドローン空撮も併せて行った。以上の測定作業には8人日を要した。調査結果の概要をこれまでの成長経過と併せて図 2 に示す。なお、図上には調査時の生立木のみの集計値がプロットされている。

本試験地に関連した報告として、寺崎ら(1964)、和泉ら(2007)、小谷ら(2011)および西園ら(2008、2022)等がある。

#### 4. 大明神スギ人工林収穫試験地(山形県最上町)

この試験地は、東北森林管理局山形森林管理署最上支署 1052 林班 に、ほ、へ小班のスギ人工林(海拔高約 250 m)に 1937 年に設置された。

試験地のスギは 1921 年に植栽された。1937 年に林分の相対的な成績により、上、中および下の3つの試験区が設定された(以下、それぞれ第1分区、第2分区および第3分区と記す)。試験区の面積は第 1 分区で 0.22ha、第 2 分区で 0.22ha および第 3 区で 0.23ha である。試験区の傾斜は、各分区ともに西向 5~10° である。地質は、黒色頁岩であり、土壌形は Bl(w) である。試験地の立木に対して、1937 年、1941 年、1947 年、1956 年、1962 年、1972 年、1978 年、2001 年および 2011 年に毎木調査が行われた(1990 年にも調査が実施されたとの記録があるが、その詳細は不明である)。すべての測定時点において、胸高直径 7.0cm 以上のスギ個体について胸高直径、樹高が測定された。なお、試験地設定後 1937 年に第一分区で、1947 年に第一分区と第二分区で、1956 年に全分区で間伐が実施された。また、1990 年に間伐が実施されているようであるが、詳細は不明である。

2022 年 9 月に、試験地設定以来 10 回目の定期調査を実施した。胸高直径、樹高および枝下高を直径巻尺と超音波測高器を用いて測定した。測定作業には6人日を要した。調査結果の概要をこれまでの成長経過と併せて図 3 に示す。なお、図上には調査時の生立木のみの集計値がプロットされている。第二・三分区で若齢時に本数の増加がみられるのは、多数の新界木が発生したためである。

本試験地に関連した報告として、寺崎ら(1964)、和泉ら(2007)、小谷・天野(2013)および西園ら(2019)等がある。

#### 5. 上大内沢スギ人工林収穫試験地(秋田県上小阿仁村)

この試験地は東北森林管理局米代東部森林管理署上小阿仁支署 134 林班い 1-4 小班(海拔高 150 m)に 1939 年に設定された。

試験地のスギは 1913 年に植栽された。植栽本数は 4,000 本/ha である。植栽後 1917 年まで下刈りが実施され、1919 年、1927 年および 1931 年には蔓切りが実施され、1933 年、1936 年および 1949 年に除伐が実施された。1939 年に林分の相対的な成績により、上、中および下の3つの試験区が設定された(以下、それぞれ第1分区、第2分区および第3分区と記す)。試験区の面積は、第 1 分区で 0.18ha、第 2 分区で 0.15ha および第 3 区で 0.15ha である。試験区の傾斜は、第1分区で北北東向き 10°、第2分区で北東向き6° および第3分区で南東向き 23° である。試験地の立木に対して、1939 年と 1949 年に毎木調査が行われ、その後 1989 年までは 5 年おきに毎木調査が行われ、さらに 2000 年および 2010 年に毎木調査が行われた。なお、すべての測定時点において、胸高直径 7.0cm 以上のスギ個体について胸高直径、樹高および枝下高が測定された。なお、試験地設定後 1949 年、1959 年、1964 年および 1989 年には間伐が実施された。また、2017 年には、周辺林分の伐採のため作業道が開設されたため、一部の立木が伐採された。

2023 年 9 月に、試験地設定以来 12 回目の定期調査を実施した。胸高直径、樹高および枝下高を直径巻尺と超音波測高器を用いて測定した。測定作業には6人日を要した。調査結果の概要をこれまでの成長経過と併せて図 4 に示す。なお、図上には調査時の生立木のみの集計値がプロットされている。

本試験地に関連した報告として、寺崎ら(1964)、和泉ら(2007)、小谷ら(2011)および西園ら(2008、2022)等がある。

## 6. 深沢スギ人工林収穫試験地(山形県最上郡鮭川村)

この試験地は、東北森林管理局山形森林管理署最上支署 2025 林班、り、ぬ、る小班のスギ人工林(海拔高約 200 m)に 1934 年に設置された。

試験地のスギは 1924 年に植栽された。植栽本数は 3,000 本/ha である(1925 年に 900 本/ha、1927 年に 600 本/ha の補植が実施されている)。植栽後 1931 年まで下刈りが実施され、1932 年、1934 年(9 月と 12 月)に除伐が実施された。1934 年に林分の相対的な成績により、上、中および下の3つの試験区が設定された(以下、それぞれ第1分区、第2分区および第3分区と記す)。試験区の面積は第1分区で0.20ha、第2分区で0.20ha および第3区で0.20ha である。試験区の傾斜は、第一分区で南東向き5°、第二分区で東向き30° および第三分区で南東向き7° である。試験地の立木に対して、1934 年、1939 年および 1949 年に毎木調査が行われ、その後 1964 年までは 5 年おきに毎木調査が行われ、さらに、1980 年、1995 年、2002 年および 2012 年に毎木調査が行われた。すべての測定時点において、胸高直径 7.0cm 以上のスギ個体について胸高直径、樹高が測定された。なお、試験地設定後 1954 年に第一分区と第二分区で間伐が実施された。また、第三分区は 1959 年以降調査を行っていない。

2024 年 9 月に、試験地設定以来 11 回目の定期調査を実施した。胸高直径、樹高および枝下高を直径巻尺と超音波測高器を用いて測定した。測定作業には 10 人日を要した。調査結果の概要をこれまでの成長経過と併せて図 5 に示す。なお、図上には調査時の生立木のみの集計値がプロットされている。若齢時に本数の増加がみられるのは、多数の新界木が発生したためである。

本試験地に関連した報告として、寺崎ら(1964)、和泉ら(2007)、小谷・天野(2013)等がある。

## 引用文献

- (1) 細田和男ら(2014) 平成 18～22 年度に調査した収穫試験地等固定試験地の経年成長データ(収穫試験報告第 25 号). 森林総研研報 443:225-254.
- (2) 和泉慎太郎・英賀慶彦・西園朋広・澤田智志(2008) スギ超長伐期林分における収穫予想表の調製に向けた取組. 国有林業務研究発表集平成 19 年度:15-21.
- (3) 小谷英司・天野智将(2013) 大明神と深沢のスギ人工林収穫試験地における定期調査の概要. 森林総研東北支年報 54:26-28.

- (4) 小谷英司・西園朋広・天野智将・中北理・森澤猛(2011) 大沢人工林収獲試験地・相内沢人工林択伐試験地・上大内沢人工林収獲試験地における定期調査の概要. 森林総研東北支所年報 52:21-24.
- (5) 金豊太郎・小坂淳一(1987) スギ複層林施業試験の成長と収獲(I) 相内沢人工林試験地の事例. 日林東北支部誌 39:143-145
- (6) 西園朋広・田中邦宏・栗屋善雄・大石康彦・林 雅秀・横田康裕・天野智将・久保山裕史・八巻一成・古井戸宏通(2008) 秋田地方のスギ人工林における林分材積成長量の経年推移. 日林誌 90:232-240
- (7) 西園朋広ら(2023) 平成 28～令和2年度に調査した収獲試験地等固定試験地の経年成長データ(収獲試験報告第 27 号). 森林総研研報 467:141-190
- (8) 西園朋広ら(2019) 平成 23～27 年度に調査した収獲試験地等固定試験地の経年成長データ(収獲試験報告第 26 号). 森林総研研報 450:231-273
- (9) 西園朋広・小谷英司・鹿又秀聡・細田和男・福本桂子・山田祐亮・天野智将 (2022). スギ人工林の収益性に基づく最適伐期齢の検討ー東北日本海側の固定試験地における長期継続調査データを用いた分析ー. 森林計画学誌、55(2):77-93
- (10) 森林総合研究所東北支所(1992) 秋田営林局管内試験地概要. 70pp、森林総合研究所東北支所.
- (11) 寺崎康正・小坂淳一・金豊太郎(1964) 林分の構造と成長、収獲に関する研究 第1報 秋田地方スギ人工林の成長と収獲. 林試研報 168:1-306.

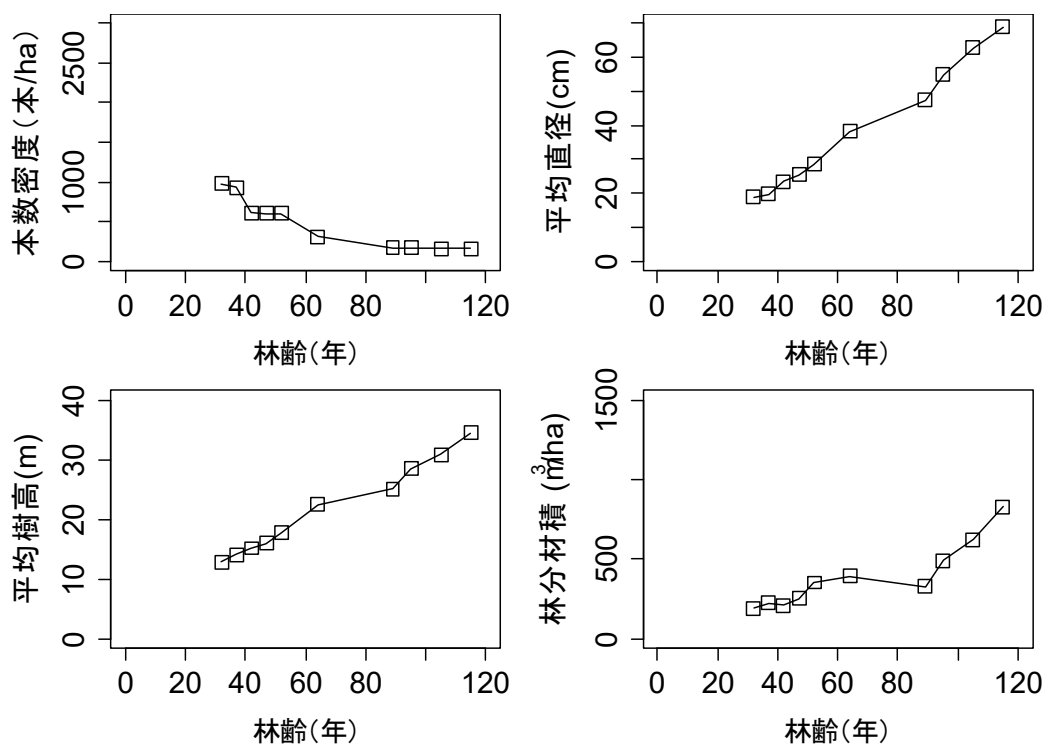


図1. 相内沢人工林収穫試験地の成長経過

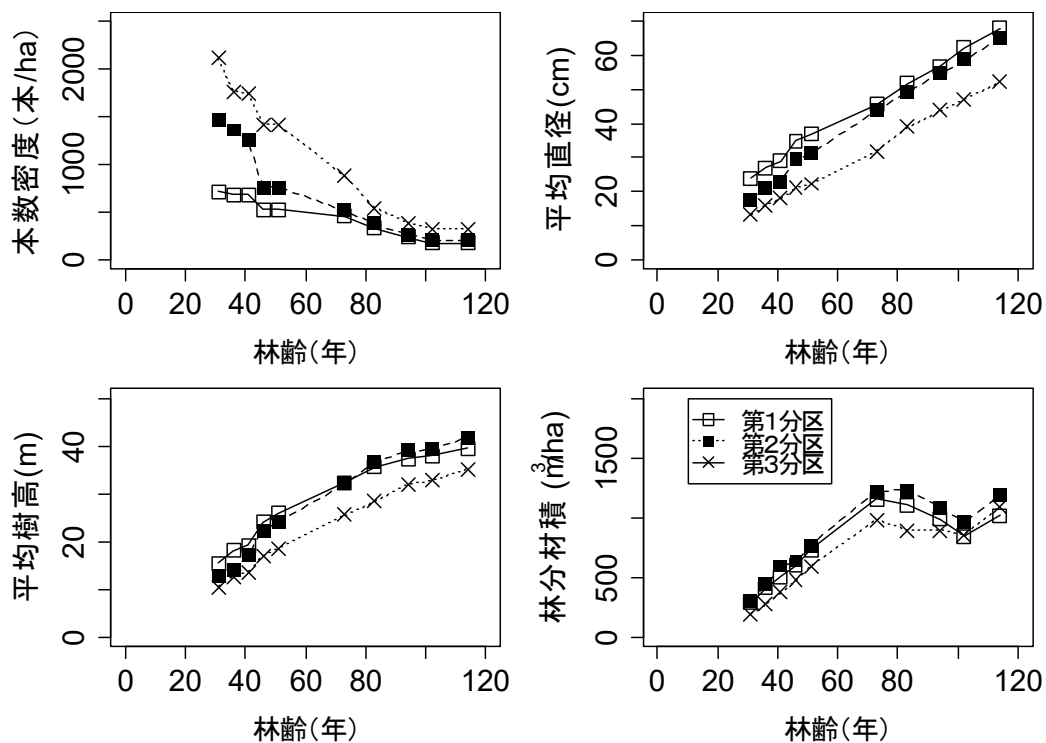


図2. 大沢人工林収穫試験地の成長経過



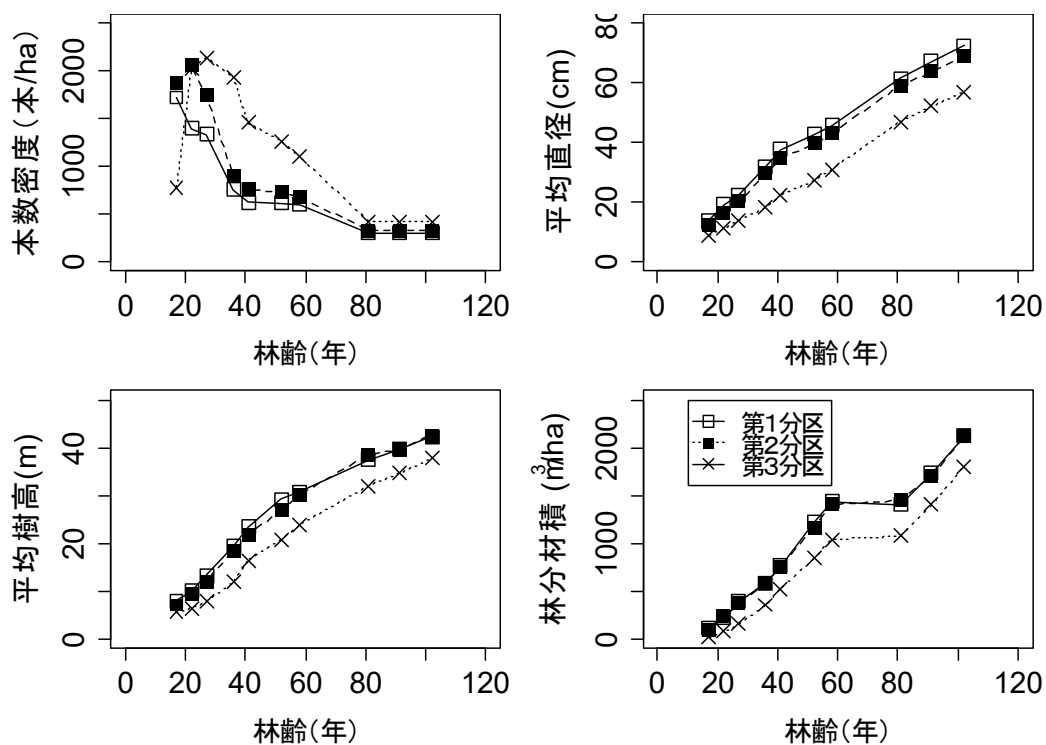


図3. 大明神人工林収穫試験地の成長経過

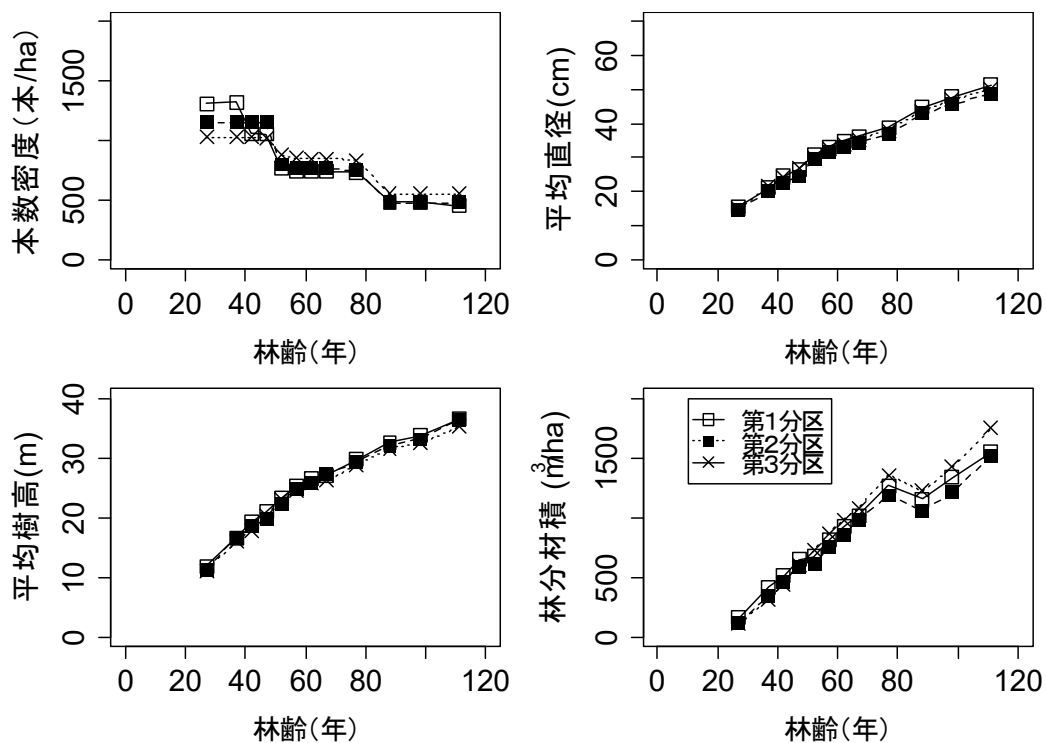


図4. 上大内沢人工林収穫試験地の成長経過

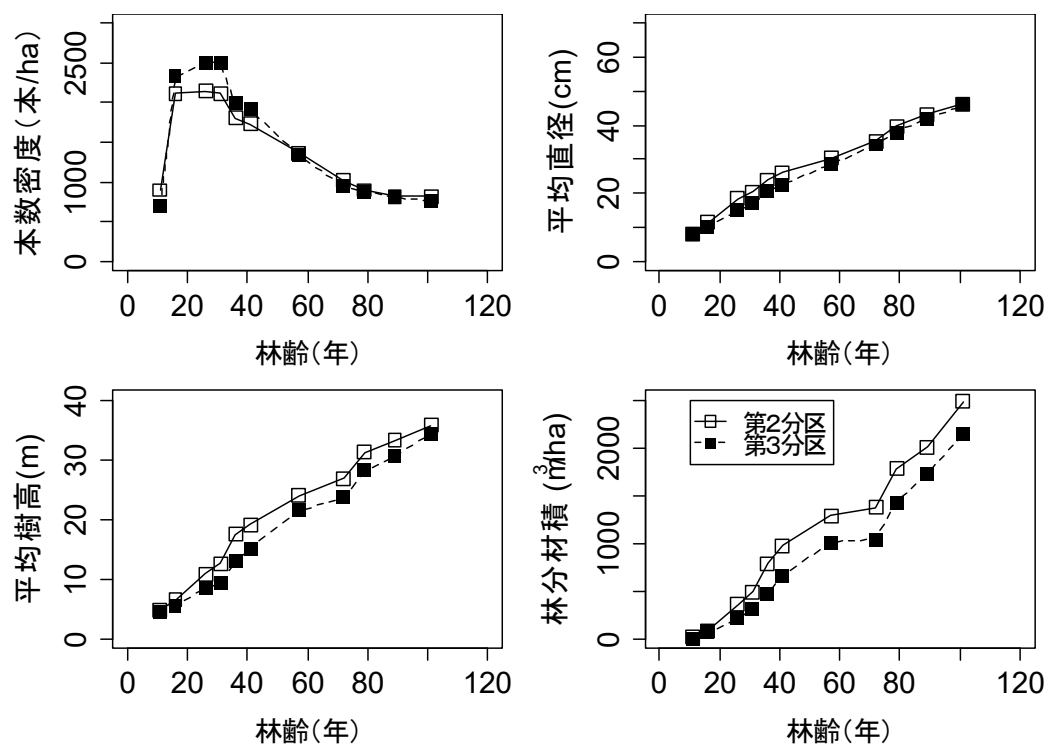


図5. 深沢人工林収穫試験地の成長経過

## 2 令和6年度の広報活動の記録

### 2-1)ラジオ番組「東北のもり」の放送

○放送期間：令和6年10月～令和7年3月

○放送時間：毎月第2火曜日 16:30～（5分枠）

○放送局：エフエム岩手

○放送内容・担当：

令和6年10月8日 「なぜ？クマの出没がこんなに増えているの？」

東北支所 チーム長（動物生態遺伝担当）

大西尚樹

11月12日 「マツ枯れ最前線で樹種転換に挑む」

東北支所 育林技術研究グループ

主任研究員 澤田 佳美

12月10日 「ウルシを植えて日本の伝統文化を守る！」

東北支所 生物被害研究グループ

主任研究員 田端 雅進

令和7年 1月14日 「水源林をつくる仕事」

東北北海道整備局 盛岡水源林整備事務所

造林係 山本 泰之

2月11日 「風や波の力を弱める樹木の強さ」

東北支所 チーム長（立地評価研究担当）

小野 賢二

3月11日 「木の新品種ができるまで」

東北育種場 育種課

課長 井城 泰一

係員 阿部 楓子

### 2-2)令和6年度岩手県林業技術センター・森林総合研究所東北支所・東北育種場合同 成果報告会(中止)

### 3 令和6年度の会議等の記録

#### 3-1) 業務報告会

令和6年度東北支所業務報告会は、令和6年12月12日（木）～13日（金）に森林総合研究所東北支所大会議室において実施した。

#### 3-2) 東北地域評議会

外部有識者に評議会委員を委嘱し、東北支所及び東北育種場の令和5年度研究運営全般について概要を説明し、広い視野と専門的立場から意見、助言をいただいた。

##### ○日時・場所

令和7年2月17日（月）14:00～16:30

東北支所 大会議室

##### ○評議会委員

牛尾 光 東北森林管理局 森林整備部長

國崎 貴嗣 岩手大学農学部 教授

手塚 さや香 フリーランスライター・釜石地方森林組合コーディネーター

##### ○出席者

###### <東北支所>

山中高史（支所長）

岡本隆 （地域研究監）

都筑俊夫（総務課課長補佐）

小野賢二（チーム長（立地評価研究担当））

酒井 敦（育林技術研究グループ長）

高橋裕史（生物多様性研究グループ長）

綾部慈子（生物被害研究グループ主任研究員）

松浦俊也(欠席)（森林資源管理研究グループ長）

久保山裕史（産学官民連携推進調整監）

中山隆 （総務課長）

大西尚樹 （チーム長（動物生態遺伝担当））

齋藤智之 （森林生態研究グループ長）

萩野裕章 （森林環境研究グループ長）

高梨琢磨 （生物被害研究グループ長）

田端雅進 （生物被害研究グループ研究専門員）

小澤茂樹 （地域連携推進室長）

###### <東北育種場>

三重野信（場長）

井城泰一（育種課長）

竹田宣明（遺伝資源管理課長）

###### <森林整備センター東北北海道整備局>

石垣浩司（局長）

水井一彦（総務課長）

佐藤孝治（盛岡水源林整備事務所長）

##### ○評議会の概要

###### 1) 東北支所における研究運営状況の報告

以下の資料を基に令和6年度の研究運営状況について概要説明を行った。

[配布資料]：令和6年度東北支所活動一覧

令和6年度東北支所産学官民連携

研究成果選集

令和6年版支所年報

フォレストウインズ(No.98～100)

###### 2) 令和6年度地域研究について

以下の研究内容について、概要説明を行った。

＊広葉樹資源の有効活用に関する研究

「平庭高原白樺林再生に向けた連携・技術協力」

「ウルシ「おくくじやわら」の品種登録」

＊先端地域の病虫獣害対策に関する研究

「ツキノワグマの出没メカニズムの解明と対策の高度化」

「低密度・高密度地それぞれに対応したニホンジカの誘引・捕獲支援技術の開発」

「山形県蔵王におけるトウヒツヅリヒメハマキの発生動向」

「「農業×振動」：持続可能な振動農業技術に関する総説」

＊その他の研究課題

「国産黒トリュフの人工的な発生」

3) 林木育種センター東北育種場における活動の概要

以下の資料を基に令和6年度の活動概要について説明を行った。

[配布資料]：令和6年度東北育種場活動の概要

東北の林木育種（No.235～No.237）

4) 森林整備センター東北北海道整備局における活動の概要

以下の資料を基に令和6年度の活動概要について説明を行った。

[配布資料]：令和6年度森林整備センター東北北海道整備局管内事業実績等

5) 令和5年度評議会委員の講評に対するその後の取り組み

前年度評議会委員講評に対するその後の支所及び林木育種センター東北育種場の取り組みについて説明を行った。

6) 研究成果紹介

以下3課題の研究成果について発表を行った。

- ・「網張国有林のモミ枯損被害ーモミハモグリゾウムシの利用植物調査ー」

東北支所生物被害研究グループ主任研究員

綾部慈子

- ・「ウルシ「おくくじやわら」の品種登録について」

東北支所生物被害研究グループ研究専門員

田端雅進

- ・「スギミニチュア採種園における着花特性」

東北育種場育種課長

井城 泰一

7) 評議会委員講評

牛尾 光 氏

國崎 貴嗣 氏

手塚 さや香 氏



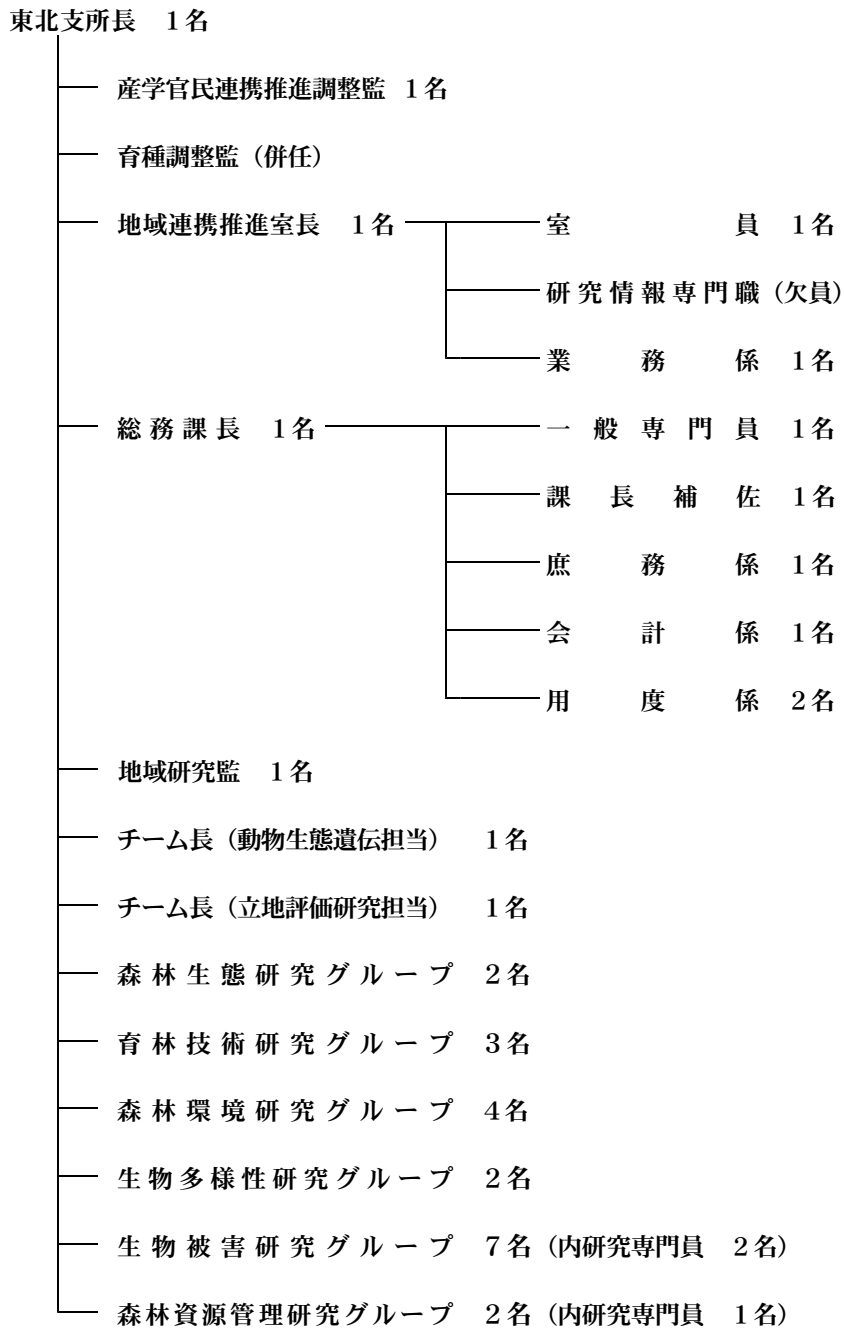
## Ⅱ 業務運営資料





## 1 組織

令和7年3月31日現在（再雇用職員含む）



職員数 35名（育種調整監除く）  
 一般職員 10名（内再雇用一般専門員1名）  
 研究職員 25名（内再雇用研究専門員3名）

## 2 施設・試験地等

### 2-1) 土地・施設

建物・敷地面積

(単位：㎡)

区 分	延床面積	敷 地						計
	建 物	建 物	試験施設	実 験 林	樹 木 園	苗 畑	他	
東北支所	5,326	16,305	2,932	49,513	12,531	37,581	14,538	133,400
山形実験林	22.65	3,593	4,457	176,092	0	0	27,748	211,890
森林理水試験地(※1)			(553)					(553)
表流水観測施設(※1)			(9)					(9)

( ) 書きは借地。※1 山形森林管理署最上支署国有林。

主な施設

名 称	面 積	所 属
育林実験棟	495 ㎡	共 通
ブナ帯環境変動解析棟	351	〃
粗試料調整測定室	142	〃
共同実験室	101	〃
雪害特殊実験棟	339	森林生態研究グループ・育林技術研究グループ
鳥獣実験室	323	生物多様性研究グループ
森林防疫実験棟	222	生物被害研究グループ
林地保全実験室	64	森林環境研究グループ
ガラス室	111	森林生態研究グループ
温 室	68	〃
隔離温室	76	生物被害研究グループ
資材倉庫(山形実験林)	22.65	共 通
安比二酸化炭素動態観測施設 (観測小屋)	21	共 通

### 2-2) 共同研究に利用できる機器

○ DNA シーケンサー

[性能概要] パーキンエルマー社 310-2

DNA の塩基配列の決定及びマイクロサテライト分析に用いる。  
共同研究に利用できる機器として登録している。

[担 当] チーム長(動物生態遺伝担当)

○ 軟 X 線発生装置

[性能概要] ソフテックス製 CMBW-2

樹木種子・木材等の非破壊検査に用いる。  
共同研究に利用できる機器として登録している。

[担 当] 育林技術研究グループ

○ 全窒素・全炭素測定装置

[性能概要] 住化分析センター製スミグラフ NC-22F

植物体・土壌の窒素炭素分析に用いる。  
共同研究に利用できる機器として登録している。

[担 当] 森林環境研究グループ

(令和 6 年度における共用利用の実績は無かった。)

## 2-3) 固定試験地

### (1) 東北森林管理局管内

令和7年3月現在

整理 番号	試 験 地 名	森林管理署	林 小 班	面 積 ha	樹 種	設 定 年 度	終了予 定年度	担当研究室
秋1	相内沢人工林択伐試験地	米代東部	3012は	0.72	スギ	昭32 (1957)	令37 (2055)	森林資源管理研究G
秋5	下内沢人工林収穫試験地	米代東部	156に～に3	4.20	スギ	昭9 (1934)	令10 (2028)	森林資源管理研究G
秋12	上大内沢人工林収穫試験地	上小阿仁支署	134い1～い3	0.48	スギ	昭14 (1939)	令44 (2062)	森林資源管理研究G
秋21	添畑沢スギ間伐試験地	米代西部	125は	17.05	スギ	昭28 (1953)	令39 (2057)	育林技術研究G
秋22	添畑沢人工林択伐試験地	米代西部	125は		スギ	昭31 (1956)	令39 (2057)	育林技術研究G
秋27	岩川人工林収穫試験地	米代西部	99と, ち 100は	0.45	スギ	昭15 (1940)	令37 (2055)	森林資源管理研究G
秋33	男鹿山人工林収穫試験地	米代西部	2089ほ	1.25	スギ	昭13 (1938)	令39 (2057)	森林資源管理研究G
秋35	務沢天然林施業試験地	秋 田	18ぬ	1.00	スギ	昭3 (1928)	令27 (2045)	育林技術研究G
秋39	大又赤倉カラマツ間伐試験地	秋 田	2182ち	2.17	カラマツ	大6 (1917)	令39 (2057)	育林技術研究G
秋41	大沢人工林収穫試験地	秋 田	1164と～と2	1.37	スギ	昭13 (1938)	令38 (2056)	森林資源管理研究G
秋42	土倉沢人工林収穫試験地	秋 田	1089わ～わ3	2.44	カラマツ	昭23 (1948)	令49 (2067)	森林資源管理研究G
秋51	三ツ沢天然林収穫試験地	最上支署	2029た	2.35	ブナ	昭34 (1959)	令47 (2065)	森林資源管理研究G
秋52	深沢人工林成績調査地	最上支署	2025ぬ, る	0.60	スギ	昭9 (1934)	令52 (2070)	森林資源管理研究G
秋54	大明神人工林成績調査地	最上支署	1052に, ほ, へ	1.42	スギ	昭12 (1937)	令53 (2071)	森林資源管理研究G
秋55	朝日沢人工林収穫試験地	最上支署	1057に	0.61	カラマツ	昭34 (1959)	令32 (2050)	森林資源管理研究G
秋56	戸沢山人工林収穫試験地	山 形	218ら, ら1	2.14	スギ	昭13 (1938)	令35 (2053)	森林資源管理研究G
秋61	釜淵森林理水試験地	最上支署	81り, ぬ, る, わ, か	14.15	スギ	昭13 (1938)	令37 (2055)	地域研究監
秋62	秋田佐渡スギ林試験地	上小阿仁支署	2025ろ1	2.09	スギ	平10 (1998)	令29 (2047)	森林生態研究G
秋63	スギ人工林強度収穫間伐実施地動態観測試験地	秋 田	1100ほ, へ	5.43	スギ	平22 (2010)	令42 (2060)	森林資源管理研究G
秋64	森吉山麓針広混交林動態試験地	上小阿仁支署	1006と内, 1007 ち1内, 1012は 内, り内, ぬ1内, 1015の内, の1 内, 1036ほ1内, ほ2内, 1037い 内, は内, 1041 ふ内, 1050は2 内, ね内, き内, 1 051ぬ内	10.40	スギ	平22 (2010)	令11 (2029)	森林生態研究G

## (2) 東北森林管理局旧青森分局管内

令和7年3月現在

整理 番号	試 験 地 名	森林管理署	林 小 班	面 積 ha	樹 種	設 定 年 度	終了予 定年度	担当研究室
青2	穴川沢第1ヒバ林成長量試験地	青 森	13ほ	1.10	ヒバ	大3 (1914)	令27 (2045)	育林技術研究G
青3	穴川沢第2ヒバ林成長量試験地	青 森	13へ	8.15	ヒバ	大14 (1925)	令27 (2045)	育林技術研究G
青11	津刈沢スギ種子産地試験地	津 軽	739ほ, へ	4.71	スギ	昭12 (1937)	令29 (2047)	育林技術研究G
青13	冷水沢ヒバ林成長量試験地	下 北	39は	1.33	ヒバ	昭2 (1926)	令47 (2065)	育林技術研究G
青18	乙供アカマツ本数間伐試験地	三八上北	1480い	1.61	アカマツ	昭26 (1951)	令32 (2050)	育林技術研究G
青19	三本木ブナ林総合試験地	三八上北	47り, 53へ〜か	88.64	ブナ, スギ他	昭18 (1943)	令39 (2057)	森林生態研究G
青21	岩手アカマツ立木度比較試験地	岩手北部	1512へ〜ち	3.90	アカマツ	昭18 (1943)	令27 (2045)	育林技術研究G
青35	黒沢尻ブナ林総合試験地	岩手南部	1616ほ1〜る3 る5〜よ14	103.45	ブナ, スギ, 他	昭19 (1944)	令22 (2040)	森林生態研究G
青39	一関アカマツ総合試験地	岩手南部	260い, ろ 260る2〜れ2 260さ 263ろ, ほ	24.75	アカマツ	昭10 (1935)	令17 (2035)	育林技術研究G
青48	栓ノ木沢ヒバ林成長量試験地	三陸北部	323る1	1.43	ヒバ他	昭4 (1929)	令37 (2055)	育林技術研究G
青51	小崩沢カラマツ人工林収穫試験地	遠野支署	42り1-2	2.36	カラマツ	昭36 (1961)	令33 (2051)	森林資源管理研究 G
青54	狼の巣スギ人工林収穫試験地	宮城北部	351わ	1.43	スギ	昭39 (1964)	令30 (2048)	森林資源管理研究 G
青66	中居村ミズナラ天然更新試験地	三陸北部	594ぬ1, ぬ2	2.60	ミズナラ	昭56 (1981)	令39 (2057)	森林生態研究G
青73	カヌマ沢溪畔林試験地	岩手南部	116い2	10.34	トチ, サワグル ミ, カツラ	平1 (1989)	令30 (2048)	育林技術研究G
青75	ブナ天然更新施業地動態試験地	盛 岡	705 ろ1〜ろ4	3.96	ブナ	平11 (1999)	令30 (2048)	森林生態研究G
青79	朝比奈岳ヒバ漏脂病抑制のための密度管理実証試験地	下 北	1044に2	0.20	ヒバ	平25 (2013)	令9 (2027)	育林技術研究G
青82	海岸防災林復旧事業区における植栽木根系動態解析試験地	三八上北	115ろ1, ろ2	0.16	クロマツ	平29 (2017)	令12 (2030)	森林環境研究G
青83	貞任沢ヒバ天然林試験地	遠野支署	229は2, ほ1, り	12.56	ヒバ	令2 (2020)	令52 (2070)	森林生態研究G

### 3 研究の連携・協力

#### 科学研究費助成事業研究課題

職員が代表者

研究課題	研究代表者	事業・プロジェクト名	年度
森林土壌中で生成するモノテルペンが炭素・窒素循環プロセスにおよぼす影響	森下 智陽	学術変革領域研究（A）	6～7
森林皆伐地はニホンジカにどれだけ餌資源を提供しているか？	酒井 敦	基盤研究C（基金）	4～6
標高方向の種子散布が植生の分布変化に与える影響	直江 将司	基盤研究B（基金）	6～10
スギ・カラマツ人工林における広葉樹実生の更新と土壌菌類との関係解明	澤田 佳美	基盤研究C（基金）	6～8
多目的トレイルマッピング：多様な野外活動の適地推定による共存可能性の探索	松浦 俊也	基盤研究C（基金）	2～6
私有林経営における森林資産評価の基準・プロセスの実態解明と統合可能性に関する研究	大塚 生美	基盤研究C（基金）	4～7
ツキノワグマの駆除地域での管理ユニット策定と絶滅危機個体群での有害遺伝子の評価	大西 尚樹	基盤研究B（補助金）	4～6
森林害虫ハバチ類の防除技術開発のための基盤研究：細胞内共生細菌への着目	綾部 慈子	基盤研究C（基金）	4～7
マツ材線虫病の局地的自然終息はどのようにして生じるのか	中村 克典	基盤研究C（基金）	4～6
腐朽初期段階の樹幹傷における菌類相と腐朽進展との関連	鳥居 正人	基盤研究C（基金）	4～6
振動防除システムの構築：振動による樹木害虫の検知と行動制御	高梨 琢磨	基盤研究C（基金）	4～6
マツ樹木を利用するカミキリムシの寄生性線虫はマツノマダラカミキリに寄生できるか？	小澤 壮太	若手研究（基金）	6～8
着実な林地栽培に向けた菌根菌バカマツタケの有機物分解能と厚壁胞子形成能の有効性	山中 高史	基盤研究B（補助金）	5～7

## 4 地域連携のための会議等記録

### 4-1) 令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会総会

- (1) 開催期日：令和6年7月29日～30日
- (2) 開催方法：対面会議（場所：青森県青森市）
- (3) 出席者：森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、青森県産業技術センター林業研究所、岩手県林業技術センター、宮城県林業技術総合センター、秋田県林業研究研修センター、山形県森林研究研修センター、福島県林業研究センター

事務局：青森県産業技術センター林業研究所

#### (4) 議事

- ア 各専門部会からの報告について
- イ 各専門部会における地域重要課題について
- ウ 各専門部会からの協議・提案事項について
- エ その他
  - ①総会及び各専門部会の次期開催県について
  - ②その他

#### (5) 現地検討会

- ア 青森ヒバ林に関する検討
- イ 青森市森林博物館の見学

### 4-2) 令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会 専門部会

#### 1) 企画調整専門部会

- (1) 開催期日：令和6年7月18日
- (2) 開催方法：Web会議
- (3) 出席者：森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、青森県産業技術センター林業研究所、岩手県林業技術センター、宮城県林業技術総合センター、秋田県林業研究研修センター、山形県森林研究研修センター、福島県林業研究センター

事務局：青森県産業技術センター林業研究所

#### (4) 議事

- ア 各専門部会の概要について
- イ 各専門部会における地域重要課題について
- ウ 各専門部会からの協議・提案事項について
- エ その他
  - ①総会について
  - ②各専門部会の次期開催県について
  - ③その他

#### 2) 資源・環境専門部会

- (1) 開催期日：令和6年7月2日～3日
- (2) 開催方法：対面会議（場所：宮城県黒川郡大衡村）
- (3) 出席者：森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、青森県産業技術センター林業研究所、岩手県林業技術センター、宮城県林業技術総合センター、

秋田県林業研究研修センター、山形県森林研究研修センター、福島県林業研究センター

事務局：宮城県林業技術総合センター

(4) 議事

- ア 各機関における主な試験研究課題の報告と情報交換
- イ 地域重要課題の選定とその取り扱い
- ウ 協議・提案事項
- エ 次期開催県について
- オ その他

(5) 現地協議

- ア 生育基盤盛土に造成した海岸防災林における本数調整伐の実施状況について

**3) 特用林産専門部会**

(1) 開催期日：令和6年7月1日～2日

(2) 開催方法：対面会議（場所：岩手県紫波郡矢巾町）

(3) 出席者：森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、青森県産業技術センター林業研究所、岩手県林業技術センター、宮城県林業技術総合センター、秋田県林業研究研修センター、山形県森林研究研修センター、福島県林業研究センター

事務局：岩手県林業技術センター

(4) 議事

- ア 各機関における主な試験研究課題の報告と情報交換
- イ 地域重要課題の選定とその取り扱い
- ウ 次期開催県について
- エ その他

(5) 現地検討会

二戸観光物産センター「カシオペアメッセ・なにやーと」他現地見学

**4) 林木育種専門部会**

(1) 開催期日：令和6年6月28日

(2) 開催方法：Web会議

(3) 出席者：森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、青森県産業技術センター林業研究所、岩手県林業技術センター、宮城県林業技術総合センター、秋田県林業研究研修センター、山形県森林研究研修センター、福島県林業研究センター、新潟県森林研究所

事務局：林木育種センター東北育種場

(4) 議事

- ア 各機関における令和6年度の主な試験研究課題および今後取り組むべき研究テーマ
- イ 協議・提案事項
- ウ 最近の研究成果と情報提供
- エ 林木育種専門部会の次期開催県について
- オ その他



## 5) 森林保全専門部会

- (1) 開催期日：令和6年6月26日～27日
- (2) 開催方法：対面会議（場所：秋田県秋田市）
- (3) 出席者：森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、青森県産業技術センター林業研究所、岩手県林業技術センター、宮城県林業技術総合センター、秋田県林業研究研修センター、山形県森林研究研修センター、福島県林業研究センター

事務局：秋田県林業研究研修センター

### (4) 議事

#### ア 協議事故

- ①各機関における主な試験研究課題の報告と情報交換
- ②地域重要課題の選定とその取り扱い
- ③次期開催県について
- ④その他
  - ・病虫害発生情報交換
  - ・最近の保護上の話題及び研究成果の予報

### (5) 現地検討会

マツ枯れ激害地（秋田県由利本荘市の海岸林）のマツと広葉樹の混交林の現地視察

## 6) 木材利用専門部会

- (1) 開催期日：令和6年6月25日
- (2) 開催方法：Web会議
- (3) 出席者：森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、青森県産業技術センター林業研究所、岩手県林業技術センター、宮城県林業技術総合センター、秋田県林業研究研修センター、山形県森林研究研修センター、福島県林業研究センター

事務局：山形県森林研究研修センター

### (4) 議事

- ア 各機関における主な試験研究課題の報告と情報交換
- イ 地域重要課題の選定とその取り扱い
- ウ 次期開催県について
- エ 次回開催県について
- オ その他
  - ・日本木材学会・北海道東北支部の設立に関する情報提供
  - ・日本木材学会が国際シンポジウム（ISWST2025）と一部並行して開催される事に関する情報提供

## 4-3) 令和6年度林業研究・技術開発推進東北ブロック会議全体会議及び研究分科会

- (1) 開催期日：令和6年10月18日
- (2) 開催場所：森林総合研究所東北支所
- (3) 出席者：林野庁研究指導課、森林総合研究所、森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、森林整備センター東北北海道整備局盛岡水源林整備事務所、東北森林管理局、東北森林管理局森林技術・支援センター、青森県産業技術センター林業研究所、岩手県林業技術センター、宮城県林業技術総合センター、秋田県林業研究研修センター、山形県森林研究研修センター、福島県林業研究

センター

事務局：森林総合研究所東北支所地域連携推進室

(4) 議事

(全体会議)

ア 森林・林業・木材産業分野の研究・技術開発に係る最近の情勢及び林野庁  
の研究・技術開発課題等の紹介

イ 農林水産省の科学技術振興予算に関する情報提供

(研究分科会)

ウ 競争的研究資金等の獲得に向けた情報交換

エ 研究・技術開発推進に向けた情報交換

オ 総合討議

カ 令和8年度林業研究・技術開発推進ブロック会議の開催方法の一部変更について

#### 4-4) 産学官民連携の取り組み

##### 1. 平庭白樺林再生協議会

第一回 日時：令和6年6月4日（火）15:00～17:00

場所：久慈市平庭 平庭山荘ホール

参加者：約20名（久慈市、岩手県、地元関係者、新潟大学、森林総合研究所東北支所他）

第二回 日時：令和6年12月23日（月）13:00～15:30

場所：久慈市山形総合支所およびリモート

参加者：約20名（久慈市、岩手県、地元関係者、新潟大学、森林総合研究所東北支所他）

第三回 日時：令和7年2月28日（金）13:00～15:30

場所：久慈市平庭 平庭山荘ホール

参加者：約20名（久慈市、岩手県、地元関係者、新潟大学、森林総合研究所東北支所他）

主催：久慈市

##### 2. 大学生のインターンシップ受け入れ

・京都大学大学院情報学研究科1名

日時：令和6年7月8日（月）～7月12日（金）

・日本大学生物資源科学部森林学科1名

日時：令和6年8月26日（月）～9月6日（金）

・岩手大学大学院総合科学研究科1名

日時：令和6年9月3日（火）～9月27日（金）

場所：森林総合研究所東北支所、他

##### 3. 令和6年度岩手県森林・林業政策連絡協議会

日時：前期 令和6年7月25日（水）14:00～16:30

場所：前期 サンセール盛岡

参加者：約30名（岩手県内森林管理署、岩手県、森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、森林整備センター東北北海道整備局盛岡水源林整備事務所）

#### **4.令和6年度蔵王地域におけるオオシラビソの被害状況調査WG**

第1回 日時：令和6年9月11日（水）

場所：山形森林管理署＋オンライン

第2回 日時：令和7年3月6日（木）

場所：山形森林管理署＋オンライン

主催：東北森林管理局

参加者：東北森林管理局、山形大学、山形県、宮城県、民間企業、森林総合研究所、同東北支所

#### **5.公開講座「東北のもり」**

日時：令和6年10月12日（土） 10:00～15:30

場所：森林総合研究所東北支所

主催：森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、森林整備センター東北北海道整備局

参加者：33名（主催者側除く）

#### **6.令和6年度蔵王地域におけるオオシラビソの枯損に係る検討会**

日時：令和6年12月3日（火）

場所：：仙台国際センター

主催：東北森林管理局

参加者：約40名（東北森林管理局、山形県、宮城県、民間企業、森林総合研究所東北支所）

#### **7.令和6年度いわて林業アカデミー運営協議会**

日時：令和6年12月18日（水）13:30～15:00

場所：岩手県林業技術センター

参加者：岩手県、岩手大学農学部、盛岡農業高等学校、盛岡森林管理署、岩手県森林組合連合会、岩手県林業労働対策基金、住田町、有限会社フォレストサービス、森林総合研究所東北支所

運営協議委員：森林総合研究所東北支所長

#### **8.令和6年度森林・林業技術交流発表会**

日時：令和7年1月28日（火）～1月29日（水）

場所：東北森林管理局

主催：東北森林管理局

後援：青森県、東北森林管理局林政記者クラブ、（一社）日本森林技術協会など

審査委員：森林総合研究所東北支所長

参加者：約50名（東北森林管理局、局管内森林管理署、森林総合研究所東北支所他）

#### **9.岩手大学次世代アグリイノベーション研究センターシンポジウム**

日時：令和7年2月3日（月）

場所：岩手県水産会館

主催：岩手大学次世代アグリイノベーション研究センター

参加者：90名（岩手大学、名古屋大学、東北電力、森林総合研究所東北支所他）

#### **10.岩手県森林病虫害被害対策推進協議会**

日時：令和7年2月7日（金）

場所：岩手大学教育学部1号館北桐ホール

主催：岩手県農林水産部森林整備課

参加者：約20名（岩手県、岩手大学、森林総合研究所東北支所他）

#### **11.令和6年度山形県農林水産技術会議**

日時：令和7年2月10日（月）

場所：Web会議

主催：山形県農業技術環境課

参加者：約40名（山形県、山形大学、森林総合研究所東北支所他）

#### **12.令和6年度東北森林管理局・森林整備センター東北北海道整備局若手職員向け研究機関業務説明会**

日時：令和7年2月12日（水）10:45～15:00

場所：森林総合研究所東北支所

主催：森林総合研究所東北支所・林木育種センター東北育種場

参加者：17名（主催者側除く）

#### **13.平庭高原白樺林再生協議会・報告会**

日時：令和7年2月28日（金）13:30～15:30

場所：センターハウス平庭山荘ホール（岩手県久慈市山形町）

主催：久慈市役所山形総合支所

参加者：25名程度（久慈市山形総合支所、三陸北部森林管理署久慈支署、地元関係者、森林総合研究所、同東北支所他）

### **4－5）東北国有林森林・林業技術協議会**

（1）日時：令和7年3月10日（月）14:30～16:45

（2）場所：東北森林管理局

（3）主催：森林整備センター東北北海道整備局

（4）参加者：約20名（東北森林管理局、森林総合研究所東北支所、林木育種センター東北育種場、森林整備センター東北北海道整備局）

（5）議事

ア 各機関の取組報告について

①森林総合研究所東北支所

②林木育種センター東北育種場

③森林整備センター東北北海道整備局

④東北森林管理局

イ 意見交換  
ウ その他

## 5 海外派遣

### 技術協力・調査・研究

氏 名	行 先	用 務	期 間	経費負担先
森下 智陽	アメリカ合衆国	ArCSII(北極域研究加速プロジェクト)陸域課題にて実施している、アラスカを拠点とした温室効果ガスおよび水銀観測研究に係るメタン等温室効果ガス動態観測	R6.5.22～ 6.1	海外受託出張／国立研究開発法人海洋研究開発機構
中村 克典	スウェーデン王国	第26回ユフロ世界大会における科研費「材線虫終息」の成果に関する研究発表ならびにマツ材線虫病セッションの運営	R6.6.22～ 7.1	科学研究費基金／材線虫終息
木田 仁廣	スウェーデン王国	国際森林研究機関連合第26回世界大会において研究発表	R6.6.22～ 7.1	運営費交付金／連携推進費
延廣 竜彦	ペルー共和国	政府等外受託事業費による「アンデスアマゾンにおける山地森林生態系保全のための統合型森林管理システムの構築」における現地調査およびC/Pとの打ち合わせ	R6.7.14～ 7.28	政府等外受託事業費／アンデス管理JC
直江 将司	ブラジル連邦共和国	科学研究費補助金基盤研究B「標高方向の種子散布が植生の分布変化に与える影響」の研究成果を国際シンポジウム「8th Frugivores and Seed Dispersal Symposium」において研究発表	R6.8.1～ 8.11	科学研究費基金／標高方向
齋藤 智之	タイ王国	日本学術振興会・科学研究費助成事業「山火事耐性に注目した熱帯季節林のタケ類4種の共存機構」における試料調製および研究打合せ	R6.8.11～ 8.17	科学研究費基金／熱帯タケ類
小野 賢二	ミクロネシア連邦	科研課題「海面上昇下における群落レベルでのマングローブ立地変動とその規定要因の定量分析」に関する現地調査	R6.9.1～ 9.11	科学研究費基金／海面上昇
延廣 竜彦	ペルー共和国	政府等外受託事業費による「アンデスアマゾンにおける山地森林生態系保全のための統合型森林管理システムの構築」における現地調査及びC/Pとの打ち合わせ	R6.9.14～ 9.27	政府等外受託事業費／アンデス管理JC
大西 尚樹	カナダ	科研費「ツキノワグマの駆除地域での管理ユニット策定と絶滅危機個体群での有害遺伝子の評価」の研究成果を第28回国際クマ会議において研究発表、バンフ国立公園でのクマ類調査	R6.9.15～ 9.23	科学研究費基金／ツキノワ管理
小野 賢二	ベトナム社会主義共和国	林野庁補助事業「森林技術国際展開支援事業」における高潮被害に対するマングローブ林の沿岸域防災・減災機能の評価のための地上部バイオマス現地調査及びカウンターパートとの研究打ち合わせ	R6.10.30～ 11.9	林野庁補助事業／森林国際支援

氏 名	行 先	用 務	期 間	経費負担先
齋藤 智之	タイ王国	日本学術振興会・科学研究費助成事業 「山火事耐性に注目した熱帯季節林の タケ類4種の共存機構」における森林 調査および研究打合せ	R6.11.24～ 12.2	科学研究費基金 ／熱帯タケ類
松浦 俊也	カナダ	モントリオールプロセスワーキンググ ループ（MPWG）の要請により、第33回 MPWG及び専門諮問委員会（TAC）会合に 専門諮問委員として出席し、持続的森 林管理のための基準と指標の現況や課 題について意見・情報交換	R7.2.17～ 2.23	運営費交付金／ 連携推進費
岡本 隆	ベトナム社 会主義共和 国	林野庁補助事業による「森林技術国際 展開支援事業」における森林の防災減 災機能による成果の現地での検証	R7.3.2～ 3.8	林野庁補助事業 ／森林国際支援
森下 智陽	スペイン王 国	環境省地球環境局の要請による短寿命 気候強制力因子（SLCF）インベントリ に関する2027年IPCC方法論報告書の第1 回主執筆者会合への出席	R7.3.22～ 3.29	海外受託出張／ 環境省地球環境 局

## 6 研修・講習

### 6-1)派遣

所 属	人 数	研 修 名	始 期	終 期	実 施 機 関
総務課	1	防火管理講習	R6.6.20	R6.6.21	盛岡地区広域消防組合消防本部
総務課	1	安全運転管理者等講習	R6.8.9	R6.8.9	岩手県公安委員会
森林環境研究グループ	1	令和6年度外国語研修(英語)	R6.9.6	R7.2.28	東北支所
総務課	1	第70回東北地区係長級研修	R6.9.10	R6.9.13	人事院東北事務局
チーム長	1	令和6年度外国語研修(英語)	R6.10.1	R7.1.31	東北支所
総務課	1	保護具着用管理責任者講習	R6.11.15	R6.11.15	岩手労働基準協会

### 6-2)受け入れ

所 属	人 数	研 修 内 容	期 間		受 入 先
国立大学法人 岩手大学農学部	1	・動物組織からの遺伝解析手法の習得	R6.5.1	R7.3.31	東北支所 チーム長(動物生態遺伝担当)
国立大学法人 京都大学大学院 情報学研究科	1	・研究情報交換、昆虫かトラップ見学 ・野外昆虫採取トラップ視察及び回収 ・昆虫採取用マレーズトラップ設置 ・森林の地理情報や行政統計の活用	R6.7.8	R6.7.12	東北支所 生物被害研究グループ 森林資源管理研究グループ
国立大学法人 岩手大学大学院 総合科学研究科	1	・収穫試験地調査 ・東北農林専門職大学訪問(研究情報交換)	R6.8.7	R6.9.30	東北支所 産学官民連携推進調整監 森林資源管理研究グループ
日本大学 生物資源学部	1	・実験林の紹介 ・シカ・カモシカの食性調査および試験地の植生調査 ・森林水文観測および観測機器の設置 ・研究成果情報の収集・整理 ・リタートラップ内容物の回収 ・カラマツ林試験地の毎木調査 ・採土円筒を用いた土壌水分量測定のための土壌サンプル採取 ・植栽木の成長量測定と記録、根系の調査	R6.8.26	R6.9.6	東北支所 東北支所長 産学官民連携推進調整監 地域研究監 育林技術研究グループ 森林環境研究グループ 森林資源管理研究グループ
奈良県 森林技術センター	1	・ツキノワグマ組織および糞からの遺伝解析手法の習得	R6.12.2	R6.12.6	東北支所 チーム長(動物生態遺伝担当)



## 7 講師・委員等の派遣

### 7-1) 講師派遣

依 頼 元	内 容	用 務 先	実施月日	所 属	氏 名
岩手県林業技術センター	いわて林業アカデミーの講師	いわて林業技術センター	R6. 4. 12	森林資源管理研究グループ長 育林技術研究グループ	酒井敦 大塚生美
静岡市	ウルシ林造成の指導等講師	静岡市林業センター	R6. 5. 15～17 R6. 9. 30～ 10. 2	生物被害研究グループ	田端雅進
岩手県林業技術センター	いわて林業アカデミーの講師	いわて林業技術センター機械研修棟及び煙山試験地ほか	R6. 5. 21	森林生態研究グループ長	齋藤智之
林野庁森林整備部研究指導課	令和6年度スマート林業推進技術者育成事業に係る林業成長産業化構想技術者育成研修講師	アイーナいわて県民情報交流センターほか	R6. 7. 29～30 R6. 10. 8～9	育林技術研究グループ長	酒井敦
三陸北部森林管理署久慈支署	ナラ枯れ被害対策検討会における講師及び技術指導	道の駅いわて北三陸（久慈広域道の駅）多目的ホールほか	R6. 8. 5	生物被害研究グループ	鳥居正人
喜多市漆栽培振興連絡協議会	福島県補助事業「令和6年度特用樹のめぐみ再発見事業」講師	喜多市役所ほか	R6. 8. 9～10 R6. 9. 9～11 R6. 10. 14～ 16 R6. 12. 17～ 18	生物被害研究グループ	田端雅進
岩手県農林水産部	令和6年度岩手県松くい虫等防除技術講習会講師	岩手県林業技術センター	R6. 9. 4	生物被害研究グループ	中村克典
林野庁森林技術総合研修所	令和6年度木材産業・木材利用（基礎・木質バイオマス利用）研修における「億室バイオマスエネルギー利用の動向と課題」講師	森林技術総合研修所ほか	R6. 9. 11	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
京都大学農学部	生物先端科学特別講義講師	京都大学	R6. 9. 17～21	支所長	山中高史
高知大学	講義「樹病学実験」講師	高知大学	R6. 9. 17～20	生物被害研究グループ	田端雅進
岩手県県北広域振興局保健福祉環境部	令和6年度環境セミナー講師	岩手県立久慈東高等学校	R6. 9. 18	生物被害研究グループ	中村克典
京大大学生態学研究センター	生態学セミナーにおける講演「西太平洋・アジアの生態学・生物多様性科学研究のネットワークと国際共同研究の発展に向けた懇談会」	京大大学生態学研究センター	R6. 9. 20～21	森林生態研究グループ	直江将司
日本樹木医会沖縄県支部	一般社団法人樹木医会沖縄県支部特別講演会における「樹木内部の構造と腐朽病害」の講師	琉球大学	R6. 9. 20～21	生物被害研究グループ	鳥居正人
滋賀県琵琶湖環境部びわ湖材流通推進課	「オーストリア講座」の講師	県庁東館ほか	R6. 10. 30 R7. 1. 28	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
日本漆アカデミー	令和6年度ふるさと文化財の森システム推進事業に関わるシカ被害研修会の講師	浄法寺総合支所	R6. 10. 31	生物多様性研究グループ長	高橋裕史
岩泉町役場	二ホンジカの効率的な捕獲手法や生態、被害防除手法に係る研修の講師	岩泉町役場	R6. 11. 11	生物多様性研究グループ長	高橋裕史
岩手県農林水産部林業振興課	岩手木質バイオマスエネルギーフォーラム講演講師	いわて県民情報交流センター小田島組ホール	R6. 11. 18	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
京都府農林水産部	ウルシ林造成と丹波ウルシ振興策の指導講師	京都府緑化センターほか	R6. 12. 19～ 21	生物被害研究グループ	田端雅進
山田町有害鳥獣被害防止対策協議会	シカ特別対策事業に係る講習会講師	山田町中央コミュニティセンター	R6. 12. 25	生物多様性研究グループ長	高橋裕史
岩手大学	「木質バイオマス利用の課題と展望」講師	岩手大学	R7. 2. 3	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
鳥取県農林水産部	「海岸松林における松くい虫対策を考えるセミナー」講師	エースバック未来中心	R7. 2. 13	生物被害研究グループ	中村克典
岩手県林業技術センター	いわて林業アカデミーの講師	岩手県林業技術センター	R7. 3. 5	森林資源管理研究グループ	大塚生美

## 7-2) 専門委員派遣

依 頼 元	内 容	用 務 先	実施月日	所 属	氏 名
林業経済研究所	『森林所有者による「森林サービス産業」推進事業』委員会	有限会社きたもっく	R6. 4. 17 R6. 5. 30～31 R6. 6. 14	森林資源管理研究グループ長	松浦俊也
青森県農林水産部林政課	深浦町内におけるカミキリムシ痕跡調査の実施	西津軽郡深浦町横磯ほか	R6. 4. 18～19	産学官民連携推進調整監 生物被害研究グループ	中村克典 小澤壮太
秋田県立大学	科学研究費「タケササ類の開花習性とクローン特性の進化的解析」に係る研究打ち合わせ	仙台市内	R6. 4. 26	森林生態研究グループ長	齋藤智之
青森県環境エネルギー部自然保護課	ツキノワグマ個体数推定業務委託審査	青森県庁	R6. 4. 26	動物生態遺伝担当チーム長	大西尚樹
一般財団法人日本緑化センター	抵抗性マツで造成された海岸防災林等の松くい虫被害対策調査事業における検討会	日本緑化センター内会議室ほか	R6. 5. 10 R6. 9. 11 R7. 1. 30	森林環境研究グループ	萩野裕章
岩手県農林水産部森林整備課	「令和6年度いわて森林づくり推進人材育成事業運営業務」の委託に係る企画提案審査委員会委員への就任及び企画提案審査委員会	岩手県水産会館	R6. 5. 13	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
N E D O	NEDO技術委員会	NEDO本部ほか	R6. 5. 16 R6. 10. 3 R6. 10. 9 R6. 11. 7 R7. 1. 20～21 R7. 2. 19	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
林野庁	林野火災跡地における復旧対策に係る現地調査、技術指導	山形県南陽市宮内166林班イほか	R6. 5. 17	育林技術研究グループ長	酒井敦
久慈市山形総合支所産業建設課	令和6年度「平庭高原白樺林再生協議会」	林野庁	R6. 5. 17	森林資源管理研究グループ	大塚生美
公益社団法人国土緑化推進機構	緑と水の森林ファンド業務検討会	砂防会館別館	R6. 5. 21	森林資源管理研究グループ長	松浦俊也
一般社団法人日本森林学会	日本森林学会2024年定時総会	東北支所（オンライン）	R6. 5. 22	支所長 育林技術研究グループ長	山中高史 酒井敦
宮城県環境影響評価技術審査会	宮城県環境影響評価技術審査会	東北支所（オンライン）	R6. 5. 23	育林技術研究グループ	野口麻穂子
秋田県立大学	科学研究費「タケササ類の開花習性とクローン特性の進化的解析」に係る研究調査	長野県信州大学演習林ほか	R6. 5. 30～6. 1	森林生態研究グループ長	齋藤智之
青森県環境エネルギー部自然保護課	令和6年度第1回青森県指定管理鳥獣管理対策評価科学委員会	青森県観光物産館	R6. 6. 5	生物多様性研究グループ長	高橋裕史
東北森林管理局	東北森林管理局における技術開発目標改正案の審議	東北支所（オンライン）	R6. 6. 5	育林技術研究グループ長	酒井敦
岩手県農林水産部	令和6年度第1回いわての森林づくり県民税事業評価委員会	サンセール盛岡	R6. 6. 6	育林技術研究グループ	野口麻穂子
岩手県農林水産部森林整備課	令和6年度森林施業受託促進セミナー運営業務委託企画提案審査委員会委員への就任及び審査委員会	岩手県庁	R6. 6. 13	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
福島県南会津建設事務所	会津縦貫南道路環境検討委員	福島県南会津郡南会津町ほか	R6. 6. 27～28	生物多様性研究グループ	工藤琢磨
久慈市山形総合支所産業建設課	平庭高原白樺林再生協議会	久慈市平庭高原	R6. 7. 25 R6. 9. 11 R6. 11. 14	産学官民連携推進調整 地域研究監 育林技術研究グループ長 育林技術研究グループ 育林技術研究グループ 森林生態研究グループ長 森林環境研究グループ 生物被害研究グループ 生物被害研究グループ 森林資源管理研究グループ長 森林資源管理研究グループ	野口麻穂子 澤田佳美 齋藤智之
秋田県生活環境部	令和6年度第1回秋田県野生鳥獣保護管理対策検討委員会	オンライン（東北支所）	R6. 7. 5	生物多様性研究グループ長	高橋裕史
山形県環境影響評価審査会事務局みどり自然課	山形県環境影響評価審査会	東北支所（オンライン）	R6. 7. 10	生物多様性研究グループ	工藤琢磨
秋田県立大学	科学研究費「タケササ類の開花習性とクローン特性の進化的解析」に係る現地調査	長野県信州大学演習林ほか	R6. 7. 15～16	森林生態研究グループ長	齋藤智之
秋田県林業研究研修センター	和6年度秋田県林業研究研修センター研究運営協議会	秋田県林業研究研修センター	R6. 7. 22	育林技術研究グループ長	酒井敦
固体バイオ燃料標準化協議会	ISO/TC238国内審議委員会（第3回）	日本木質ペレット協会	R6. 7. 23	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
林野庁研究指導課	農林水産祭第1回林産分科会	農林水産省	R6. 7. 23	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
青森県農林水産部林政課	令和6年度青森県松くい虫被害対策検討会	青森県庁	R6. 7. 26	生物被害研究グループ	中村克典

依 頼 元	内 容	用 務 先	実施月日	所 属	氏 名
東北森林管理局	令和6年度第1回東北森林管理局事業評価技術検討会	東北森林管理局	R6. 7. 26	支所長	山中高史
国立研究開発法人海洋研究開発機構	ArCSII（北極域研究加速プロジェクト）陸域課題に係る大気サンプル中に含まれるメタン濃度の分析	森林総合研究所（つくば）	R6. 7. 29～8. 2	森林環境研究グループ	森下智陽
岩手県県北広域振興局農政部二戸農林振興センター	令和6年度二戸地区松くい虫被害対策連絡会議	二戸地区合同庁舎	R6. 7. 30	生物被害研究グループ	中村克典
岩手県農林水産部	いわての森林づくり県民税事業評価委員会	盛岡市アイナいわて情報交流センターほか	R6. 7. 30	育林技術研究グループ	野口麻穂子
久慈市山形総合支所産業建設課	平庭高原白樺林再生協議会専門部会	センターハウス平庭山荘こぶしの間	R6. 8. 7	地域研究監 育林技術研究グループ長 育林技術研究グループ 育林技術研究グループ 森林生態研究グループ長 森林環境研究グループ 生物被害研究グループ 森林資源管理研究グループ長 森林資源管理研究グループ	阿部俊夫 酒井敦 野口麻穂子 澤田佳美 齋藤智之 延廣竜彦 鳥居正人 松浦俊也 大塚生美
岩手県環境生活部	令和6年度シカ管理検討協議会	東北支所（オンライン）	R6. 8. 21	生物被害研究グループ長	高橋裕史
秋田県漆器工業協同組合	ウルシ林造成に係る指導	秋田県漆器工業協同組合ほか	R6. 8. 21	生物被害研究グループ	田端雅進
公益社団法人日本農林漁業振興会	農林水産祭中央審査委員会林産分科会	農林水産省ほか	R6. 8. 28	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
林業経済研究所	森林所有者による森林サービス産業推進事業調査委員会	汐留ビジネスフォーラム	R6. 8. 28～30 R7. 2. 27 R7. 3. 10	森林資源管理研究グループ長	松浦俊也
沖縄県農林水産部	令和6年度第1回久米島町松くい虫防除対策会議	東北支所（オンライン）	R6. 8. 28	生物被害研究グループ	中村克典
岩手県県北広域振興局林務部	久慈地区ナラ枯れ被害対策連絡会議	久慈地区合同庁舎	R6. 9. 11	生物被害研究グループ	中村克典
東北森林管理局	令和6年度蔵王地域におけるオオシラビソの被害状況調査等ワーキンググループ	山形森林管理署	R6. 9. 11 R7. 3. 6	生物被害研究グループ	綾部慈子 磯野昌弘
岩手県林業研究研修センター	令和6年度岩手県林業技術センター試験研究評価に係る外部評価協議会	岩手県林業技術センター	R6. 9. 13	支所長	山中高史
宮城県環境影響評価技術審査会	技術審査会	東北支所（オンライン）	R6. 9. 17	育林技術研究グループ	野口麻穂子
一般社団法人プラチナ構想ネットワーク	依頼者主催のプラチナ森林産業イニシアティブ森林・林業革新分科会	株式会社三菱総合研究所ほか	R6. 9. 18 R6. 10. 11 R6. 11. 7 R6. 12. 3 R7. 2. 20 R7. 3. 25	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
報農会	第39回報農会シンポジウム	北とびあ「つつじホール」	R6. 9. 25	生物被害研究グループ長	高梨琢磨
秋田県教育委員会	令和6年度秋田県カモシカ保護指導委員	秋田市ほか	R6. 10. 3～4 R6. 10. 22	生物多様性研究グループ長	高橋裕史
秋田県漆器工業協同組合	ウルシ林造成に係る指導	秋田県漆器工業協同組合ほか	R6. 10. 10	生物被害研究グループ	田端雅進
国立研究開発法人防災科学技術研究所	防災科学技術研究所令和6年度成果発表会	東京国際フォーラムホール	R6. 10. 11	森林環境研究グループ長	萩野裕章
宮古農林振興センター	宮古・下関伊地区ナラ枯れ被害対策連絡会議	宮古港フェリーターミナル	R6. 10. 16	生物被害研究グループ	中村克典
株式会社ネクスコエンジニアリング東北	猛禽類保全対策検討業務に係る委員長等事前説明への出席 現地検討会	東北支所（会議室）ほか	R6. 10. 17 R6. 11. 21～22	生物多様性研究グループ	工藤琢磨
東北森林管理局	令和6年度第1回東北森林管理局保護林管理委員会	東北支所（オンライン）	R6. 10. 23	森林生態研究グループ長	齋藤智之
東北森林管理局	令和6年度治山・林道工事コンクール	東北森林管理局	R6. 10. 23～24	地域研究監	岡本隆
林野庁	令和6年度林業普及指導員資格試験審査委員	岩手県民会館	R6. 10. 25 R6. 10. 29	支所長 産学官民連携推進調整監 地域研究監	山中高史 久保山裕史 酒井敦 岡本隆
一般財団法人林業経済研究所	令和6年度「緑の雇用」担い手確保支援事業の評価等に関する調査の検討会	鹿角森林組合	R6. 10. 25 R6. 10. 30 R6. 11. 6	森林資源管理研究グループ	大塚生美
未来工学研究所	「中長期的に振興すべき科学技術等の将来予測に関するアンケート調査」における「農林水産・食品・バイオテクノロジー分科会」	東北支所（オンライン）	R6. 10. 28	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
環境省自然環境局生物多様性センター	重要生態系監視地域モニタリング推進事業（森林・草原調査）検討会	東北支所（オンライン）	R6. 11. 1	森林生態研究グループ 育林技術研究グループ	直江将司 野口麻穂子
秋田県生活環境部	令和6年度第2回秋田県野生鳥獣保護管理対策検討委員会	秋田県庁	R6. 11. 6	生物多様性研究グループ長	高橋裕史

依 頼 元	内 容	用 務 先	実施月日	所 属	氏 名
林野庁	林野庁中央国有林材供給調整検討委員会	林野庁	R6. 11. 6	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
新エネルギー・産業技術総合開発機構	「新エネルギー等のシーズ発掘・事業化に向けた技術研究開発事業」委員会	新エネルギー産業技術総合開発機構ほか	R6. 11. 7	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
岩手県環境保健研究センター	研究評価協議会	岩手県環境保健研究センター	R6. 11. 8	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
岩手県立久慈東高等学校	スマート林業教育推進事業における出前授業	岩手県立久慈東高等学校	R6. 11. 18	育林技術研究グループ長	酒井敦
日本森林技術協会	「令和6年度木材需要の創出・輸出力強化対策補助事業「地域内エコシステム」展開支援事業のうち実施計画策定支援」に係る検討委員会への出席同事業に係る地域協議会、勉強会及び報告会	日本森林技術協会ほか	R6. 11. 27 R7. 2. 18 R7. 3. 11	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
岩手県農林水産部	令和6年度第4回いわての森林づくり県民税事業評価委員会	サンセール盛岡	R6. 11. 27	育林技術研究グループ	野口麻穂子
盛岡森林管理署	北上川上流国有林の森林計画に関する住民懇談会	アイーナいわて県民情報交流センター	R6. 11. 28	支所長	山中高史
東北森林管理局	令和6年度蔵王地域におけるオオシラビソの枯損に掛かる検討会	仙台国際センター「萩」	R6. 12. 3	支所長 森林生態研究グループ 生物被害研究グループ	山中高史 齋藤智之 綾部慈子 磯野昌弘
東京都小笠原支庁	東京都賀島列島植生回復事業に係る現地視察会及び検討会	東京都小笠原村父島ほか	R6. 12. 3～8 R7. 3. 6	育林技術研究グループ長	酒井敦
岩手県	岩手県森林審議会	エスポワールいわて大ホール	R6. 12. 11	支所長	山中高史
岩手県立久慈東高等学校	白樺の種まきの技術指導	岩手県立久慈東高等学校	R6. 12. 17	育林技術研究グループ	野口麻穂子
宮城県	宮城県森林審議会及び森林保護部会	宮城県庁行政舎	R6. 12. 17	生物被害研究グループ	綾部慈子
東北地方環境事務所	第25回白山山地世界遺産地域科学委員会	弘前文化センター	R6. 12. 23	生物多様性研究グループ長	高橋裕史
秋田県農林水産部	秋田県内の民有林における地すべり防止工事工法検討の指導・助言	秋田県庁舎	R7. 1. 9～10	地域研究監	岡本隆
東北森林管理局	令和6年度森林・林業技術交流発表会審査委員会	東北森林管理局	R7. 1. 28～29	支所長	山中高史
東北森林管理局	令和6年度森林・林業技術交流発表会	東北森林管理局	R7. 1. 28～29	支所長	山中高史
株式会社グリーンシグマ	環境省白山山地ニホンジカ越冬地調査及び対策方針検討等業務事業にかかるヒアリング	東北支所（オンライン）	R7. 1. 31	生物多様性研究グループ長	高橋裕史
県南広域振興局農政部遠野農林振興センター林務課	遠野地区森林病害虫被害対策連絡会議	遠野地区合同庁舎	R7. 2. 3	生物被害研究グループ	中村克典
国立研究開発法人海洋研究開発機構	ArCSII（北極域研究加速プロジェクト）陸域課題に係る大気サンプル中に含まれるメタン濃度の分析	森林総合研究所（つくば）ほか	R7. 2. 3～7 R7. 2. 26～27	森林環境研究グループ	森下智陽
秋田県生活環境部	令和6年度第3回秋田県野生鳥獣保護管理対策検討委員会	秋田県議会棟	R7. 2. 4	生物多様性研究グループ長	高橋裕史
沖縄県農林水産部	令和6年度第2回久米島町松くい虫防除対策会議への出席	東北支所（オンライン）	R7. 2. 5	生物被害研究グループ	中村克典
日本木材総合情報センター	顔の見える木材供給体制構築事業に係る国産材の安定供給体制の構築に向けた中央需給情報連絡協議会	東北支所（オンライン）	R7. 2. 6	産学官民連携推進調整監	久保山裕史
岩手県農林水産部	岩手県森林病害虫被害対策推進協議会	岩手県水産会館	R7. 2. 7	生物被害研究グループ	中村克典
小笠原自然文化研究所	現地視察、技術会合	東京都小笠原村賀島列島の媒島ほか	R7. 2. 10～15 R7. 3. 6	森林生態研究グループ長	齋藤智之
岩手県森林審議会	岩手県森林審議会松くい虫対策部会	エスポワールいわて	R7. 2. 13	支所長	山中高史
林野庁近畿中国森林管理局	上秋津区域の治山対策に関する技術検討会	和歌山県田辺市上秋津	R7. 2. 14	地域研究監	岡本隆
岩手県農林水産部	令和6年度第5回いわての森林づくり県民税事業評価委員会	岩手県庁	R7. 2. 14	育林技術研究グループ	野口麻穂子
神奈川県藤沢土木事務所	令和6年度海岸緑地整備工事 県単（その12）湘南海岸砂防林飛砂防備機能観測業務における関係機関協議への出席および現地調査	藤沢土木事務所ほか	R7. 2. 17 R7. 3. 12	森林環境研究グループ長	萩野裕章
東北森林管理局	令和6年度第2回東北森林管理局事業評価技術検討会	東北森林管理局	R7. 2. 21	支所長	山中高史
茨城県政策企画部県北振興局茨城県農林水産部	令和7年度いばらき漆振興コンソーシアム生産部会	常陸太田合同庁舎	R7. 2. 25	生物被害研究グループ	田端雅進

依 頼 元	内 容	用 務 先	実施月日	所 属	氏 名
久慈市山形総合支所産業建設課	第2回平庭高原白樺林再生協議会	センターハウス 平庭山荘	R7. 2. 28	産学官民連携推進調整 地域研究監 育林技術研究グループ長 育林技術研究グループ 育林技術研究グループ 森林生態研究グループ長 森林環境研究グループ 生物被害研究グループ 生物被害研究グループ 森林資源管理研究グループ長 森林資源管理研究グループ	久保山裕史 酒井敦 野口麻穂子 澤田佳美 齋藤智之 延廣竜彦 中村克典 鳥居正人 松浦俊也 大塚生美
筑波大学生命環境系	JSPS研究拠点形成事業・アジア・アフリカ学術基盤形成型のセミナーワークショップでの研究発表	ブチホテル・ゾ ンタック他	R7. 3. 2～4	動物生態遺伝担当チーム長	大西尚樹
東北森林管理局	令和6年度第2回東北森林管理局保護林管理委員会	東北支所（オン ライン）	R7. 3. 5	森林生態研究グループ長	齋藤智之
東北森林管理局	森林計画等に関する検討会	東北森林管理局	R7. 3. 7	支所長	山中高史
山形県知事	令和6年度「樹氷復活県民会議」	山形県庁	R7. 3. 14	支所長	山中高史
宮城県環境影響評価技術審査会	宮城県環境影響評価技術審査会	東北支所（オン ライン）	R7. 3. 26	育林技術研究グループ	野口麻穂子
森林立地学会	森林立地学会理事会	東北支所（オン ライン）	R7. 3. 26	立地評価研究担当チーム長	小野賢二
岩手県農林水産部	令和6年度第6回いわての森林づくり県民税事業評価委員会	トーサイクラ シックホール岩 手	R7. 3. 27	育林技術研究グループ	野口麻穂子

## 8 視察・見学

区 分	員数（人）
国	0
都道府県	0
林業団体	0
一般	36
学生	3
計（国内）	39
国外	3
合計	42

## 9 刊行物

名 称	出版回数	印刷部数/回	巻（号）	備考
森林総合研究所東北支所年報	1	オンラインジャーナル	令和6年版 No.65	年刊
フォレストウインズ	4	1,000	No.98～No.101	季刊

## 10 図書

（単行書）

令和 6 年度受入						年度末蔵書数 （管理換による除籍・ 収書等を含む）
和 書			洋 書			
購 入	寄 贈	計	購 入	寄 贈	計	
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
15	2	17	6	0	6	17,862

（雑誌等逐次刊行物）

令和6年度受入									年度末蔵書数 (管理換による除籍・ 収書等を含む)
和書			洋書			製本冊数			
購入	寄贈	計	購入	寄贈	計	購入	寄贈	計	
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	
211	242	453	0	0	0	0	0	0	冊 36,190

（その他の資料）

令和 6 年度受入						年度末蔵書数 （管理換による除籍・ 収書等を含む）
和 書			洋 書			
購 入	寄 贈	計	購 入	寄 贈	計	
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
1	10	11	0	0	0	9,558

## 11 諸 会 議

会 議 名	開催年月日	主 催	開催場所
1 令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会 木材利用専門部会	6.6.25	山形県森林研究研修センター	Web会議
2 令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会 森林保全専門部会	6.6.26～ 6.6.27	秋田県林業研究研修センター	秋田県秋田市
3 令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会 林木育種専門部会	6.6.28	林木育種センター東北育種場	Web会議
4 令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会 特用林産専門部会	6.7.1～ 6.7.2	岩手県林業技術センター	岩手県紫波郡矢巾町
5 令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会 資源・環境専門部会	6.7.2～ 6.7.3	宮城県林業技術総合センター	宮城県黒川郡大衡村
6 令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会 企画調整専門部会	6.7.18	青森県産業技術センター林業研究	Web会議
7 令和6年度東北林業試験研究機関連絡協議会 総会	6.7.29～ 6.7.30	青森県産業技術センター林業研究	青森県青森市
8 令和6年度東北育種基本区特定母樹等普及促進会議 及び林業研究・技術開発推進東北ブロック会議 育種分科会	6.10.17	林野庁 林木育種センター東北育種場	岩手県盛岡市
9 令和6年度林業研究・技術開発推進東北ブロック会議 全体会議及び研究分科会	6.10.18	林野庁 森林総合研究所	岩手県盛岡市
10 東北支所業務報告会	6.12.12～ 6.12.13	東北支所	岩手県盛岡市
11 東北地域評議会	7.2.17	東北支所	岩手県盛岡市

## 12 諸 行 事

行 事	年月日	開催場所
1 森林研究・整備機構 公開講座「東北のもり」 (東北支所、東北育種場、森林整備センター東北北海道整備局 盛岡水源林整備事務所 合同開催)	6.10.12	森林総合研究所東北支所
2 令和6年度森林・林業技術交流発表会	7.1.28～ 7.1.29	東北森林管理局
3 岩手県林業技術センター・森林総合研究所東北支所・ 林木育種センター東北育種場合同成果報告会	中止	岩手県内における高病原性鳥インフルエンザ発生のため
4 東北国有林森林・林業技術協議会	7.3.10	東北森林管理局





---

令和7年12月24日発行  
**令和7年版**  
**森林総合研究所東北支所年報 NO. 66**

編集発行 国立研究開発法人森林研究・整備機構  
森林総合研究所東北支所

〒020-0123

岩手県盛岡市下厨川字鍋屋敷 92-25

TEL 019(641)2150(代)

FAX 019(641)6747

<https://www.ffpri.go.jp/thk>

---

